平成１６年度　考古学講座

神奈川の横穴墓

平成１７（2005）年２月６日（日）

神奈川県考古学会

開　催　次　第

日　時　*平成１７年２月６日（日）　午前１０時１５分～午後４時２０分*

会　場　*かながわ県民センター　２Ｆ　ホール*

―発表次第―

１０：１５　**開会挨拶**　　**神奈川県考古学会　会長　寺田　兼方**

午前の部　　１０：２０～１２：００

１０：20～10：30　**主旨説明**

10：30～11：00　**学史　神奈川の横穴墓**
上田　薫

11：00～11：30　**横穴墓と地域社会**
長谷川　厚

11：30～12：00　**県内横穴墓の出現と終焉**
田村　良照

午後の部　　13：00～16：15

13：00～13：30　**横穴墓出土の土器**
鶴間　正昭

13：30～14：00　**横穴墓と火葬墓**
村田　文夫

14：00～14：30　**横穴墓の線刻画**
柏木　善治

14：30～15：00　**相模の古墳・横穴墓と古代氏族**
須藤　智夫

ミニシンポジウム
15：15～16：15　**神奈川の横穴墓**

１６：１５　**閉会挨拶**　　**神奈川県考古学会　副会長　伊東　秀吉**

紙上発表　　**神奈川の横穴墓の様相**　　**池上　悟**

目　次

学史　神奈川の横穴墓 …… 上田　薫 … 1
横穴墓と地域社会 …… 長谷川 厚 … 9
県内横穴墓の出現と終焉 …… 田村 良照 … 21
横穴墓出土の土器 …… 鶴間 正昭 … 31
横穴墓と火葬墓 …… 村田 文夫 … 41
横穴墓の線刻画 …… 柏木 善治 … 51
相模の古墳・横穴墓と古代氏族 …… 須藤 智夫 … 63
神奈川の横穴墓の様相 …… 池上　悟」 … 77

学史　神奈川の横穴墓

上田　薫

横穴墓研究の流れ

１７９７（寛政９年）　『東海道名所図会』に、横浜市西区の浅間神社付近の横穴墓が人穴として図入りで掲載される（図１）。1834・6（天保５・７年）刊行の『江戸名所図会』にも類似した図が掲載される。

１８３０（天保元年）　林述斎等により『新編武蔵風土記稿』が編纂され、幕府に上程される。現在の横浜・川崎市内に所在する 11 の村の記事に横穴墓に関すると考えられる記載あり。成合村（現横浜市青葉区成合町、図２）と、新羽村（現横浜市港北区新羽町、図３）の横穴墓から出土した遺物の図が掲載されている。新羽町の洞穴にしいては昔の地位のある者を葬った古墳であると言い切っている。

１８４２（天保 12 年）　『新編相模風土記稿』が編纂される。淘綾郡山西村（現二宮町山西）の記事に横穴墓の存在を裏付ける記載。

１８８３（明治 16 年）　冨士谷孝雄「中村穴居考」を『学芸史林』12 号に執筆。

１８８３（明治 16 年）　坪井正五郎・白井光太郎、横浜市南区中村町の踏査。白井没後の 1932(昭和 7 年)に「武蔵国久良郡石川中村穴居記」が『ドルメン』９号に掲載される（図４）。

１８８６（明治 19 年）　浅井郁太郎「浦賀近傍の横穴」を『東京人類学会報告』10 号に執筆。

１８８７（明治 20 年）　岡本高介他「登戸在生田村横穴」を『東京人類学会報告』16 号に執筆。

１８８７（明治 20 年）　山崎直方「大磯町近傍にある横穴塚穴の話」を『東京人類学会雑誌』20 号に執筆。

１８８７（明治 21 年）　山崎直方「武蔵国橘樹郡大曾根太尾二村の横穴」を『東京人類学会雑誌』21 号に執筆。

１８８７（明治 21 年）　若林勝邦「相模國淘綾郡大磯及び山西村横穴実見記」を『東京人類学会雑誌』22 号に執筆。

１８９８（明治 31 年）　八木奘三郎「相模國大磯在山背村萬田八重窪の横穴」を『東京人類学会雑誌』152 号に執筆。

１９００（明治 33 年）　大野延太郎による中井町雑色横穴墓群の調査と報告（『東京人類学会雑誌』172 号・図５）。

１９０７（明治 40 年）　横浜市鶴見区駒岡に所在する岩瀬山横穴墓群が坪井正五郎により調査され、後にこれが「お穴様」として信仰の対象となり、一日に二、三万人もの参拝者があったとの記録が残る。

１９０８（明治 41 年）　Ｎ・Ｇ・モンロー、著書 Prehistoric Japan の中で大磯町に所在する揚

谷寺谷戸横穴墓群の写真を掲載（図６）。横穴墓群は県の史跡として現存（図７）。

１９２２（大正 11 年）　赤星直忠「相模大濱の横穴」を『民俗と歴史』第７巻３号に執筆。これ以降赤星は、三浦半島を中心としたフィールドで精力的に調査・踏査を行う。活動の記録はノートに克明に記載されている（図８）。

１９２４（大正 13 年）　赤星直忠「馬らしき？陰刻ある横穴」を『考古学雑誌』第 14 巻 11 号に執筆。

１９５４（昭和 29 年）　赤星直忠日本考古学協会の場で、横穴墓形態の編年模式図を公表。

１９５６（昭和 31 年）　横浜市青葉区に所在する市ヶ尾横穴墓群が調査される。前庭部の発見。

１９５９（昭和 34 年）　赤星直忠著『鎌倉市史』考古編が刊行される。編年模式図の一般化。

１９６６（昭和 41 年）　阿部黎子「横穴被葬者に於ける一考察」を『考古学雑誌』第 52 巻２号に執筆。

１９７０（昭和 45 年）　赤星直忠著『穴の考古学』が学生社より刊行される。

１９７５（昭和 50 年）　新人物往来社出版の『歴史読本』第 20 巻８号に、全国の横穴墓の分布と概要をまとめた「横穴墓総覧」が掲載される。関東地方は吉田章一郎が執筆。

１９７６（昭和 51 年）　杉山博久『平塚市文化財調査報告書』第 12 集に「神奈川県横穴墓関係文献目録」を執筆。

１９８０（昭和 55 年）　金井塚良一『台地研究』№20 に「関東地方横穴墓地名表」を執筆。

１９８０（昭和 55 年）　『えとのす』第 13 号が東国横穴墓特集を組む。武蔵大学人類・考古学研究会による「神奈川県における横穴墓の分布」を掲載。

１９８０（昭和 55 年）　池上悟、ニューサイエンス社より『横穴墓』を刊行。汎日本的視野で横穴墓が論じられる。

１９８０（昭和 55 年）　杉山博久『古代探叢』に、「神奈川の横穴墓群―その素描―」を執筆。

１９８３（昭和 58 年）　斎藤忠・杉山博久編『日本横穴地名表』が吉川弘文館より刊行される。

１９８５（昭和 60 年）　平塚市博物館で、特別展『相模川流域の横穴墓』が開催される。明石新執筆による図録の刊行。

１９８８（平成元年）　上田薫『國學院大學考古学資料館紀要』第５輯に「神奈川県の横穴墓研究の歴史」を執筆。

１９９１（平成３年）　茨城県考古学会主催の、関東横穴墓遺跡検討会が開催される。

１９９４（平成６年）　神奈川県考古学会主催の、入門考古学講座『横穴墓とは何か』が開催される。

１９９５（平成７年）～２００２（平成 14 年）

神奈川県立埋蔵文化財センター・(財)かながわ考古学財団の古墳時代研究プロジェクトによる「横穴墓の研究(1)～(8)」が『かながわの考古学』第５集『研究紀要』１～７に掲載される。

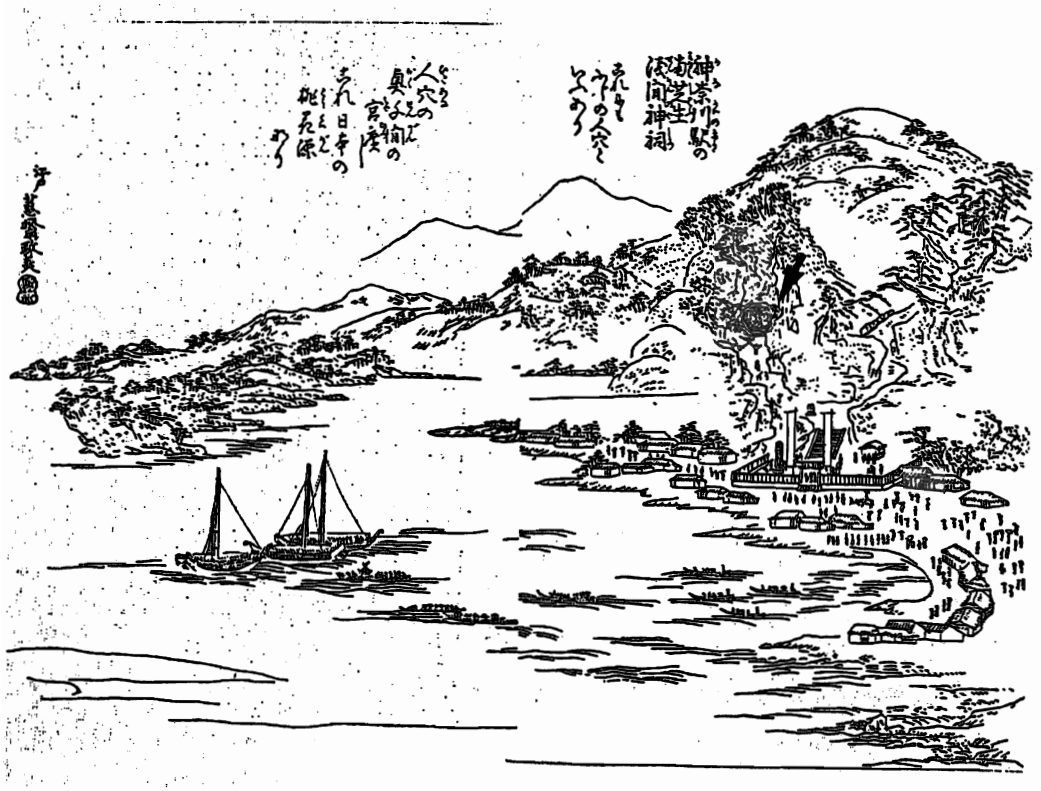


図１　横浜市中区浅間神社付近の人穴（東海道名所図会より）

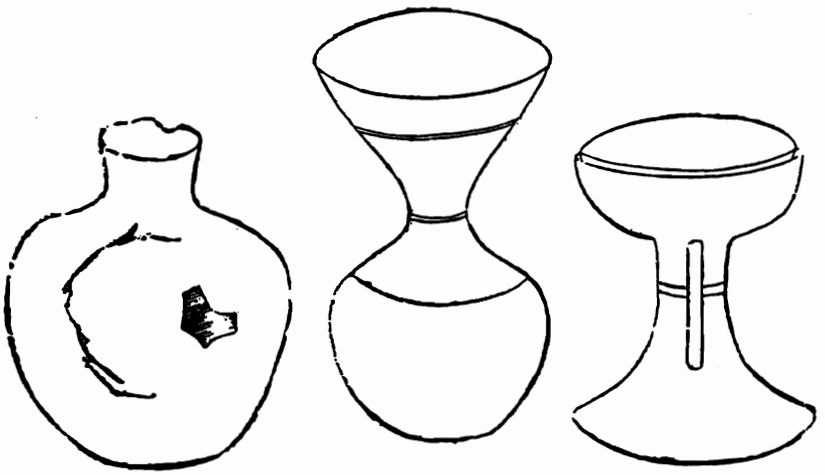
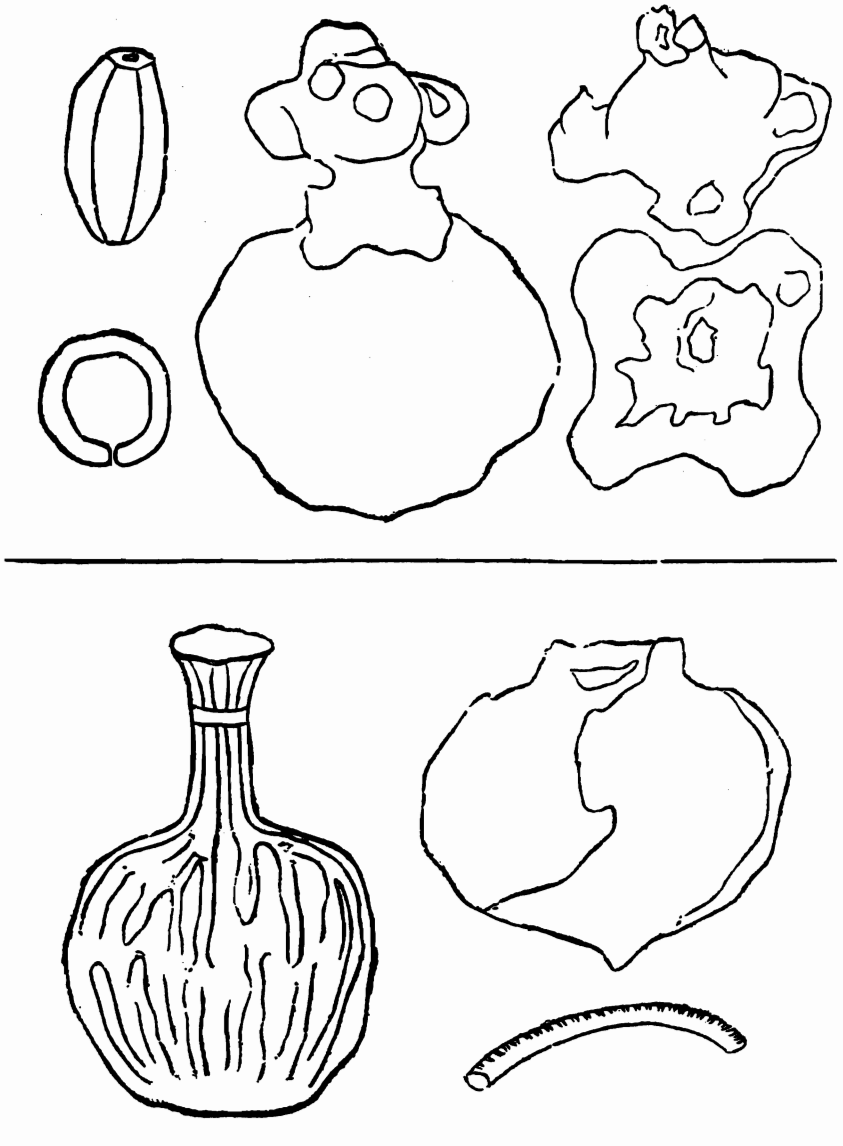


図２　成合村出土遺物（新編武蔵風土記稿より）



舊家者百姓佐右衛門氏ヲ西山ト云今村ノ年寄役チツトム文化十一年三月佐右衛門カ居宅ノ後背ノ崖崩レシニ洞穴顯ル入口五尺餘内ノ廣サハ二間四方ヘカリナリ其處ヨリ圖ノ如キ物ヲ堀出セリイカニモ古物ニシテ何レモ鎮器ニテ陰然ト金色ヲ含メリ或ハ赤銅ノ圓鏡大小アリテ金着ノ類ナリ又ヘ水晶ニテ其形ヘ今云緒ヒメノ如クシテ長サ一寸五分許ナルモノ五ツ此外陶利ノ類ニテ花立ト云モノヽ如キヲ素燒ニシタル物アリミナ朽損シタレハ今ヨリハ全體ヲミルコトアタハス接スルニコレ古墳ナルヘシソノカミ國守郡司ナトヲ葬セシ所ナルヘシ續日本紀ニ養老五年十月喪事ニハ其轜車靈車馬具不得刻鏤金玉繪餝丹青素薄是用卑謙是順トアレハ其頃マテハ金玉ヲチリハメシ帶物ヲセシカ後制セラレヌ此鐵器ノ類モ其カミ帶セシ物ナランカ其圖右ニノス

図３　新羽村出土遺物（新編武蔵風土記稿より）

図4　中村町の横穴墓（ドルメン6号より）

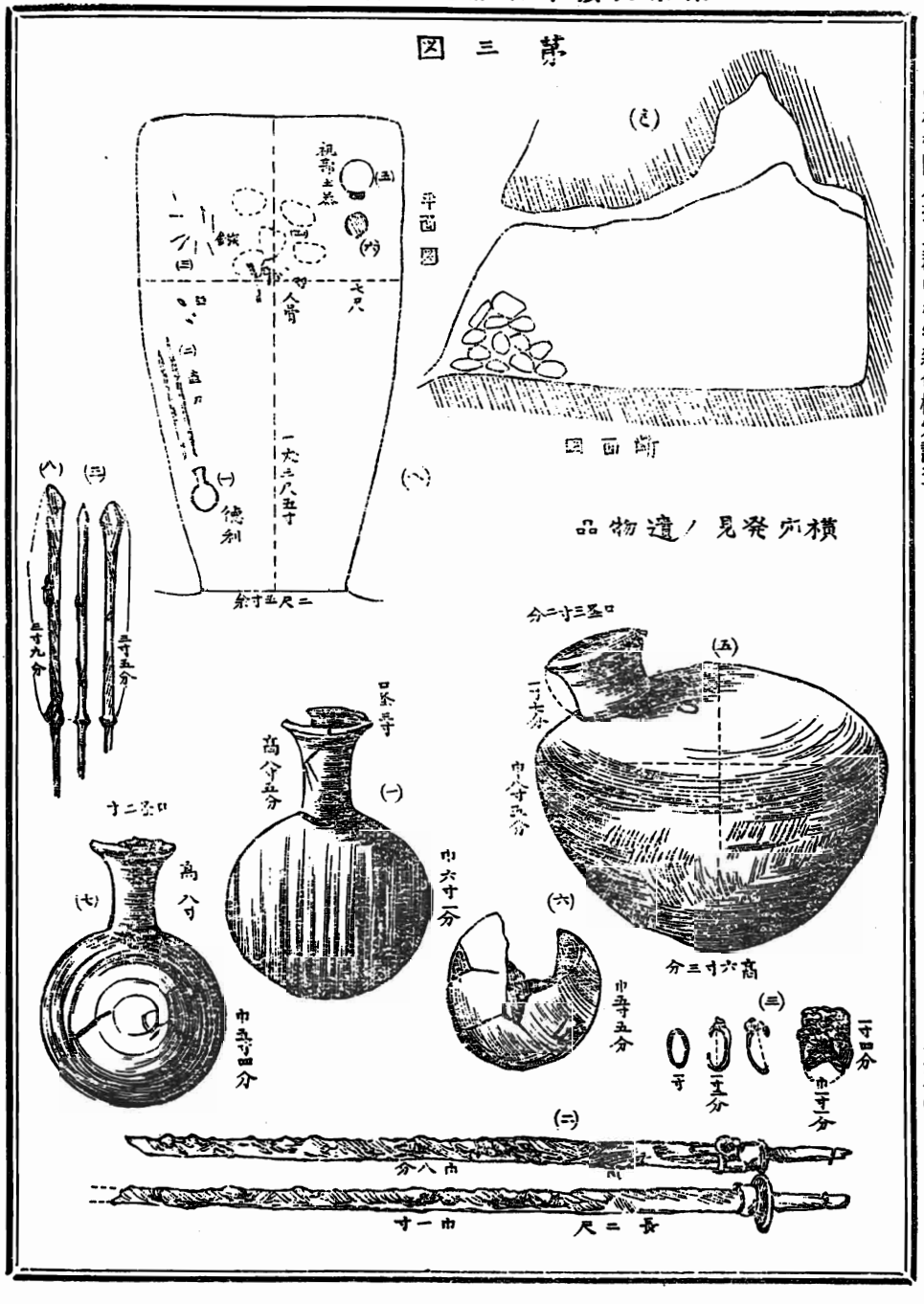
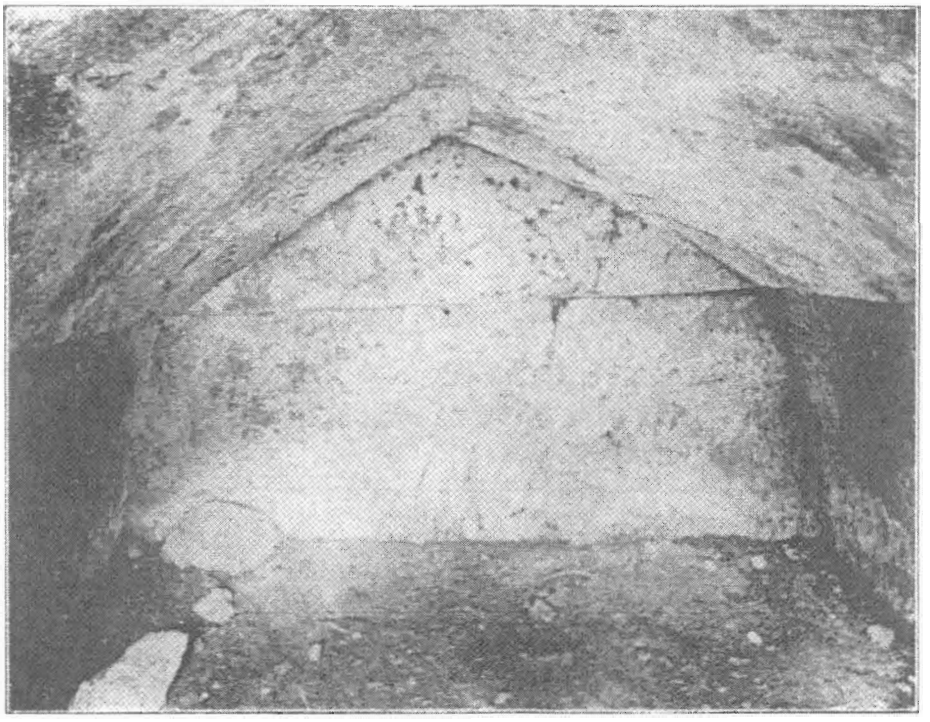


図5　雑色横穴墓群出土遺物（東京人類学雑誌第172号より）



INTERIOR OF SAME BURIAL CAVE.
(House Design)
PROVINCE OF SAGAMI.

図6　Prehistoric Japanに掲載された大磯の横穴墓

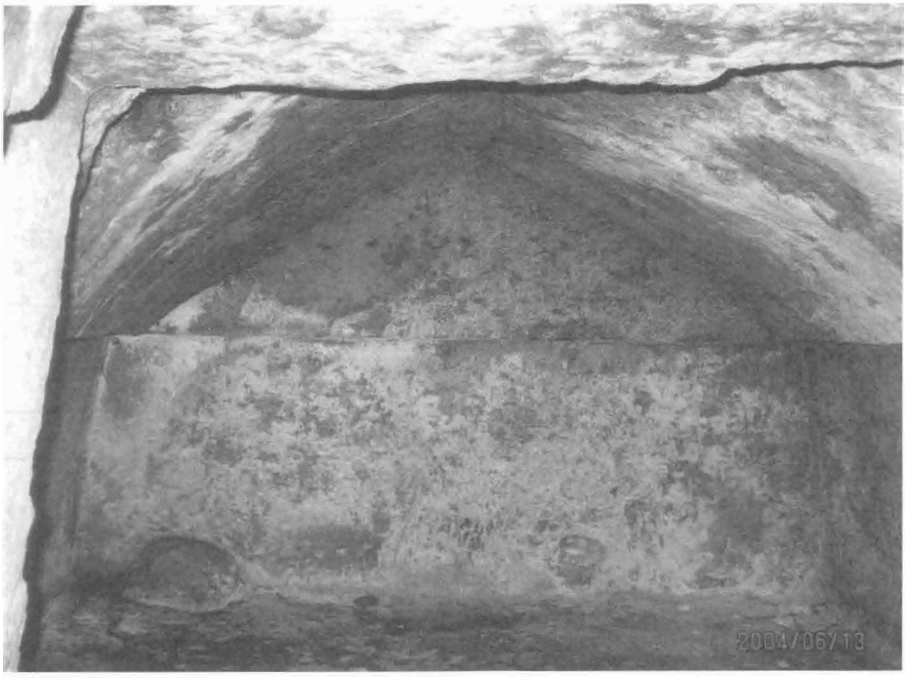


図7　揚谷寺谷戸11号横穴墓（2004年6月写）

図8　横須賀市高山横穴墓群の踏査記録（赤星ノートより）

横穴墓と地域社会

長谷川　厚

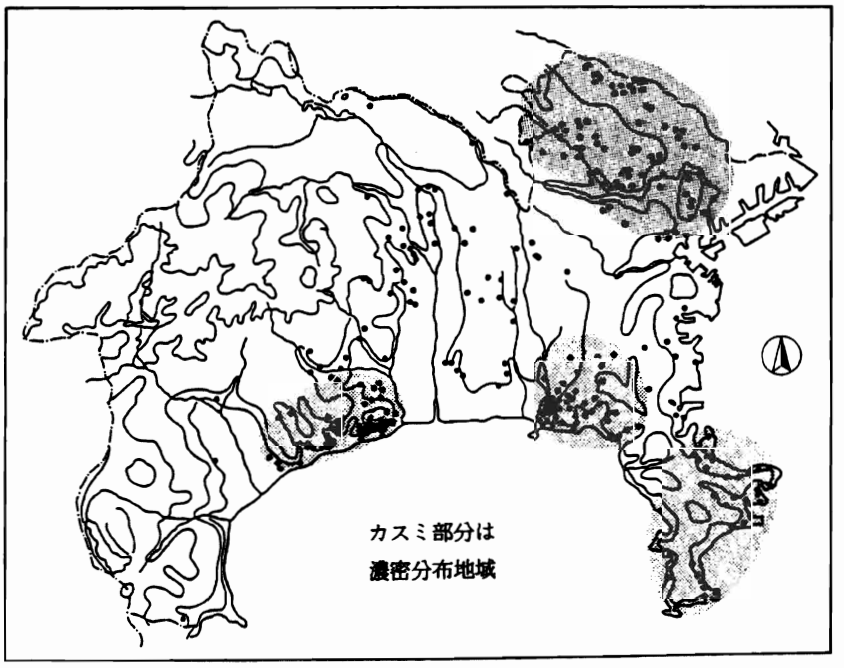
はじめに

神奈川県内の横穴墓の歴史的特性を考えていく方法には、二つの切り口があると考える。一つは、古墳時代の墓制の一種として列島内での墓制の動向の比較検討の一環として、神奈川県への導入、定着の意義を全国的な視野でその特性を考えていく方法がある。もう一つは、墓自体への属性について多元的に検証を加え、地域社会に展開した墓制としての特性を見極めることで、横穴墓の歴史的意義を検討しようとする見方である。両者ともに、必須の分析手法であることはいうまでもないが、ここでは各種属性の検証を通じて地域的特性を明らかにし、神奈川県で古墳時代の墓制として定着した横穴墓が、地域社会の中でどのような意義をもっていたのかということを考えみたい。

1. 分布の特性

横穴墓の分布の特性として、まず指摘できることは一定の集中地域が形成されていることである。県内では、大磯丘陵周縁、藤沢市～鎌倉市南部の柏尾川流域およびその支流、三浦半島の丘陵部、鶴見川・多摩川中流域に面する丘陵部にとくに集中する分布がみられる（第１図）。こうした分布傾向の特質を検証していく場合、構造的上の特徴に起因する分布の偏在性という見方をするか、墓制が導入、定着する過程でのそれを受容した地域の歴史的要因とみるか、という二つの検証方法がある。

築造・構造的上の特徴とは、墳丘を築造しないで、横穴を掘削して埋葬施設を構築する構造の横穴墓は、台地上や丘陵頂部に構築することは、無理なことで、丘陵斜面や台地段丘面に立地は限定されることになる。さらに、掘削する地質は、埋葬空間を構築するに耐える堅牢さをもつことが必要条件となる。



第１図　県内における横穴墓の分布　（上田 1989 を一部改変）

こうした観点から集中する範囲をみていくと、いずれも第三紀に形成された泥岩、砂岩層が隆起した丘陵斜面ないしは河岸段丘の関東ローム層下部の比較的堅牢な地質が分布する範囲と一致しており、造墓の必要条件の一つとして地理的条件が関連していることがうかがえる。

しかし、集中する範囲の密集度は群を抜いていることは明白であるが、全体分布を眺めてみると、地理的条件に合致する範囲に限定されているわけでもないことも指摘できる。例えば、大磯丘陵の東周縁の平塚市西部から秦野盆地を流れる金目川流域では、万田八重窪、根坂間横穴墓群が大磯丘陵側に集中する範囲の一角に形成されるが、その上流の段丘崖面にも岩井戸、欠の上横穴墓群が造られ、必ずしも地理的条件の制約をうけたものでないことがわかる。こうした現象は、相模川中流域の厚木市、海老名市、座間市、境川中流域の大和市、横浜市でも同様である。

築造・構造的上の特徴での特質との関連から検証すると、地理的条件に合致する範囲に確かに濃密に横穴墓は分布するが、それ以外の河川流域の段丘崖面に点々と形成されることから、必要条件であったが、それ以外に横穴墓の造営に働いた要因が存在したことが推測される。この要因とは、二つ目の検証に該当する横穴墓の受容をめぐる歴史的要因ではないかと思われる。

神奈川県内で横穴墓の造営された古墳時代後期には、横穴墓以外の墓制として墳丘が築造され横穴式石室を埋葬施設として有する古墳が同時期に採用されていた。なぜ、高塚古墳と横穴墓の二つの墓制が併存していたのか、これが横穴墓の受容をめぐる歴史的要因を考える上で鍵となる。横穴墓と高塚古墳の分布傾向をみると、一例として県西部の酒匂川流域では高塚古墳が卓越している地域がある一方で、大磯丘陵のように圧倒的な横穴墓群の形成される地域が確認できる。これを両極として、先に例示した大磯丘陵周縁の東側にのびる金目川流域のように、下流の大磯丘陵東部の周縁での横穴墓の集中地区を経て、上流には岩井戸、欠の上横穴墓群が構築され、さらに台地上には、二子塚古墳、下大槻欠の上遺跡１号墳の高塚古墳が築造されているのである。いわば、横穴墓、高塚古墳の二つの墓制の併存する地域がみられるのである。こうした現象をもとに、県内の各墓制の分布の傾向を大局的に分類してみると、

①横穴墓が主体となる地域＝大磯丘陵周辺、藤沢市南部地域、三浦丘陵東京湾～相模湾沿岸
多摩川～鶴見川流域

②高塚古墳が主体となる地域＝足柄平野、秦野盆地、相模原台地

②横穴墓と高塚古墳が併存する地域＝上記以外の内陸部の河川流域の地域

という具合にとらえることができる。これら三類型の分布の傾向から考えると、二つの墓制の導入、定着の歴史的要因としては、選択的に実施された地域があるとともに、併存する地域が比較的広い範囲でみられることから、二つの墓制が背反する関係ではなく融和、柔軟な状況で受容されたことをうかがわせるのである。しかし、この中でもとくに目を引くのは、大磯、藤沢、三浦の海岸沿岸部に形成され横穴墓群の圧倒的な数は秀でており、墓制の導入への主導的な役割を感じさせる。

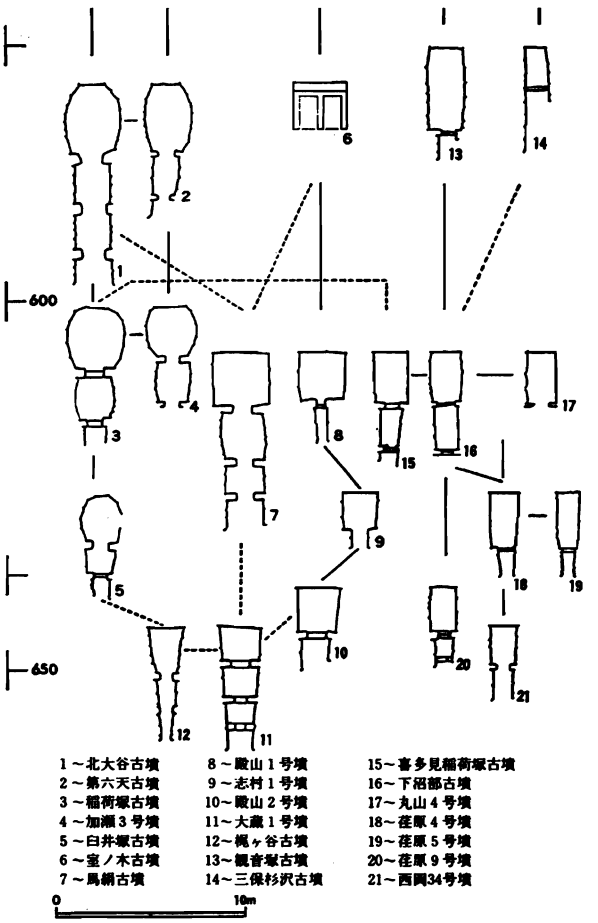
いずれにしろ、なぜ三類型が形成される状況となったのか、選択的に導入された墓制が何を基準に選択されたのか、さらに掘り下げて検証してみる必要がある。

2. 構造、形態からの検証

分布の特性検討から、横穴墓の県内への導入、定着には高塚古墳との歴史的関連性の中で考えていく必要性があることが判明した。それでは、次に墓制の具体的な内容について比較してみることにする。横穴墓、横穴式石室を有する高塚古墳とも、埋葬施設の構成としては現世と他界の境目となる羨門部を境にして、羨道部を経て遺体を安置する玄室から構成され、さらに羨門前面には葬送儀礼を行うための前庭部が形成される。両者とも、葬送儀礼に対する観念と儀式の内容には大きな違いがなく、同様の儀礼を前提に考えられた埋葬施設であったことがうかがえる。

横穴墓と横穴式石室の埋葬施設の関連性について、東京都と神奈川県の一部を含む多摩川下流域と鶴見川の横穴式石室について分析をした先行研究を参考にすると（池上1982）、切石使用の石室構造を有する横穴式石室が横穴墓の構造との関連性が指摘できるとされている。その分析によると、6世紀後半の初現的な石室には胴張り形態で複室構造の石室、矩形（方形）の単室構造の石室、長方形平面の単室構造で羨道部と玄室の境をもち両袖ないしは片袖構造の石室、胴張り構造と矩形平面の折衷形態の石室の4つの基本形があり、これら石室の構築企画が横穴墓の構築に対して関連性を有しているとしている（第2図）。その根拠として、出土土器などから年代比定が可能なこれら高塚古墳の石室の企画の基準尺度を高麗尺に近似する35cm、唐尺に近似する30cm、唐小尺に近似する25cm、晋尺に近似する24cmと基準尺度を抽出し、4つの石室の基本形は6世紀第4四半期に晋尺から高麗尺へ、7世紀四半期では高麗尺から唐尺へ、7世紀第2四半期では唐尺から唐小尺へと基準尺度が変遷することを指摘した（第1図）。

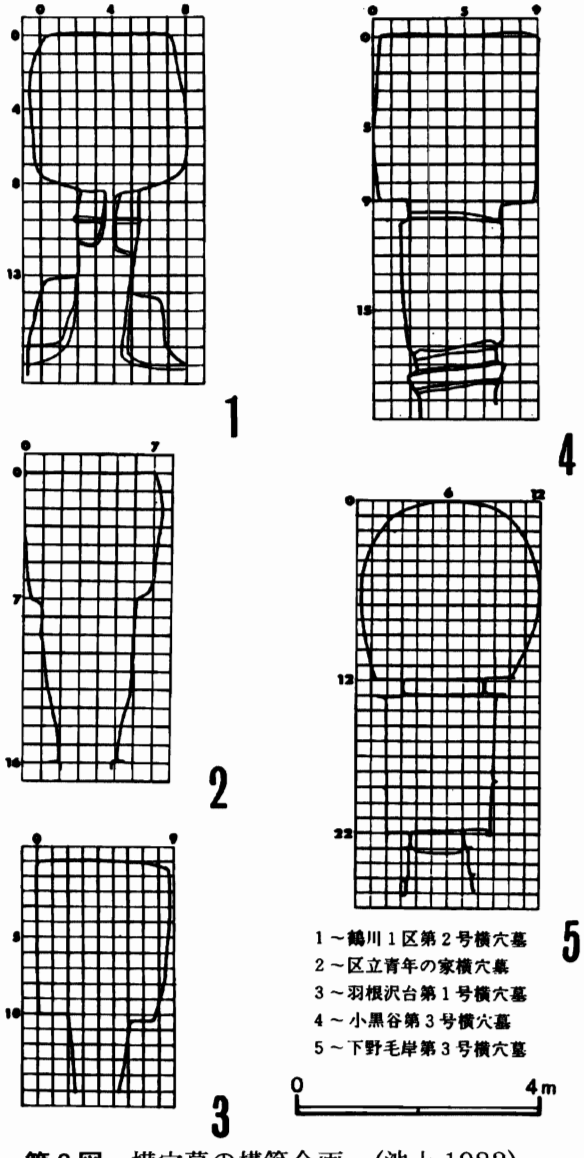
こう石室の企画の基準尺度の変遷を同地域の横穴墓の企画と比較してみたところ、小黒谷第3号横穴墓の場合（第2図4）、玄室平面は270cmの矩形（方形）の形態で、30cmを基準尺度（唐尺）とする9×9の平面企画が考えられる。同様に、玄室平面形が矩形（方形）でやや形態は崩れて粗雑であるが、鶴川1区2号墳（第2図1）や区立青年の家横穴墓（第2図2）でもほぼ30cmを基準尺度として、8×8と7×7の企画が想定できるとしている。小黒谷第3号墓では基準尺度の時期と一致する7世紀中葉の年代が推定されている。



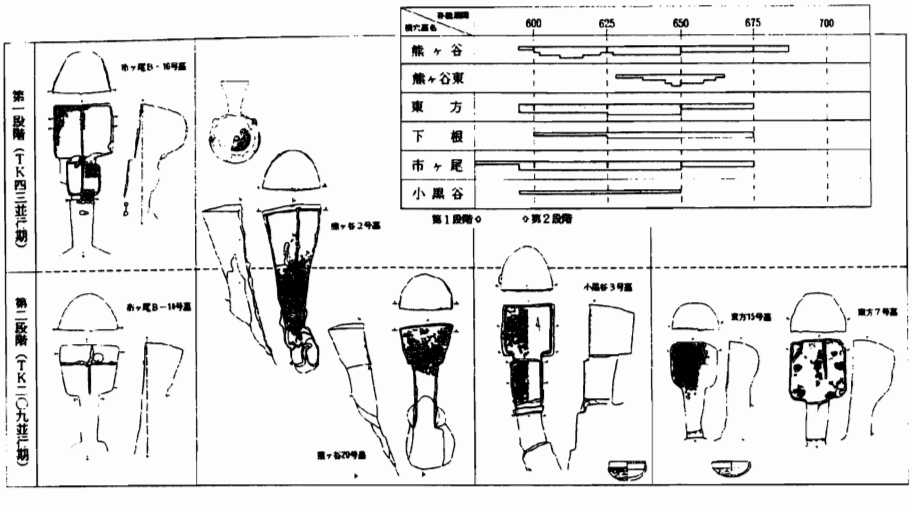
第2図　多摩川流域の切石使用の石室の変電（池上1982）

一方、4つの基本形となる石室の中で胴張り複室構造をもつ石室との関連では、下野毛第3号横穴墓（第2図5）は奥室がローム層を掘削し側壁に膨らみをもつ平面形で、前室、羨道を切石積みで築造し、横穴墓と石室の折衷形の構造となる。構築基準尺度は25㎝（唐小尺）の使用が想定され、奥室は12×12の構築企画となるとしている。その後、こうした比較検討を鶴見川流域の熊ヶ谷、熊ヶ谷東横穴墓群で同様の方法を用いて検討を行なった。石室と横穴墓の構築企画の親縁性から横穴墓の出現・展開に関して石室構築技術を持つ専門工人集団の存在を想定し、工人の石室構築から横穴墓構築への転出と、武蔵国を単位とする工人集団の移動があったしたのである。

この検証は、横穴墓の特性を考える上で非常に示唆的であり、横穴墓の導入の契機を考える上で重要な意味をもっている。しかし、切石使用の石室は4つの基本形から始まり、構築の基準尺度を変えて7世紀後葉近くまで、いわば相似形の平面形態が維持されて構築されるのであるが、横穴墓の場合、初期ないしは7世紀代の特定の横穴墓に断片的といってよい状況で反映されているようにもみえる。



第3図　横穴墓の構築企画　（池上 1982）



第4図　鶴見川流域における群形成期の横穴墓の導入段階とその様相　（近野 1985）

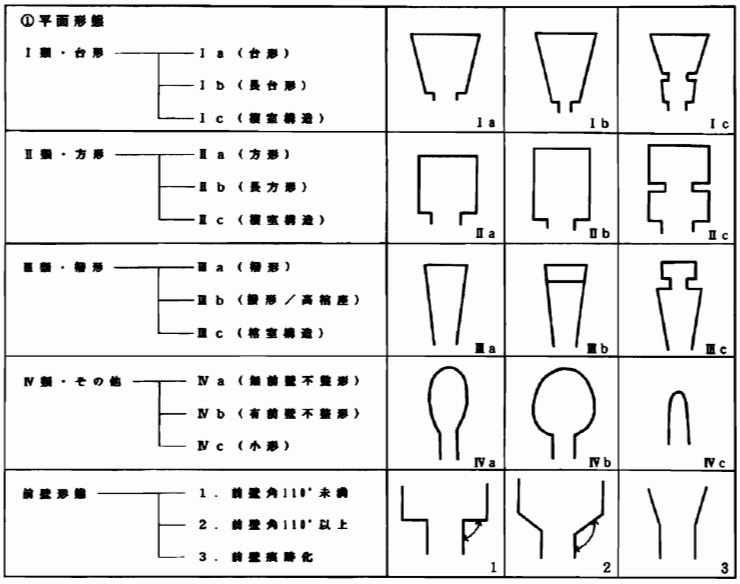
鶴見川流域の主要な横穴墓の時期と変遷を検討した成果によれば（近野1995）、第一段階とした導入期の6世紀後半代の横穴墓の構造は、市ヶ尾B-16号墓のように複室構造をもつ先の石室の構築企画の則った形態であるが、次の段階の7世紀代に入ると同横穴墓群の中の市ヶ尾B-14号墓のように構造、形態の構築企画の基準尺度の変化というあり方ではなく、企画基準の違いともいうべき違いを示している。同流域の他の横穴墓群でも、熊ヶ谷2号墓は長台形、先にふれた小黒谷3号墓は方形、東方横穴墓群では方形を基調としながらも、やや変形した形態となる（第3図）。

こうした7世紀前半を境にした横穴墓の構造の断続性からみて、一元的な横穴墓の導入、定着という単純な流れでなく、第一段階とした初現期の単発的な導入期と第二段階とした各地域に多くの群として形成される横穴墓の本格的導入期という二つの波があったとも推測されるのである。また、各種の形態が併存することから、一系統の工人の構築技術ではなく、複数の系統の構築技術が関わっていたことが考えられるのである。先の石室との構築企画の兼ね合いで考えれば、初現期には石室構築技術を持つ専門工人関与が集中的に行われ、7世紀以降は断片的な様々な関与とそれが在地化した構築技術が主流となったと理解することも可能であろう。

在地化した構築技術はいかなる状態で横穴墓に反映されていくのであろうか。先の鶴見川流域の横穴墓の二段階での変化からもうかがえるように、構築の効率化による形態の変化、本来的な機能の喪失による省略化、さらに別系統の工人の関与による新しい形態の出現となって現れると考えられる。

こうした形態の多様化の分析は、横穴墓の導入から地域での展開の様相を把握する基礎的な作業となる。多様化の分析作業を整理するためには、その整理のための基準が第4図で示したものである（古墳時代プロジェクトチーム1995）。紙数の関係でここでは平面形態だけを示すにとどまるが、平面形態の特徴は構造上での特徴となる天井形態や横断面形態、内部の埋葬施設のあり方など多岐にわかる状況が関連しており、単純に平面形態のみの変遷で形態の多様化の分析は整理できるものではない。

ここでは横穴墓の導入と地域での広がりの状況を考えるという観点で、平面形態をみていくと、横穴墓の平面形態は、大きく4つに分類することが可能である。Ⅰ類は、台形基調とする平面で、形態の特徴から3種に細分することができる。Ⅱ類は、方形基調とする平面で、形態の特徴から3種に細分することができる。Ⅲ類は、台形基調とする平面であるが、Ⅰ類との違いを



第5図　横穴墓形態・構造分類試案　（古墳1995）

玄室部と羨道部との境界を区画する前壁の有無ないしは、形骸化という観点で区別をした。Ⅳ類は、規模が縮小化、玄室形態も形骸化した形態で明らかにⅠ～Ⅲ類とは一線を画することができる特徴をもっている。出土土器も古墳時代末期から奈良時代に至る土器が出土することから、横穴墓末期の形態であることが理解される。

ここで焦点となるのは、Ⅰ～Ⅲ類である。Ⅱ類は、先にふれたように多摩川流域に展開した切石使用の石室の構築企画を基準として構築されたものである。形態の特徴のａ～ｃは方形、長方形、複室構造の３種があり、折衷形のものは含めていない。Ⅰ類はⅡ類の奥壁幅に対して前壁幅が相対的に狭く、台形の平面形態となるが、形態の特徴はⅠ類と同様になることから、系譜的な連続性をみることができる一群である。Ⅲ類はⅠ類との比較で分別できる一面をもつ形態で、羨道部と玄室部の境の前壁の退化、痕跡化を辿り、最終的には区画がなくなり、羨道部と玄室部の一体化により長台形が際立つ形態になる。また、長台形化とともに奥壁幅も狭くなり、玄室入口から奥壁まで直線的ないわば傾斜をもつ「トンネル」状の形態になる。

こうした横穴墓の基本分類の特徴を先にふれた横穴墓への切石使用石室の構築技術の導入と鶴見川流域の横穴墓の具体例な変遷の検討を踏まえて、その関連と系譜を考えていくと、

①Ⅱ類は、石室構築技術と関連をもつ形態で、地域の横穴墓の導入期での核となる性格をもつ。

②Ⅰ類は、Ⅱ類の玄室部を中心とする変化が特徴となり、前壁の形骸化、省力化の過程をうかがえることから、構築技術の在地化のプロセスとも判断できる。

③Ⅲ類は、Ⅰ類からの前壁の形骸化とそれに伴う玄室部の形態、横断面形態の変化という側面をもち、Ⅱ類から時間的な推移による横穴墓普及期の一層の構築技術の在地とみることができる。

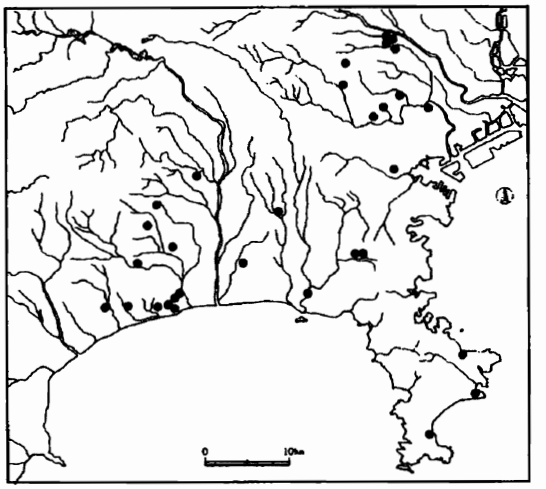
④Ⅱ類→Ⅰ類→Ⅲ類という時系列に沿った横穴墓の推移の一面をもつが、同時期での併存という事実を踏まえて、Ⅰ類、Ⅲ類の導入、定着に際しては構築技術の在地化という面だけでなく、異系統の構築技術が断続的に導入された可能性がある。

こうした点から導入期でのⅡ類の動向、Ⅱ類からⅠ類への転換のあり方、Ⅲ類の広がりと特徴を中心に再び、地域での分布状況と照らし合わせてみれば、冒頭に指摘した分布全体の傾向性の歴史的要因の核心に迫れるのではないだろうか。

しかし、現在的な基準での構造、形態の分類による比較での判断にも自ずから限界があることも、明確にしておこう。例えば、Ⅱ類とⅠ類を分ける方形と台形の区別の基準も、計測値では奥壁幅に対して前壁幅が狭くなり台形になるが、図上の視覚的感覚では方形ととらえてよいものがある。また、前壁の形骸化の過程（第４図）も漸次的であることはいうまでもないことだが、どの状況が前壁が形骸化したものなのかの判断を明瞭にし難い。玄室部と羨道部との取り付きの角度が90°前後で明確に認識されるものから無前壁に至るまでの過程で中間の取り付き角度をもつ形態があまりにも多い。具体的に集計をすると、110°を境に取り付き角度をここでは３つに分けているが、根拠としては弱いきわめて弱いのである。こうした状況が横穴墓の独特の構築に際してのブレというもので、その特徴でもあろう。

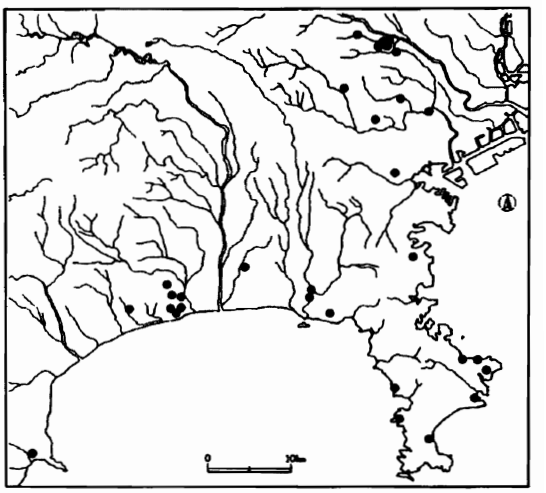
３.構造、形態と分布の関連性

まず、構造、形態の特徴を分布との関連で検討した研究（古墳プロジェクトチーム 1995～1999）を参考に導入期とした石室の構築技術と密接に関連しているⅡ類の分布状況について概観してみていくことにする。Ⅱ類は玄室部の平面の特徴から方形のⅡa類と長方形のⅡb類に分類され、それぞれの共通点と相違点を指摘することができる。なお、複室構造をもつⅡc類は先の例とした挙げた横浜市市ヶ尾B-16号墓のみで、多摩川から南部では導入されなかったことがわかる。



第６図　Ⅱａ類横穴墓の分布　（古墳 1997）

Ⅱａ、ｂ類の共通する分布のあり方としては（第６・７図）、横穴墓が密集する大磯丘陵、藤沢から鎌倉市、三浦半島、多摩川～鶴見川流域にそれぞれ分布していることが指摘できる。この様相は、いずれの地域も導入期に際しては、石室構築技術の導入という契機で横穴墓が導入されたことを示している。しかし、分布の密度の観点からは、これら４つの地域の中でも、大磯丘陵、多摩川～鶴見川流域がやや他の地域より高い点が注目される。



第７図　Ⅱｂ類横穴墓の分布　（古墳 1997）

こうしたⅡ類全体の分布のあり方で、平面形態が方形のａ類（第６図）と長方形のｂ類（第７図）の分布を比較すると、ｂ類は４つの集中地域にほぼ限定される状況であるが、ａ類は大磯丘陵の北部、相模野台地、藤沢市～横浜市南部の丘陵地帯に分布の範囲を拡大する点が違いとして指摘することができる。

Ⅱａ類が拡大する範囲はいずれも内陸部で、分布の特性でふれたように高塚古墳との混在地域に該当する。この違いで想定できるケースとしては、

①導入期の横穴墓の構築企画の中で、高塚古墳との併存の構築地域では方形企画の横穴墓の構築技術が選択的に導入された

②横穴墓の主体とする地域では方形、長方形平面の構築企画が明らかに併存している

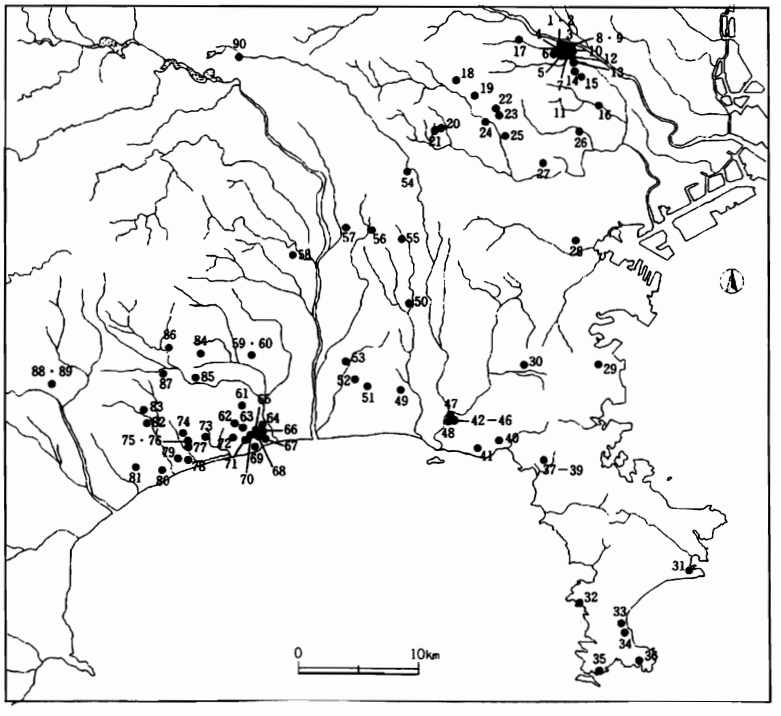
③こうした点から両者の違いは時間的な推移による分布傾向の違いとみるよりも、導入期には複数系統の企画構築技術の入ってきた

ということが現象面を通じては推測されるのである。

こうした現象面での理解をもう一歩進めると、同時期に複数系統の企画構築技術を有していた４つの横穴墓密集地域から外縁部の内陸部へ導入期からさほど間を置くことなく、技術の移転、構築工人の派

遣、小地域の首長に新たな墓制として選択されたなど様々な状況が推測されるが、こうした様々な要素をもって拡大していったと考えられる。この点から、導入期の初期は横穴墓が密集する地域が、横穴墓の構築技術の受容の窓口の役割を果たしていたことが推測される。

次に、玄室部が奥壁幅に対して前壁幅が狭くなる台形基調の形態としたⅠ類について、Ⅱ類との比較を主要な観点としてみていくことにする。分布を概観すると、基本的にⅡ類同様に４つの横穴墓の集中地域を中心に全県的に広がりがみられるが、Ⅱ類の分布状況と比較すると面的な広がりを認めることができる（第７図）。広がりの特徴として、面的な広がりは相模川・境川・鶴見川などの主要河川中流の支流河川に沿って、分布の範囲を拡大する状況をみることができる。



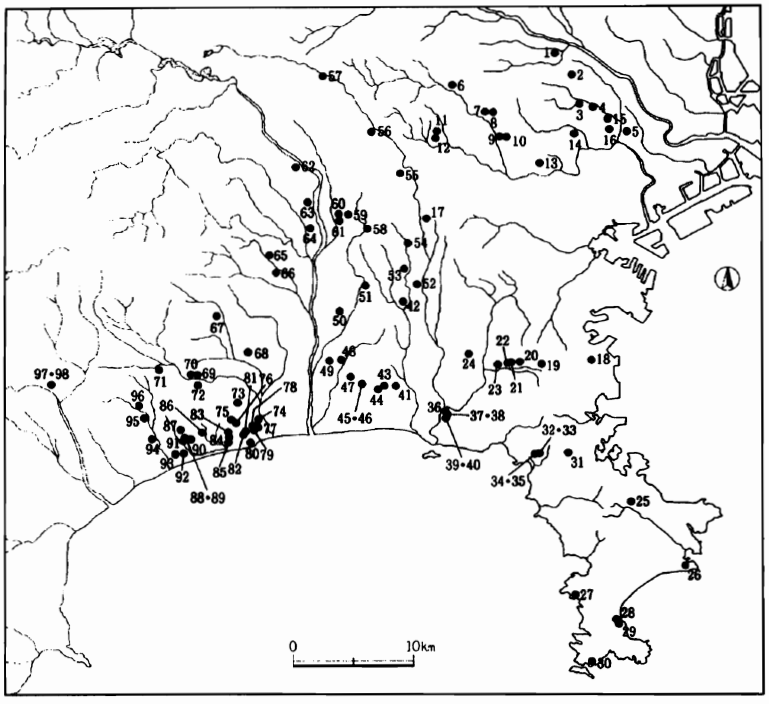
第８図　Ⅰ類横穴墓の分布　（古墳 1996）

各地の状況を具体的にみると足柄平野ではⅡ類同様に一部を除いて認められないが、平野東側の大磯丘陵の西側に接する二宮町～国府津の河川流域に新たな構築されている。大磯丘陵の東側ではⅡ類の分布とほぼ同様な広がりであるが、群内の形成数は増加する傾向にある。相模川では中流の支河川で出現し、東側の引地川では上流域で新たに構築され、境川流域でも中流から上流にかけて出現している。相模川、引地川、境川の横穴墓群は相模野台地の河岸段丘の崖面に構築されており、いずれも類似した立地環境である。藤沢から三浦半島のかけては立地は海岸性丘陵の斜面に追加して構築され、面の拡大より群形成の密集度は高まる状況で増加する。大磯丘陵でも西側での分布の範囲の拡大が認められるが、現形成の密集度は一層高まる状況である。

鶴見川流域でも構築される範囲が中流から上流の支流域に一層広がるが、流域面積が狭いため、支流間の集合によって密集度が高まる状況とも考えられる。川崎市域の多摩川支流域では切石使用の横穴式石室とともに、比較的限定された範囲でⅡ類と同程度の規模で構築され、密集度は一層高まる。

こうした具体的分布状況でみると、とくに集中的に構築されるのが大磯丘陵東側と多摩川支流に形成された一群で、分布の広がりは横穴墓の定着とともに、一層の集中度が特定の地域で高まる現象であったことが理解できる。この様相を踏まえて、Ⅱ類との関連を考えてみると、Ⅱ類が導入期の横穴墓の段階を含むとして、Ⅱ類が平面形態が方形から台形への変化するという点で後出的な要素を含むと考える

ならば、Ⅱ類とⅠ類は時系列的な関係をもち、導入期の後の定着段階と展開の始まりの時期ととらえることができよう。また、Ⅰ類も台形基調の平面形態ので方形企画（横長）のａ類と長方形企画（縦長）のｂ類に分類され、分布は図示していないがⅡ類のa,bと同様に方形企画のａ類が内陸部まで分布が広がり、長方形企画のb類は集中地域を中心に分布する傾向がありⅡ類のa,b類と分布傾向性は同じである。この点からもⅡ類からⅠ類の系列性のつながりを認めることができ、導入期を経て、本格的な拡大が始まる転換期的な様相を現しているのであるが、この時系列的な関係と解釈は表層の一面に様相を示しているにすぎない。先にみた鶴見川の流域の横穴墓の変遷をみたように、6世紀後半のⅡ類の玄室部の平面方形形態は、7世紀代至り細部での形骸化、省力化を経ながらも構築されており、同時期には台形形態もあり、さらに次にみていくⅢ類も併存するのである。この点から単純な形態変遷の枠では把握しきれない、横穴墓の拡大期の事情が動いていたと推測される。



第9図　Ⅲ類横穴墓の分布　（古墳 1996）

次に羨道部と玄室部の境が明確でなく、平面形態が長台形ないしは撥形のⅢ類の分布動向をⅡ、Ⅰ類の分布との比較を中心にみてみることにする。Ⅲ類には、玄室部と羨道部との境に構築された前壁部の形骸化するⅡ・Ⅰ類からの変化の方向性が推測される一群（a類）、平面形はａ類と同じあるが奥壁に棺座を造り付ける構造の一群（b類）、奥壁に棺室を掘削する一群（c類）がある。b、c類は構築数、分布状況からみてａ類のバラエティとしではなく横穴墓の型式として存在している。

Ⅲ類の特徴として、まず指摘できることはⅡ・Ⅰ類に比較すると構築された絶対数が増加することである。先行研究によれば（古墳 1998)、分類検討対象数で比較すると、Ⅱ類が98基、Ⅰ類が268基、に対して307基に及び、Ⅰ類の中にはⅢ類との区別がつかない例が多数含まれることからさらに増加する可能性がある。

こうした特徴を反映して分布のあり方をみていくと、Ⅰ類に比較すると構築数の増加は、分布域の拡大に結びついていることがわかる。とくに、Ⅱ・Ⅰ類の中で方形形態を基調とするａ類で散在的に範囲が拡大していった内陸部において顕著な分布現象として現れている。具体的にみると、相模川、引地川、境川の本流ないしは支流において分布範囲を拡大していることがわかる。一方で、４つの集中地域では、

いずれも分布範囲はⅠ類と変化がなく、範囲内の集中密度が高まる状況で出現し、このタイプの横穴墓が汎用的性格を帯びていたことがわかる。

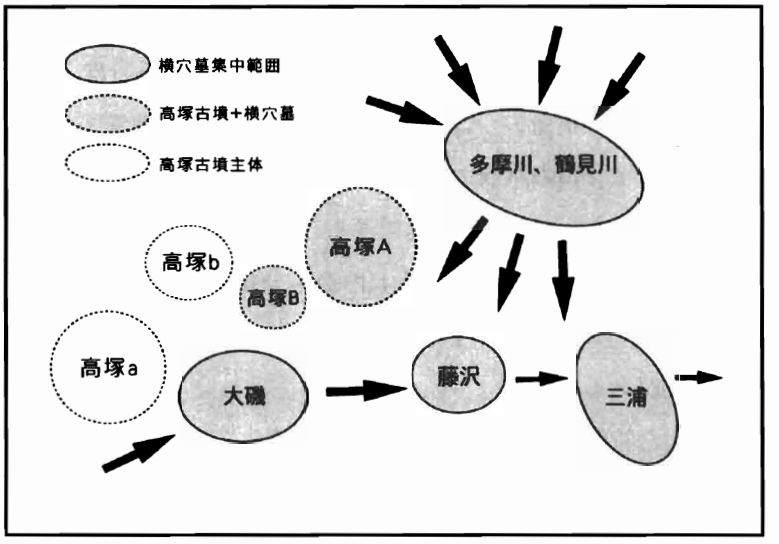
これら分布傾向の概観を踏まえて、Ⅲｂ類とⅢｃ類の分布（図示していない）をみていくと、Ⅲｂ類の分布の中心は大磯丘陵、藤沢市南部およびその間の内陸部の河川流域に広がり、Ⅲｃ類の類例は多くないが、大磯丘陵と藤沢市南部に連なる内陸側の河川流域および三浦半島に分布の主体がある傾向をみるとことができる。すなわち、三類での無施設の長台形（撥形）の広い分布域すなわち汎用的な性格とは相反して地域が限定され、小地域での特定な性格を示唆するあり方をみることができるのである。

こうした現象の分析から、Ⅲ類はⅠ類の後出的な要素として地域での横穴墓の墓制の定着期を経て普及的役割をもった一群であったことが考えられ一方で、Ⅲ類の出現には複数の系統があり、墓制の導入に当たって選択と限定という側面があったことがうかがえるのである。また、Ⅲ類の時期は類例が豊富であることから、玄室部、羨道部からの出土遺物が他類に比べると多い傾向がある。横穴墓特有の副葬品配置や追葬の状況があり、取扱いが難しい面をもっているが、出土した土器の年代からはⅢ類の構築時期には７世紀前後段階、７世紀前葉から中葉、７世紀中葉以降の三つの段階があることが判明している。これによっても、Ⅲ類は三つの段階で拡大、選択、限定といった複数の系統によるがあった可能性が考えられるのである。

４．まとめ

以上のように、県内の横穴墓の分布傾向と特性、横穴墓の出現系譜、横穴墓の属性としての埋葬施設の構造、形態的なあり方、そして横穴墓の属性と分布特性との関連という手順で、地域社会での横穴墓の歴史的意義の検証を進めてきた。

その結果を整理してみると、第９図のように、県内の横穴墓は４つの集中範囲が形成されたが、その大きな動きは多摩川流域で出現した石室構築技術を持つ専門工人集団の存在の想定のもとで、工人達が石室構築から横穴墓構築への転出と武蔵国（多摩川流域）を単位とする工人集団の移動による受容の契機となった。この工人達には、胴張りの複室構造の構築技術系譜、玄室を方形に構築する技術系譜、玄室を縦長の方形に構築する技術系譜、折衷形の構築技術系譜という４つの系譜の存在が想定され、これら系譜にもとづき



第10図　県内の横穴墓の構築技術の広がり、分布の概念

古墳構築の基準尺度を基準とした構築企画によって、県内の多摩川支流および鶴見川に導入期の横穴墓が構築されたのである。分類ではⅡ類とした中で方形、長方形、複室構造の構築企画が採用されている。折衷形のものは、明確な類例はないので、採用されなかった可能性がある。

この導入からほとんど間を置かず、方形、長方形基調および主流にはならかったが複室構造の構築企画の３つの系譜が三浦半島、藤沢市南部、大磯丘陵地域に広がり、とくに方形構築企画はより早かった可能性があり、大磯丘陵の北部から相模川の流域の内陸部にはすでに採用されている。これらの系譜は実年代で７世紀前後に広がったのであるが、その系譜は意識されたことが考えられ、羨道部と玄室部の境の不明瞭化、方形の角部の隅丸化などの形骸化、省力化を経ながらも継続して構築されることになる。こうした段階を専門工人の構築から在地での構築技術の吸収と構築数増加による自立的な構築が進むことを背景に在地化が進んでことが考えられる。ただし、複室構造の技術は、７世紀に入っては途切れた可能性がある。

Ⅱ類の出現からやや遅れて、奥壁幅に対して前壁幅が狭くなるⅠ類が出現する。Ⅱ類と比較すると、導入期の３つの系譜がそのまま存続することから、当初の構築技術の系譜に連なる側面をもつが、一面で前壁での不明瞭化など形態の形骸化が急速に進むことなどⅡ類と同様ではないから、併存する系譜をもちながらも、最終的にはⅢ類に吸収されてしまう可能性がある。このようにⅡ類との関連では、時系列的に先後関係の要素もあり、かつ独自の発展、変遷を遂げる面があり、構築技術も７世紀段階にはⅡ類とは別系譜として在地化されたいったと思われる。この系譜の基本的な広がりの方向性も、多摩川・鶴見川から南部への拡大する傾向となったことが推測される。

Ⅲ類の出現は、構築数の増加現象に現れたⅡ・Ⅰ類の構築技術の在地化の過程での形骸化、省力化の流れととらえらえる一方で、新たな系統性の出現が考えられる。それは鶴見川流域の横穴墓の例をみても、７世紀前後にはすでに出現することが確認され、いくつかの県内の横穴墓出土土器の例をみても明らかである。この点とともに、Ⅲ類の中で独自型式が発展が県内南部中心にみられることから、Ⅲ類は新たな系譜として、７世紀前後に県南部の海岸地帯を中心に西方の東海地方から構築技術として導入された可能性がある。先行して導入された地域として西から大磯丘陵、藤沢市南部、三浦半島にほとんど間を置かずに広がり、その流れはⅢc類とした棺室を設けた型式に例をように三浦半島を経て房総半島まで広る（Ⅲc類だけでないが）状況になったのではないかと思われる。また、このⅢ類は南部から北部へ広がり、Ⅱ・Ⅰ類とは異なる構築技術の流れとは異なる方向性を認めることができる。

このようにⅢ類の実態は、横穴墓の拡大期のⅠ類の長台形基調の形態からの変化とⅢ類の新たな系統性の出現から構成されていたと推測され、地域社会の横穴墓の受容と展開は単純で一元的ではなく、この時期の現神奈川県をめぐる歴史環境が様々な要因をもって動いていたことの証左となろう。

こうした横穴墓の県内での動きは、高塚古墳の構築の関係で独自な地域も生み出すことになった。高塚古墳とともに横穴墓も併存する高塚Aとした相模川から東側の河川流域と高塚Bとした相模川から西側の河川流域に分けることができる。高塚Aは横穴墓は相模野台地の河川の段丘崖面に構築され、横穴

墓の形態としては羨門部に河原石積みの施設を造る例などから、多摩川中流域と関連する様相がうかがえ、一方で高塚Bを構成する横穴墓は大磯丘陵の横穴墓の特徴に包括できる様相があり、高塚古墳と横穴墓が併存する地域でも単純に両者を一体とするのではなく、分離して考えた方が良いのではないかと思われる。さらに、県西部では足柄平野（高塚a）、秦野盆地（高塚b）では高塚古墳が主流となる地域が形成されており、墓制がいかに選択的であったかがよく理解できる状況である。

このように高塚古墳を含めた墓制の様相は、先にもふれた技術の導入の面からみても、県内の地域が古代社会において列島内での歴史的環境の中で動いてという前提があり、その上でこの時期特有の地域社会での動きが反映された結果が、今私たちの目の前の遺跡という姿で認識されているのである。そのため、横穴墓が普及する段階での墓制の違いを根拠に、単純に埋葬された氏族の出自の違いや地域的な優劣を指摘することに対してはためらいを感じる。

むしろ、分布特性で指摘したように融和的、柔軟な墓制のあり方が、当初は政治的意図で導入されたことには間違いないが、小河川流域を範囲に成長してきた有力農民層達の経済的動機を中心とした動きが具現された現象とみておきたい。それとともに、その動きを制御した首長層達の存在も当然念頭におくべきあると考える。

引用・参考文献

上田薫　1991　「神奈川県内の横穴墓群」『関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学会

池上悟　1982　「東国の横穴墓」『立正史学』第52号　立正大学文学部

池上悟　1982　「南武蔵・多摩川流域における横穴式石室の導入と展開」『物質文化』第39号

池上悟　1985　「3　横穴墓の掘削企画と群構成」『武蔵・熊ヶ谷横穴墓群』　立正大学考古学研究室

近野正幸　1995　「4.県内横穴墓の形態・構造的研究の視点ー予察」『かながわの考古学』第5集所収

古墳時代プロジェクトチーム　1995　「横穴墓の研究(1)」『かながわの考古学』第5集

古墳時代プロジェクトチーム　1996　「横穴墓の研究(2)」『かながわの考古学』第6集

古墳時代プロジェクトチーム　1997　「横穴墓の研究(3)」『かながわの考古学』第7集

古墳時代プロジェクトチーム　1998　「横穴墓の研究(4)」『かながわの考古学』第8集

古墳時代プロジェクトチーム　1999　「横穴墓の研究(5)」『かながわの考古学』第9集

県内横穴墓の出現と終焉

田村　良照

1．はじめに

神奈川の横穴墓研究は著名な埼玉県の「吉見百穴」とほぼ時を同じくして明治中頃に開始された。近代考古学において先鞭を切った背景には、首都近郊にあって全国的に見ても屈指の横穴墓分布地域であったからに他ならない。その後、大正末から昭和30年代には石野瑛や赤星直忠によって調査・研究が精力的に行われ、昭和34年に鎌倉市史のなかで「末期横穴様式変遷系列図」として結実するのである（赤星1959）。

この分野に限らず考古学の研究を進展させたのは、田中角栄の「列島改造」を契機とする大規模開発に伴う発掘調査の増加であった。その中で横穴墓研究の画期となったのは、昭和50年代前半の福岡県竹並横穴墓群の発掘とこれに続く九州各地の調査成果である。それによって横穴墓が横穴石室や家形石棺などを原型として5世紀中葉に北九州で発生し、ついには宮城県までの特定地域に導入された伝播の図式が解明されるにいたったからである（第1図）。その後、山陰をはじめとして畿内・東海・関東・東北における資料集の刊行や研究の進捗、主要な副葬品である土器編年のある程度の確立などに後押しされ、横穴墓研究が再び活況を呈するようになってきた。とくに平成13年に『九州の横穴墓と地下式横穴墓』（九州前方後円墳研究会2001）が刊行された影響は大きく、これによって各地の横穴墓と発生地である北九州の横穴墓が直接対比し得るようになり、各地の系譜と伝播時期が明確に把握できるまでになったのである。

さて前置きがやや長くなってしまったが、ここではこれまでに集積された研究成果を参考にして、神奈川県における横穴墓の出現と終焉について具体的な調査例を挙げて考えてみたい。

2．出現期の横穴墓

周知のように、神奈川県の横穴墓分布は決して一様でなく、酒匂川以西では殆ど発見されていないし、その他の地域でも分布に濃淡が認められる（第2図）。特に濃密なのは①大磯丘陵、②藤沢・鎌倉から横浜市南部にかけての一帯、③三浦半島南部、④川崎市から横浜市北部にかけての一帯、の4地域である。これらの地域に横穴墓が多い理由として、横穴墓が採用されてから他の墓制に転換するまでの存続期間、つまり造営期間が他地域に比べて長かったことが考えられる。実際これらの地域には、次に紹介するような6世紀に遡る古式の横穴墓が多く散見される。なお年代を推測する尺度は須恵器編年に依拠していることを予めお断りしておきたい。

①川崎・横浜北部地域　高津区久本7号墓、同区西前田2次2号墓や中原区金堀7号墓が最も古い例としてあげられる。

久本7号墓は縦長長方形・ドーム天井の玄室から狭長な羨道が伸びた構造で、玄室奥壁側に造付石棺を内蔵している。こうした特徴は畿内河内地方に特有のものであり、この横穴墓がいわゆる「河内型」の系譜にあることを物語っている。玄室内から6世紀後葉の須恵器類（TK43型式）が出土した。

金堀7号墓は正方形平面・ドーム天井の玄室に狭長な羨道の付いた構造で、玄室内から須恵器瓶（TK43型式）とともに多数の副葬品が出土した。

西前田2次2号墓は玄室が逆台形平面・アーチ天井を呈し、比較的長い羨道が付く。この横穴墓は未開口であった上に、奥壁側の棺座上には須恵器高坏（TK43型式）を含む多くの副葬品とともに木棺が埋葬当時のまま残されていた。

②藤沢・鎌倉地域　逗子市久木2号墓、藤沢市片瀬丘陵の新林右西2号墓、同左9号墓や茅ヶ崎市篠谷3号墓などが最も古い例である。

久木2号墓は羨道部分を失っているが、玄室は横長長方形平面・低平なドーム天井を呈し、羨道は狭長なつくりであったと推測される。多数出土した土器類から2度ないし3度の埋葬が推察され、初葬は6世紀中葉（MT85型式）まで遡る可能性がある。仮にそのようであれば確実な資料を伴った例としては神奈川県最古に位置付けられる。

新林左9号墓は玄室が縦長台形平面・低平なドーム天井を呈する。6世紀後葉の須恵器坏（TK43型式）と同時期の土師器が出土している。

新林右西2号墓は玄室が縦長長方形平面・アーチ天井を呈し、狭長な羨道が付く構造である。環頭太刀をはじめとした多数の副葬品が出土し、その中には6世紀後葉（TK43型式）に比定される須恵器提瓶が含まれる。

篠谷3号墓は遺存状態が悪く構造ははっきりしないが、玄室平面形は縦長の逆台形を呈する。鉄製武器類とともに出土した須恵器類のうち提瓶は6世紀中葉（TK85型式）まで遡り、久木2号墓と同様に県内最古の可能性がもつ。

③大磯丘陵　平塚市熊之台19号墓、二宮町諏訪脇201号墓、小田原市羽尾D2号墓などがあげられる。

諏訪脇201号墓は玄室が正方形平面・ドーム天井を呈し、排水溝が壁直下から主軸線上に設けられ羨門に至る構造である。北九州の豊後地方の影響を受けたものと考えられる。6世紀後葉の須恵器瓶（TK43型式）と7世紀末頃の須恵器類が出土しており、長期間使用されたことが分かる。

熊之台19号墓は縦長長方形平面・ドーム天井の玄室に狭長な羨道が付き、奥壁直下と主軸線に沿って羨門まで排水溝が伸びている。諏訪脇201号墓と同系譜にあると見てよいだろう。多数の副葬品とともに出土した須恵器類は6世紀後葉（TK43型式～TK209型式）に位置付けられる。

羽尾D2号墓は隅丸方形平面・ドーム天井の玄室に狭い羨道が付く構造で、諏訪脇201号墓と同様に壁直下と主軸線上に排水溝が設けられている。北部九州豊後地方の系譜と考えられる。6世紀後葉（TK43型式）と7世紀第2四半期頃の須恵器が出土しており、少なくとも2度の埋葬が推察される。

④三浦半島　土地柄もあって戦時中に防空壕として転用された横穴墓が多数を占めることから、資料的にはあまり恵まれていない。管見では横須賀市長浜6号墓が古式の例である。

長浜6号墓は玄室が縦長台形平面・低平なドーム天井を呈する。多数の副葬品とともに出土した須恵器類は6世紀後葉（TK43型式～TK209型式）と7世紀中葉の2時期のものがあり、2度以上の埋葬が推察される。

以上のように、各地域とも6世紀後葉（TK43型式）に遡る資料が認められることから、少なくともこの時期までには神奈川県域の主要な地域に横穴墓が将来されたことは確実である。しかし久木2号墓や篠谷3号墓出土の須恵器が6世紀中葉に比定されるならば、もう10～20年出現期が遡及することになる。そして遅くとも6世紀末葉～7世紀前葉には酒匂川以東の山間部を除く広範な地域に普及するのである。ちなみに上記の横穴墓の大半が矩形平面・ドーム天井の玄室に狭長な羨道が付く構造であり、従来の見解を傍証する結果となった。また出現期の横穴墓の構造を他地域と比較してみたとこ

ろ、河内地方や遠江地方も少なからず認められるが、発生地である北九州地方からの直接的な影響が最も色濃いようだ。

3．神奈川県最古の横穴墓

これまで紹介した横穴墓は土器類が残されていたことで時期がある程度推定できた例であるが、筆者は10年位前から密かに県内最古と淡い期待を抱いている例がある。昭和45年に中央大学考古学研究会を中心に調査されたA群2基、B群3基から成る横浜市青葉区の上谷本横穴墓群（合田他1971）がそれである（第3図）。この中の遺存状態の比較的よい4基は県内に普遍的に見られる横穴墓とは明らかに構造を異にしている。2 基は縦長矩形平面・切妻家形天井の玄室に向かって下る格好の羨道が付いている。残りの2基はトンネルのような非常に長い玄室に狭長な羨道が付く構造で、このうちの一方には玄室天井に軒状表現が施されている。副葬品が全く残されていなかったことから時期が判然とせず、加えて特異な構造であるため研究者間で長い間検討対象にも上らなかった横穴墓である。

結論を急ぐならば、家形天井の2基は北九州の竹並横穴墓群や上ノ原横穴墓群などにしか類例のない5世紀末～6世紀初頭の初期横穴墓に大変よく似ており（第4図）、筆者の推察が正鵠を射ているならば、中国地方以東で最古の横穴墓になる。またトンネル状の2基については類例を見出すことができなかったが、形態的に見て狭長な玄室の横穴式石室を模倣したものと考えられる。

上谷本横穴墓群の地理的環境も大変興味深い。この横穴墓群は著名な稲荷前古墳群や市ヶ尾横穴墓群とは谷本川を挟んで直線距離で約 200mの位置関係にあり、加えて市ヶ尾横穴墓群には九州以外では希少な複室構造の横穴墓が2基知られている。想像を逞しくするならば、稲荷前古墳群の被葬者が支配するこの地域に、何らかの理由によって逸早く横穴墓が将来されたと考えたいのである。大方の批評を仰ぎたい。

4．横穴墓の終焉

7世紀後半に盛期を迎えた横穴墓も8世紀になると徐々に衰退し、同中葉を境に造られなくなる。ここでは8世紀に比定される土器を出土した横穴墓を抽出して、それらの構造と副葬品における特徴を明らかにし、さらに終焉時期をあらためて確認しておきたい。

この時期の横穴墓は藤沢から大磯丘陵周辺にかけての一帯に多く見出せる。具体的には、鎌倉市二ノ谷9号墓、藤沢市片瀬丘陵の森久東3・4・8号・12号墓、小田原市羽根尾C3号墓・同E2～4号墓、松田町河南沢7号墓、伊勢原市下尾崎24号墓、二宮町の倉上6号墓、同大日ヶ窪14号墓、大磯町の後谷原U1・M4号墓、同北中尾16号墓などがあげられる（第7･8図）。

まず構造についてみると、棺座の有無を別とすれば、玄室と羨道が一体化した撥形平面（半裁徳利形）・アーチ天井に限られる。入り口施設では羨門に閉塞石を積み上げた様子は下尾崎24号墓にしか認められず、かわって木製の扉を設置した痕跡をもつ羽根尾C4号墓、同E2･4号墓のような例も見られる。またやや大型の部類に入る羽根尾C3･E3号墓を例外とすれば、中小規模の横穴墓が主流となり、時期が下るほどこの傾向に拍車がかかるようだ。

副葬品では後期古墳文化を象徴する装身具・武器・馬具などが姿を消し、土器だけとなる。筆者がかつて行った統計では、700 年頃を画期として副葬品の内容に大きな変化が認められることから、葬送儀礼の質的転換がこの時期に顕著になったのであろうと考えられる。

さて図示したなかで終焉期と見られる横穴墓はどれであろうか。土器の年代観に問題がなければ、8世紀第3四半期に比定してもよいような相模型坏を出土した森久東3・12号墓や羽根尾E2·4号墓が該当しよう。

最後に、古墳や横穴墓に埋葬された階級の人びとは、8世紀中葉以降に一体どのような墓に葬られるようになったのであろうか、考えてみたい。賛否両論はあろうが、目下のところ火葬墓以外に適当な墓制はない（長谷川1987）（村田1990）。諸先学の研究でも明らかなように、すでに7世紀代にも仏教の影響が横穴墓にも及んでいる。例えば、川崎市の浄元寺裏1号墓や日向3号墓、横須賀市鳥ヶ崎A横穴墓、秦野市岩井戸横穴墓群といった県内各地の横穴墓から仏器の一つである銅鋺が出土しているし、火葬骨の検出された横穴墓も少なからず存在する。この仏教思想の浸透が伝統的葬法である横穴墓に質的転換を迫った結果、遅くとも西暦700年頃までには武器類・装身具類といった副葬品が納められなくなる。してみると、土器以外にこれといった副葬品をもたない8世紀代の横穴墓は、火葬墓へ転換するまでの過渡的な墓以外の何物でもない、と思いたくなる。

5．おわりに

神奈川県における横穴墓の出現と終焉についてまとめてみたが、一昔前ならば依頼されても決して引き受けなかったような難題である。ところが冒頭でも述べたように、全国の横穴墓密集地域で近年相次いで資料集が刊行され、また優れた論文が発表されたことで、神奈川県下の横穴墓の系譜がある程度推測できるようになった。つまりは他県の研究成果があったから、これほど大胆な私見が述べられたのである。

ところが神奈川県の実態を知りたがっている他県の研究者に対して、私たちは十分な情報を発信していると言えるだろうか。県内在住の筆者でさえ諸方を訪ねて検索し、漸く目当ての資料を探し当てているのが現状である。そこで、多くの研究者や後進達が入手困難な資料を追い求めなくて済むようになるためには、県内の横穴墓を網羅した資料集の刊行こそが焦眉の急であると考える。一層の学問の発展を促すためにも、機運の熟しているうちに成し遂げたいものだ。本日ご列席された諸兄の賛同を得られれば幸いである。

参考文献

大分県考古学会　1991「特集　日本の横穴墓」『おおいた考古』第4集

かながわ考古学財団　2003「神奈川県横穴墓文献一覧」『研究紀要』8

九州前方後円墳研究会　2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』発表要旨集第Ⅰ～Ⅲ分冊

合田芳正他　1971『上谷本第2遺跡A地区・B地区発掘調査概報』　中央大学考古学研究会

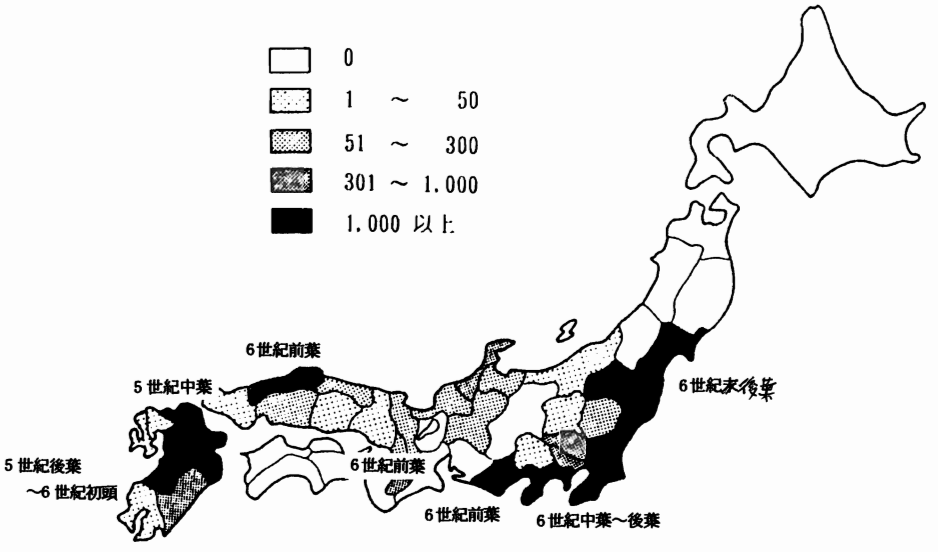
静岡県考古学会　2001『東海の横穴墓』

田村良照　2002「南武蔵南部の横穴墓」『考古論叢　神奈河』第10集　神奈川県考古学会

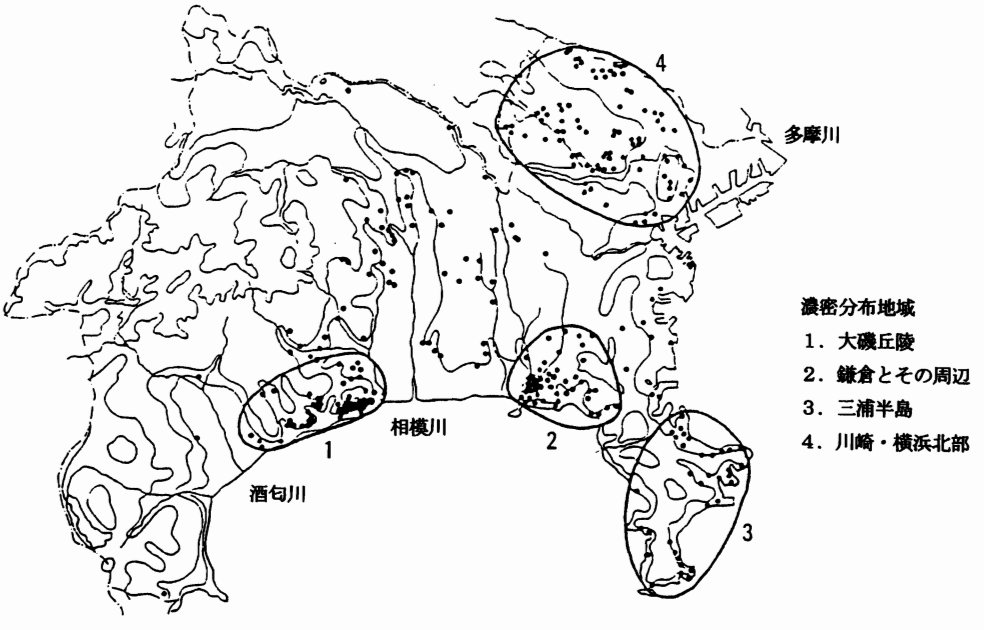
田村良照　2004「相模の横穴墓」『考古論叢　神奈河』第12集　神奈川県考古学会

長谷川厚　1983・1987「歴史時代墳墓の成立と展開（1）（2）」『古代』第75・76合弁号・84号　早稲田大学考古学会

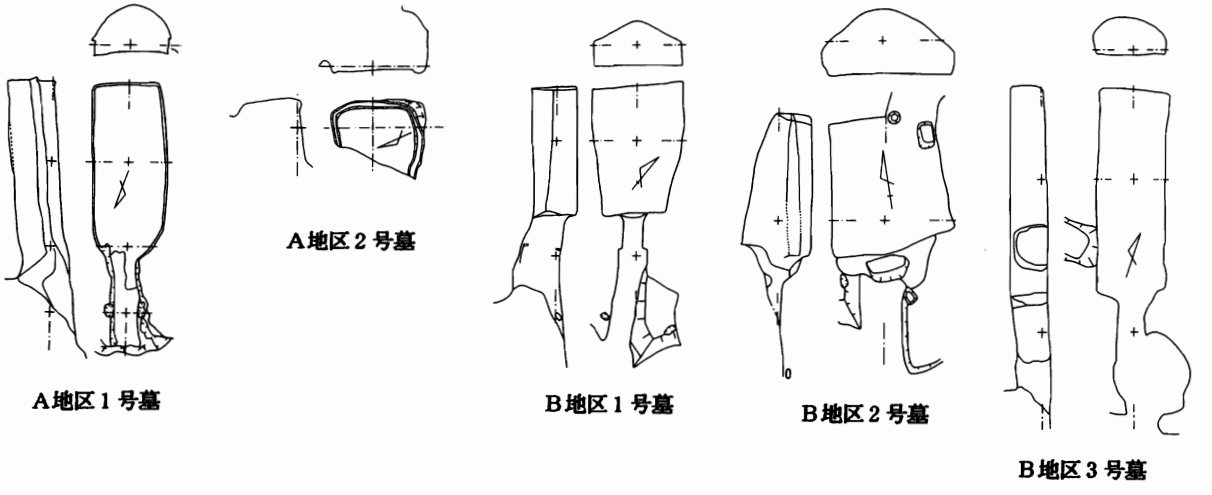
村田文夫・増子章二　1989・1990「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（上）（下）」『川崎市民ミュージアム紀要』第2·3集



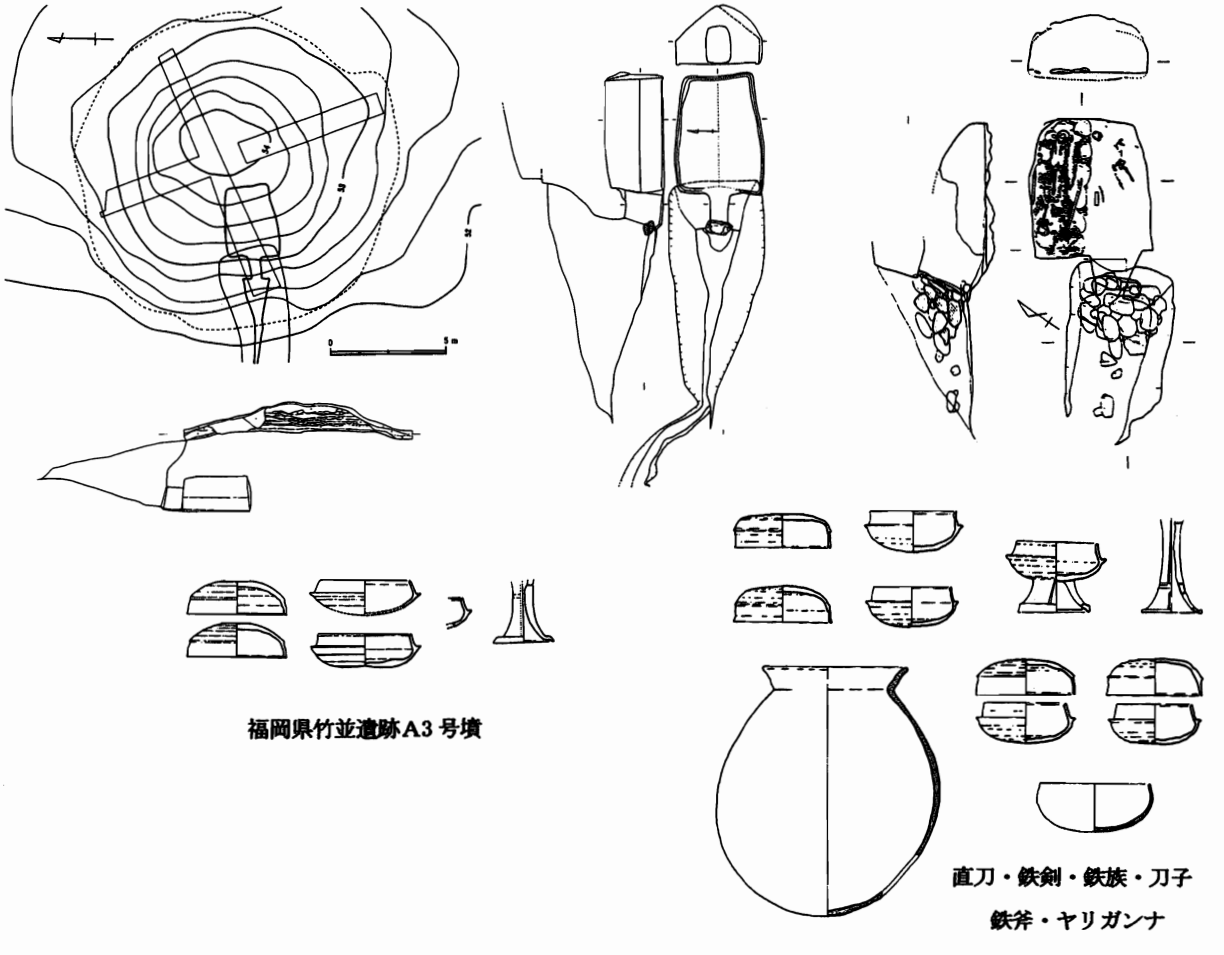
第１図　都道府県別横穴墓数



第２図　神奈川県の横穴墓分布

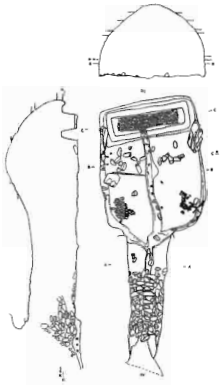


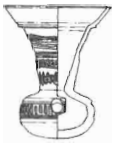
第３図　上谷本横穴墓群



第４図　北九州の初期横穴墓

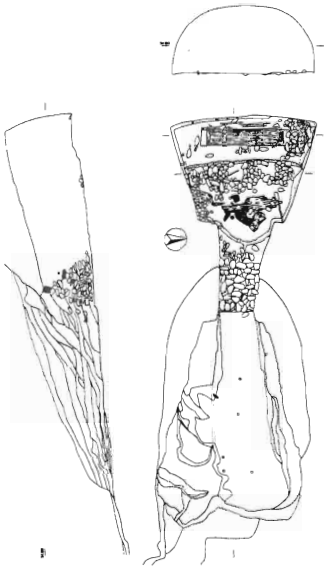
大分県上ノ原横穴墓群25号墓





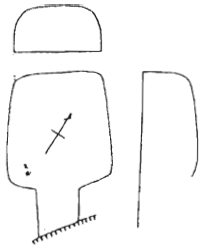
鉄刀 1
玉類 32 個

久本 7 号墓



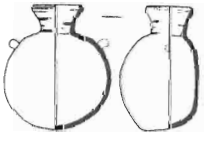
直刀 6・刀子 3
鉄族 28・金環 4
砥石 1

西前田 2 次 2 号墓



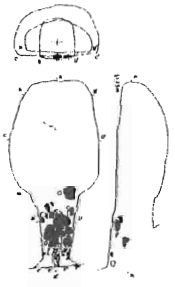
直刀 1・刀子
鉄族・金環 2
玉類 1

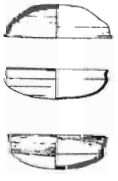
長浜 6 号墓



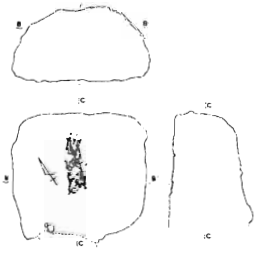
金環 3・鍋釧 2
直刀 2・環頭把頭 1
鉄族・刀子

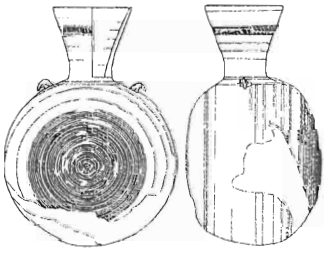
新林右西 2 号墓

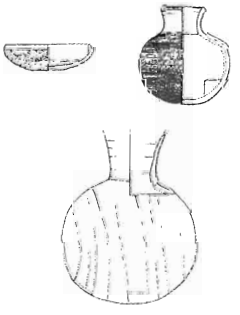


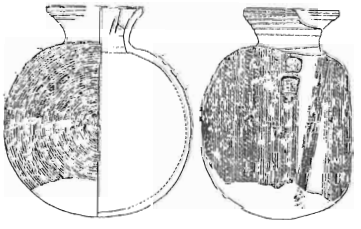


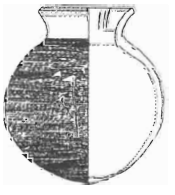
新林左 9 号墓





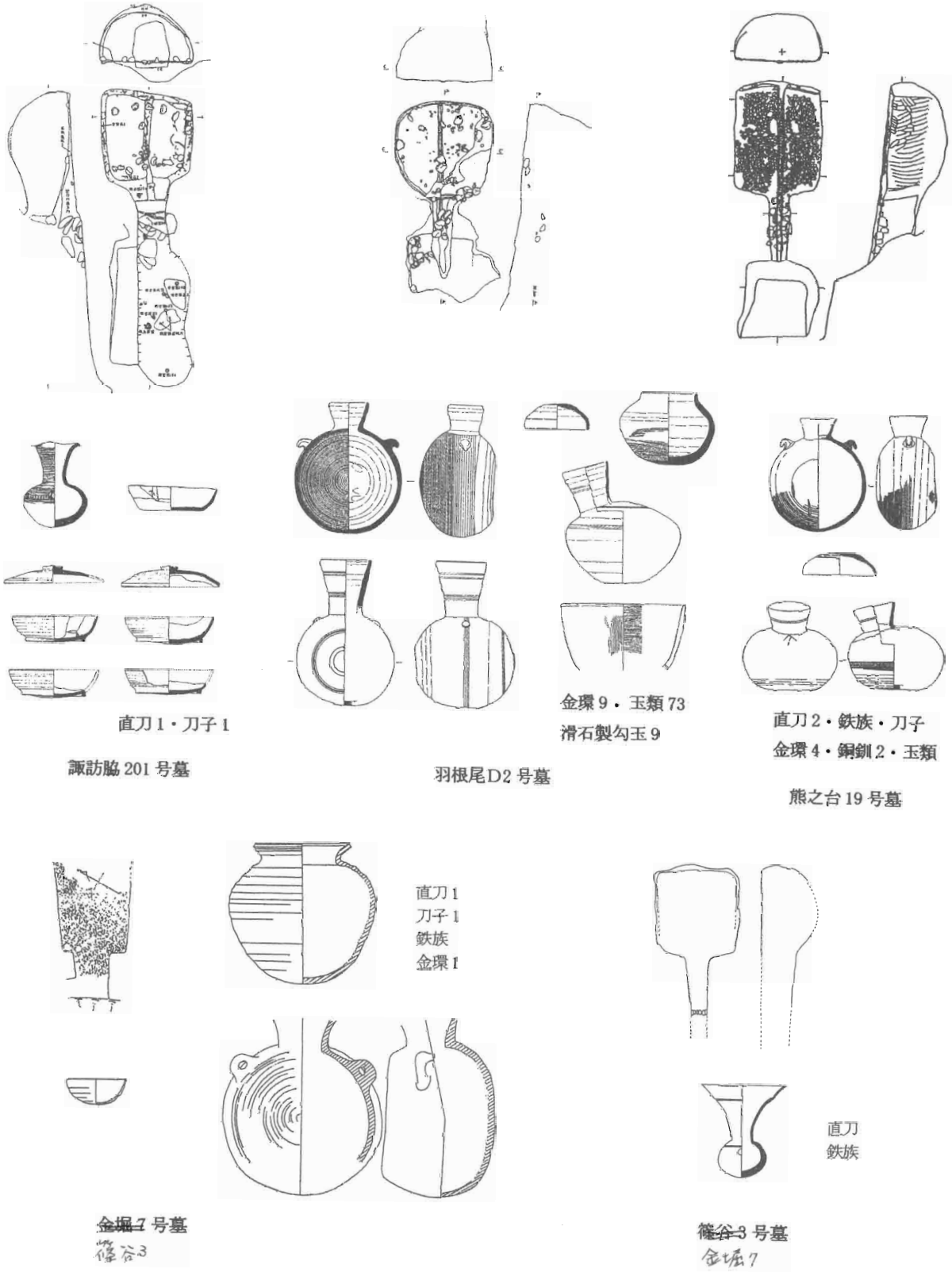




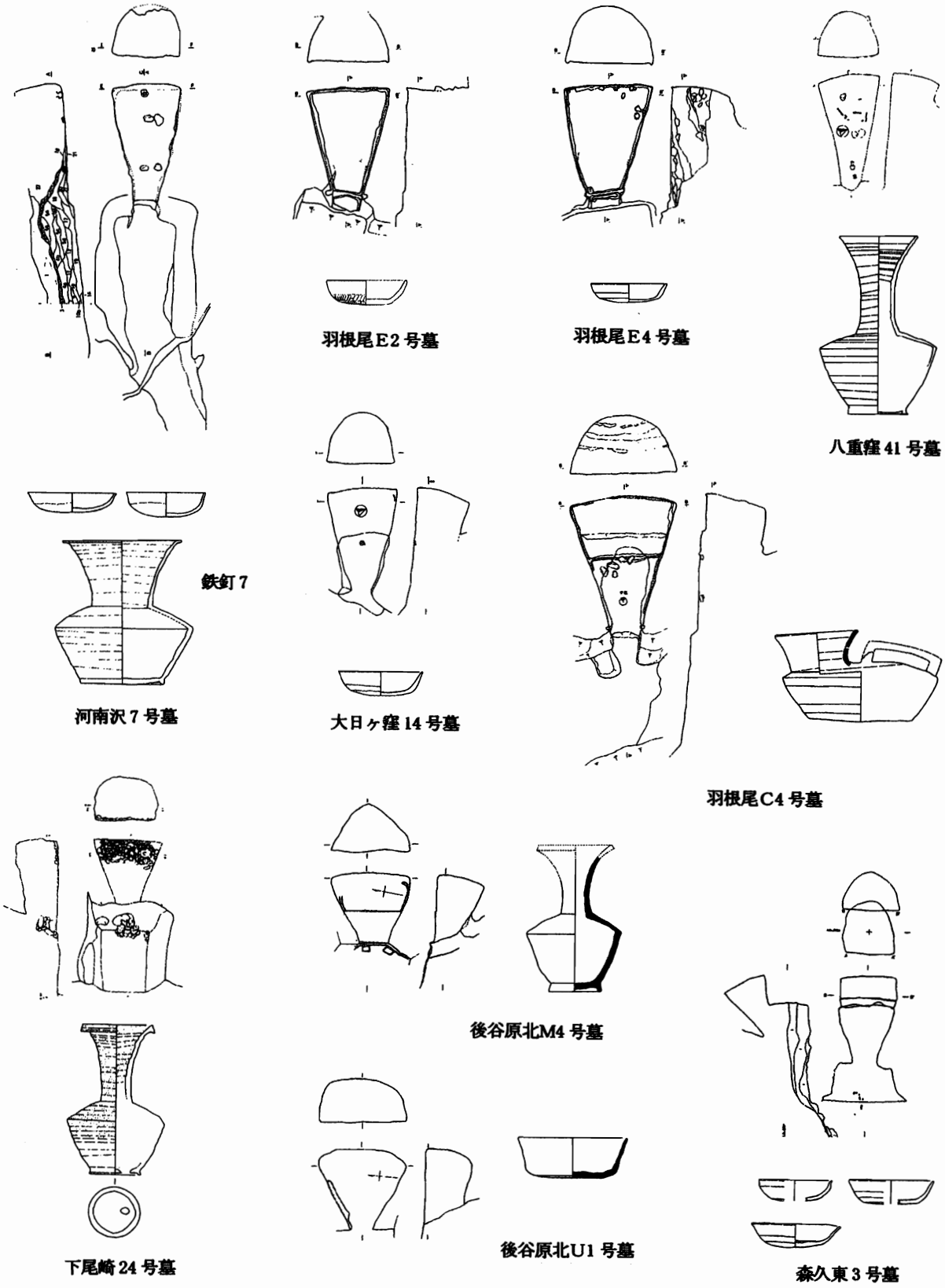


久本 2 号墓

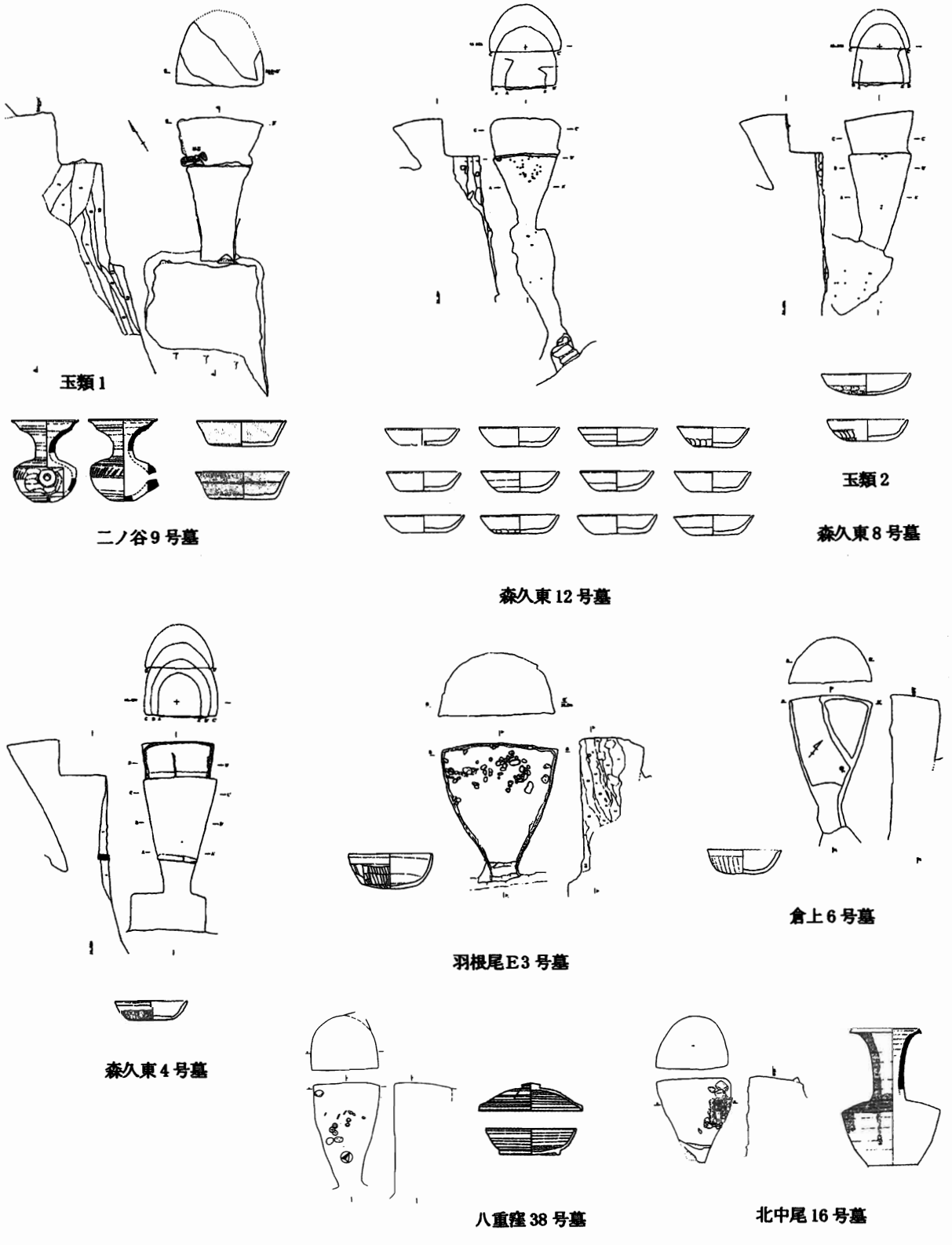
第 5 図　出現期の横穴墓（1）



第6図　出現期の横穴墓（2）



第7図　終末期の横穴墓(1)



第8図　終末期の横穴墓(2)

横穴墓出土の土器

鶴間　正昭

1．はじめに

横穴墓には多種多彩な副葬品が納められた。横穴墓から出土する主な副葬品としては、装身具や武器、馬具、土器類がある。それらの副葬品は被葬者層の社会的な地位を表すだけでなく、当時の最先端技術の一端を教えてくれる。そして、横穴墓の造営年代を探る重要な役割を持っていることも忘れてはならない。特に、土器類は編年的位置付けが他の副葬品よりも比較的緻密にできる。横穴墓の造営や追葬年代を最もよく示すのが、土器類であると言っても過言ではない。

しかし、出土した土器から横穴墓が使用された年代の一端は窺い知ることはできても、確実な造営年代が押さえられるかというとそうとは限らない。横穴墓は追葬ができる構造が特徴といえ、時期が相違する土器が出土したとしても不思議なことではない。また、土器類は一般的には生産→流通→使用→廃棄のプロセスを経て土中に埋もれ、その過程は短期間のこともあれば長期間のこともある。特に、須恵器は稀少性が考慮され、伝世品としての性格も注意しておかねばならない。たが、問題は孕むものの、横穴墓の年代決定には重要な役割を果たすことに異論はないだろう。土器編年研究は確実な進歩をみせており、実年代を示す考古学資料も蓄積されてきている。

2．出土土器の概要

横穴墓から出土する土器は須恵器と土師器に大別されるが、須恵器の出土量が多いことが指摘できる。そして、出土須恵器は相模で生産されたものではなく、他地域から搬入されてくることが大きな特徴となっている。最も時期的に古い一群の須恵器を出土した横穴墓が初現期や導入期の可能性が高い。第２図の久本７号横穴墓や坂下９号横穴墓、滝の沢横穴墓、金堀７号横穴墓などが古手の須恵器となろう。堤瓶や𤮔、長脚二段透高杯などが導入期の代表的な須恵器の器種である。この時期の搬入須恵器は陶邑産須恵器が多いと判断され、すでに指摘のあるように６世紀後半に比定され得るものも含まれる(近野他　1991、田村　2004)。

７世紀前半から後半にかけては神奈川県の各地に盛んに横穴墓が造られた模様で、出土土器も量的にも内容的にも充実をみせる。横穴墓の展開期・盛行期と言ってよい。この盛行期の出土土器を特徴付けるのが多彩な湖西産須恵器の存在である。小型化してくる杯蓋・杯身、半球形杯部の高杯、大小の平瓶、広口壺、フラスコ形瓶など独特の器形と焼成の質感を有する湖西型ともいえる須恵器が盛んに横穴墓に副葬された。この中で最も特徴的な須恵器がフラスコ形瓶であろう。小型化した

杯蓋・杯身の段階になると、関東に湖西産須恵器の大量供給が開始され、関東を湖西産須恵器が席巻する。 陶邑産須恵器の出土はみられなくなり、猿投産須恵器も影を潜めてくる。横穴墓の盛行期には、土師器の出土例も増えてくる。相模在地の土師器のみならず、比企型杯や有段口縁杯と呼称される北武蔵産の土師器なども出土し、その出土状況は集落遺跡と軌を一にするようだ。そして、畿内産土師器も横穴墓からの出土が認められる。畿内産土師器はその名のとおり畿内地域でつくられ、暗文やヘラミガキ調整が施される飛鳥地域の宮都でも使用された土器と同一のものである。

７世紀末葉以降は副葬品の出土は少なくなってくるが、土器類の出土は量的な減少はみられるものの継続する。この時期にも湖西産須恵器の供給が継続し、フラスコ形瓶に替わって長頸瓶の出土が目立ってくる。須恵器には高台付杯や無台杯身、平瓶、広口壺、瑞、甕などの器種が確認される。土師器では在地の伝統的な杯類とともに、相模型杯や北武蔵型杯など特徴的な供膳具も出土している。この時期の土師器を最後に横穴墓もその造営を停止していったことだろう。

３． 搬入須恵器と湖西窯編年

横穴墓から出土する土器類には須恵器が多いが、そのほとんどは他地域から搬入された製品である。近畿地方の陶邑窯や東海地方の猿投窯や湖西窯などから須恵器の供給を受けた。７世紀初頭までは陶邑産須恵器が搬入須恵器の主体を占めたと推測されるが、７世紀前半からは湖西産須恵器の出土も目立ちはじめる。湖西産須恵器の大量供給がはじまる７世紀中葉から後半以降は、陶邑産須恵器の出土は認められなくなり、湖西産須恵器が凌駕する。６世紀末葉から７世紀前半にかけて全国的な須恵器生産の拡充が図られるが、北関東はともかく南関東ではこの産業育成は十分な成果があげられなかったようだ。陶邑産須恵器に替わっての湖西産須恵器が大量供給の一因はここに見いだせるだろう。相模の横穴墓には猿投窯と推定される須恵器も副葬されるが、量的に卓越することはなく、７世紀前半代を中心に一定量が供給されていたと判断しておく方がよいだろう。

さて、湖西窯跡群の須恵器編年研究は、後藤建一氏により湖西窯編年として体系づけられ（後藤 1989・1991)、これまで関東の７世紀の土器編年とその年代観の指針となってきた。古墳時代後期の関東では、須恵器の出土もまだ少なく、限られた須恵器資料からその編年的位置と年代観を検討する際、後藤氏の提示した編年モデルは恰好の比較検討の対象として援用された。関東で後藤氏による湖西窯編年の果たした役割は大きい。近年、鈴木敏則氏や贄元洋氏による湖西窯編年の再検討も進められている（鈴木　2001、贄　1998)。鈴木氏や贄氏の問題意識は、後藤氏が提示した編年モデルとは鋭く対立する。そのことは、後藤氏の湖西窯編年を活用してきた関東、特に南関東にとって看過できない問題提議でもある。関東の土器編年と東海諸窯の須恵器編年研究との整合性、年代観の詰めの作業など問い直さなければならない問題は少なくない。関東の土器研究に立脚した視点からの東海産須恵器の検討に踏み込むべき時期にきているだろう。

４．　土器の年代観と横穴墓の造営時期をめぐって

神奈川県内の横穴墓の時期決定にあたっては、大きくみて出土した土器などの副葬品から年代を絞り込む方法と形態や構造の検討による型式的変遷に照らした年代決定の方法が取られることが通有であった。それぞれに問題を内包する方法であり、両者の整合性が図られることが望ましい。ここで取り扱っている土器による時期の決定方法では、出土した土器は横穴墓が造営され機能したどの段階に副葬されたのかという問題があるとともに、土器の年代観をどう捉えるかという問題がある。実年代を示す資料に乏しい関東においては、どうしても飛鳥地域の研究成果や東海の須恵器編年研究に頼らざるを得ない。大枠での須恵器の型式的変遷や年代観については、共通認識が培われているが、解決されなければならない課題も多い。土器の年代観はそのまま横穴墓の年代決定にも連動することになり、最新の研究動向に目を配らせておく必要がある。

土器からの横穴墓の年代決定に関していえば、古墳時代後期タイプの杯蓋・杯身の変遷と残存する時期、フラスコ形瓶の型式変化が重要な指標となろう。横穴墓の出現期を示唆する須恵器は、概ね陶邑窯編年のＴＫ43 型式並行と判断されている。陶邑窯編年との対比では、その想定に問題はないが、ＴＫ43 型式とＴＫ209 型式は編年上で２時期に区分するための資料としては適切でないとの指摘にも耳を傾ける必要がある（白石　2000)。また、ＴＫ43 型式は出土した陶硯から７世紀第１四半期を遡らないという見解もある（畑中　1999)。そして、西口壽生氏によって飛鳥地域の再開発直前の土器が紹介され（西口　1999)、それによれば飛鳥寺下層のＴＫ43 型式の須恵器は、588 年以前という従来の位置付けでよいと把握されよう。編年観と年代観をめぐる状況は混沌としている。

従来、小型化した湖西産須恵器の杯蓋・杯身は、７世紀中葉で消滅していくという理解があったが、畿内産土師器との関係でみると、７世紀後半までは出土が通有で、最も小型化した杯蓋・杯身は７世紀第４四半期にも残存するようだ。猿投窯でも、古墳時代タイプの杯蓋・杯身は７世紀後半でも生産が行われていた（尾野　1997)。関東に湖西産須恵器が大量供給されはじめる時期と判断する三ツ俣遺跡Ｆ地区には、小型化した杯蓋・杯身を含めた多彩な湖西産須恵器が出土し、それに伴った畿内産土師器は、断片的な資料ではあるものの、飛鳥Ⅱ～Ⅲと指摘される（谷口　2000)。飛鳥Ⅳ段階までは、小型化した湖西産須恵器の杯蓋・杯身の出土は例外的ではないようだ。これまで想定されていた湖西産須恵器の年代観が新しくなることは避けられないだろう。フラスコ形瓶は横穴墓から出土する最も普遍的な器種といえ、その型式変化の理解が横穴墓の時期決定に大きな影響を与える。池上悟氏や岡林孝作氏などによってフラスコ形瓶の編年案が提示されている（池上　1986、岡林　1994)。口縁部下の凸帯や頸部にめぐる沈線の有無や頸高の胴高の比率などの分析からフラスコ形瓶の編年が説かれているが、今後とも実際の共伴例や出土状態からの検討が必要となろう。相模の官衙遺跡に製品を供給したと推定できる小山窯でも、フラスコ形瓶が少量焼成されていたが、官衙的な器種が生産の主体を占める（鶴間　1993)。官衙的土器とされる高盤は、相模の横穴墓から出土が認められないことも留意しておきたい。

5. おわりに

神奈川県内の横穴墓から出土した須恵器は、質量とも関東で最も充実している。横穴墓の年代決定にも副葬品や追葬など墓制のあり方、地域間交流など横穴墓研究に重要な視角をもたらすことは言うに及ばず、土器研究においても貴重な資料である。出土位置や出土状態を吟味して追葬資料に注意すれば、同一時期に副葬したセット関係を認定することもでき、土器研究にも有益な研究情報が得られる。今後、土器の概要を把握するにとどまらず、複眼的な視点で土器類の出土状態による分析を加味し、横穴墓出土土器の問題を掘り下げていく必要があろう。最後に蛇足ながら付け加えておくと、東北地方からは関東系土器の出土が相次ぎ、東海産須恵器の搬入も認められ、そして関東にもみられる高壇式と呼ばれる構造の横穴墓も東北地方で確認されている（佐藤　2003・2004 など)。横穴墓が導入されてくる西に目を向けるばかりではなく、関東と東北の関係の中にも横穴墓研究の可能性が秘められていることも忘れてはならない。

引用・参考文献

池上　悟　1986　「古墳出土の須恵器について－フラスコ形堤瓶－」『立正大学人文科学研究所年報』第 23 号

岡林孝作　1994　「須恵器フラスコ形長頸瓶の編年と問題点」『日本と世界の考古学』　雄山閣

尾野善裕　1997　「東海」『古代の土器－律令的土器様式の西・東　7 世紀の土器』　古代の土器研究会

神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団古墳時代研究プロジェクトチーム　1996　「横穴墓の研究（2）」『かながわの考古学』(『研究紀要』1)

後藤建一　1989　「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』　静岡県教育委員会

1991　「須恵器の編年　5 東海　B 静岡」『古墳時代の研究』第 6 巻　雄山閣

佐藤敏幸　2003・2004　「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（1）・（2）」『宮城考古学』第 6 号　宮城考古学会

静岡考古学会　2001　『東海の横穴墓』

白石耕治　2000　「陶邑窯における古墳時代の須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』第 1 分冊　東海土器研究会

鈴木敏則　2001　「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第 5 分冊　東海土器研究会

谷口　肇　2000　『三ツ俣遺跡』Ⅱ（F 地区）　財団法人かながわ考古学財団

田村良照　2004　「相模の横穴墓」『考古論叢神奈河』第 12 集　神奈川県考古学会

近野正幸他　1991　「神奈川県内の横穴墓群」『関東横穴墓遺跡検討資料』　茨城県考古学会

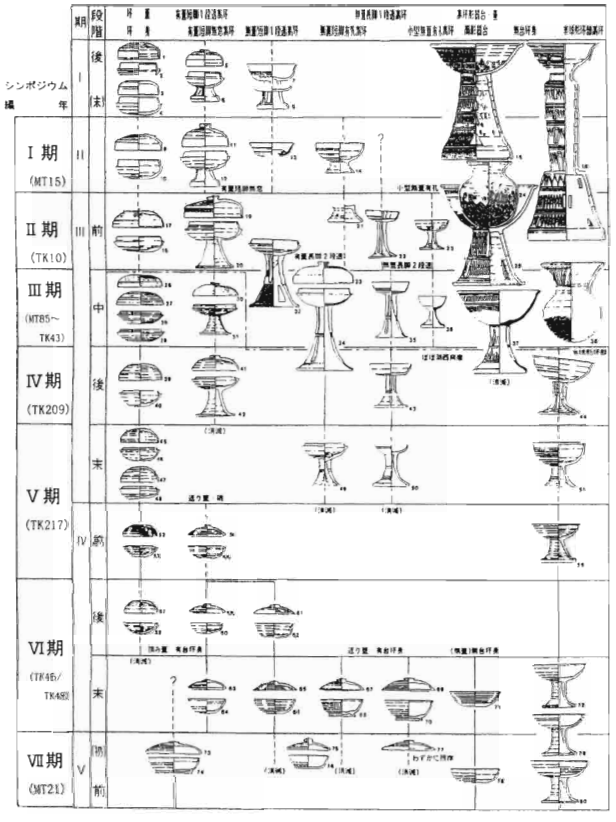
鶴間正昭　1993　『多摩ニュータウン遺跡－平成 3 年度－』第 5 分冊　東京都埋蔵文化財センター

贄　元洋　1998　「湖西窯編年の再検討」『静岡県考古学研究』№30　静岡県考古学会

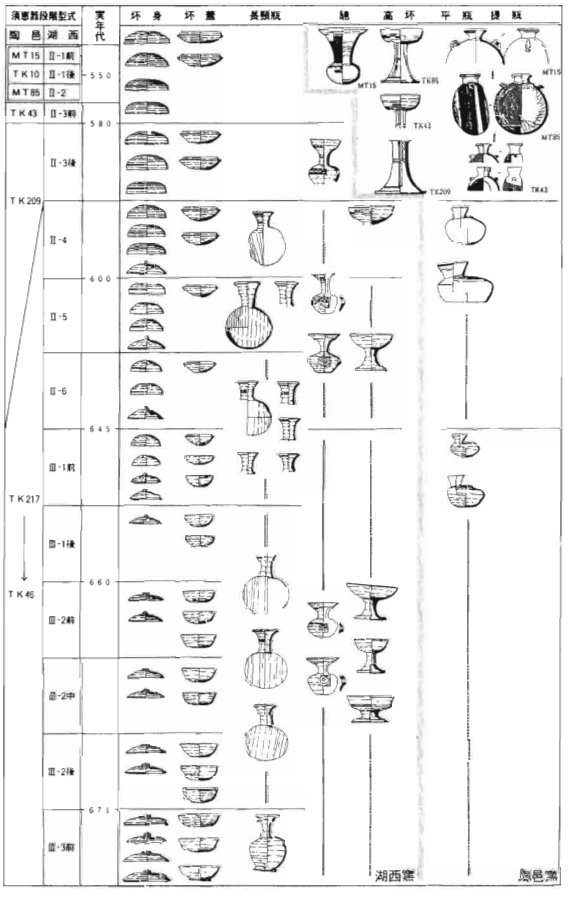
西口壽生　1999　「飛鳥地域の再開発直前の土器」『奈良国立文化財研究所年報 1999-Ⅱ』

畑中英二　1999　「陶邑ＴＫ43 号窯跡の年代観に関する再検討」　『瓦衣千年』　森 郁夫先生還暦記念論文集刊行会

※第 2 ～ 5 図に掲載した土器資料の文献については、一部を除いて紙数の関係で割愛した。御容赦願いたい。

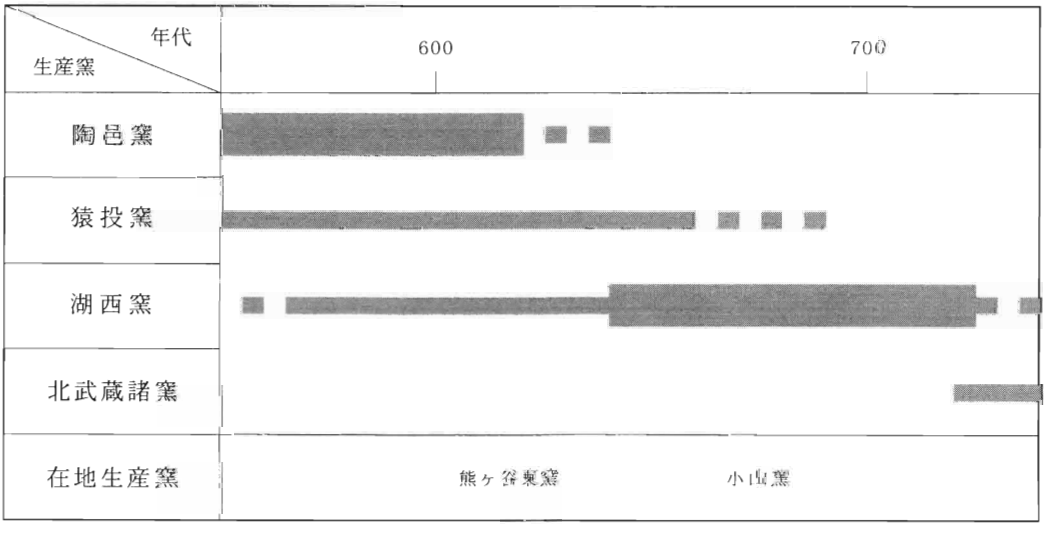


『東海の横穴墓』のシンポジウム編年

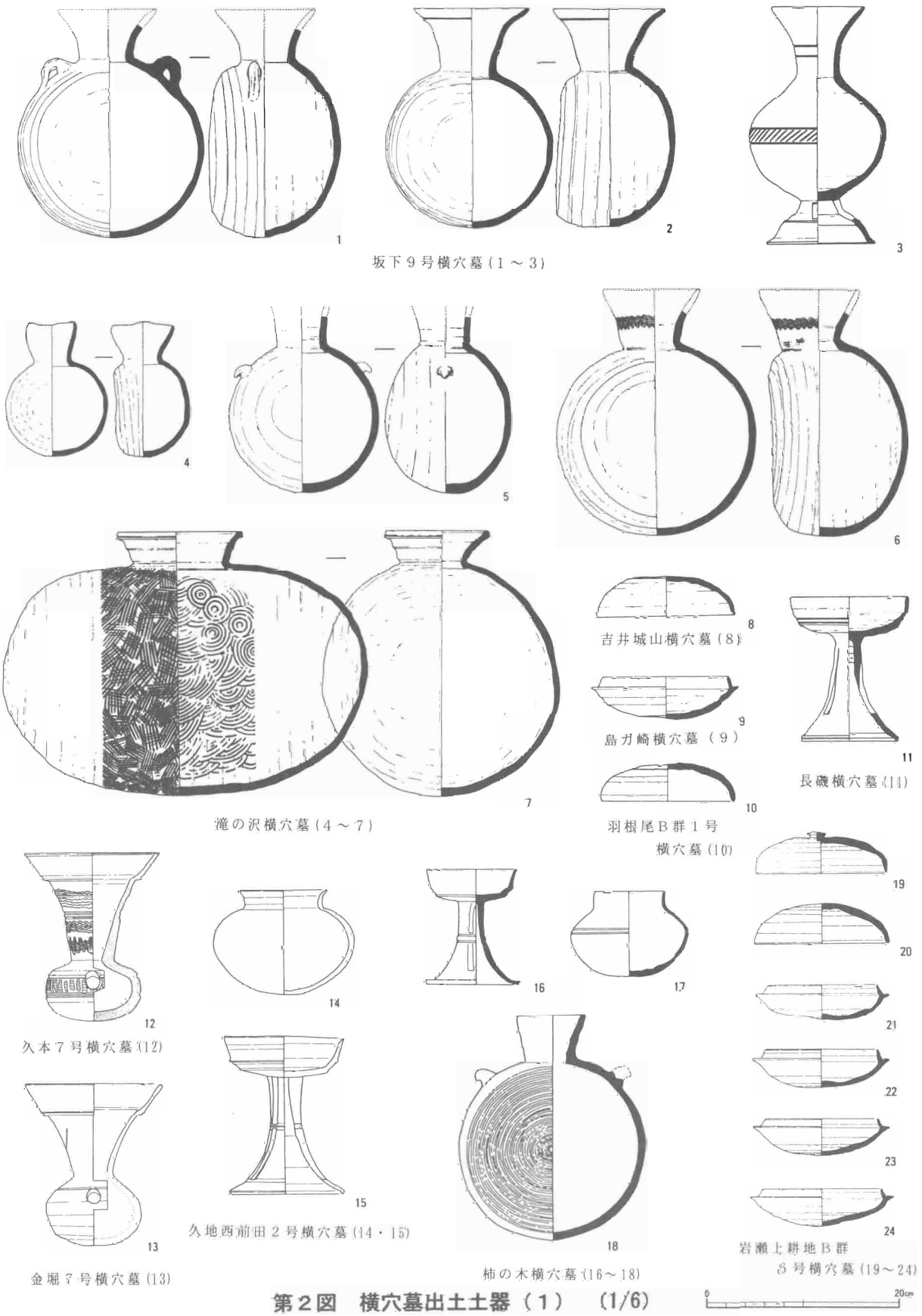


『かながわの考古学』古墳時代研究プロジェクトチームによる須恵器の段階区分と年代観

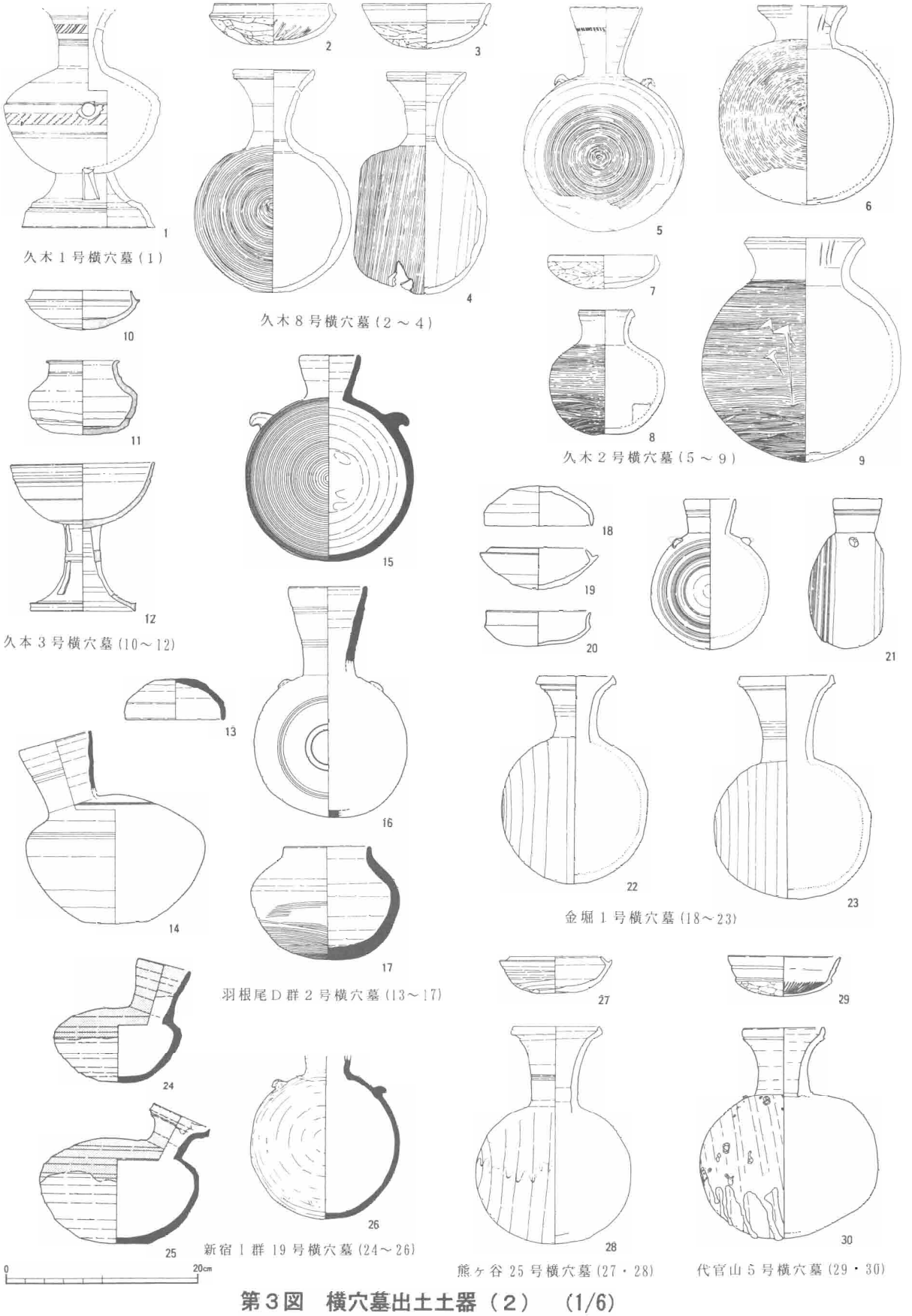
搬入須恵器の推移



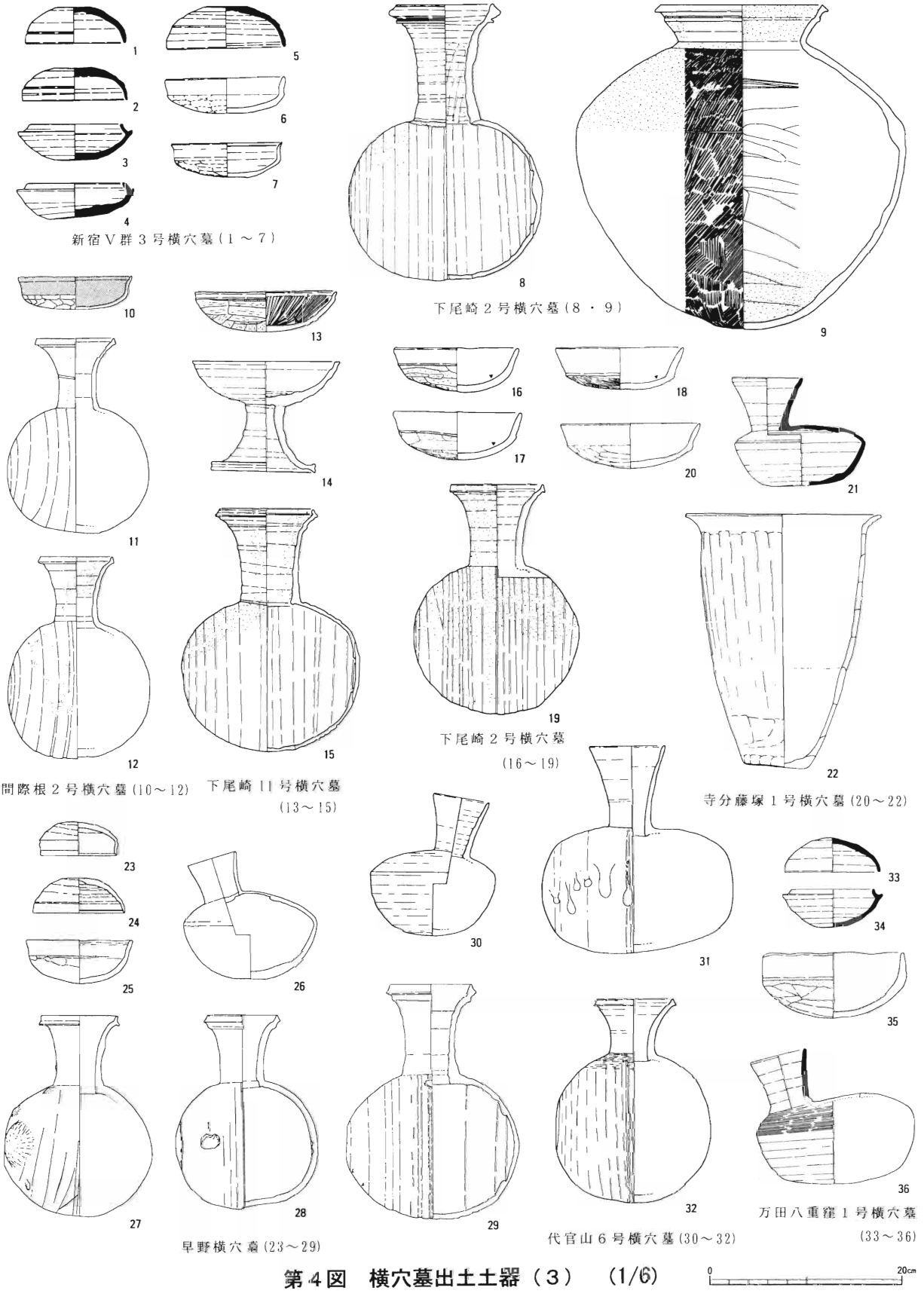
第1図　須恵器編年・搬入須恵器の様相



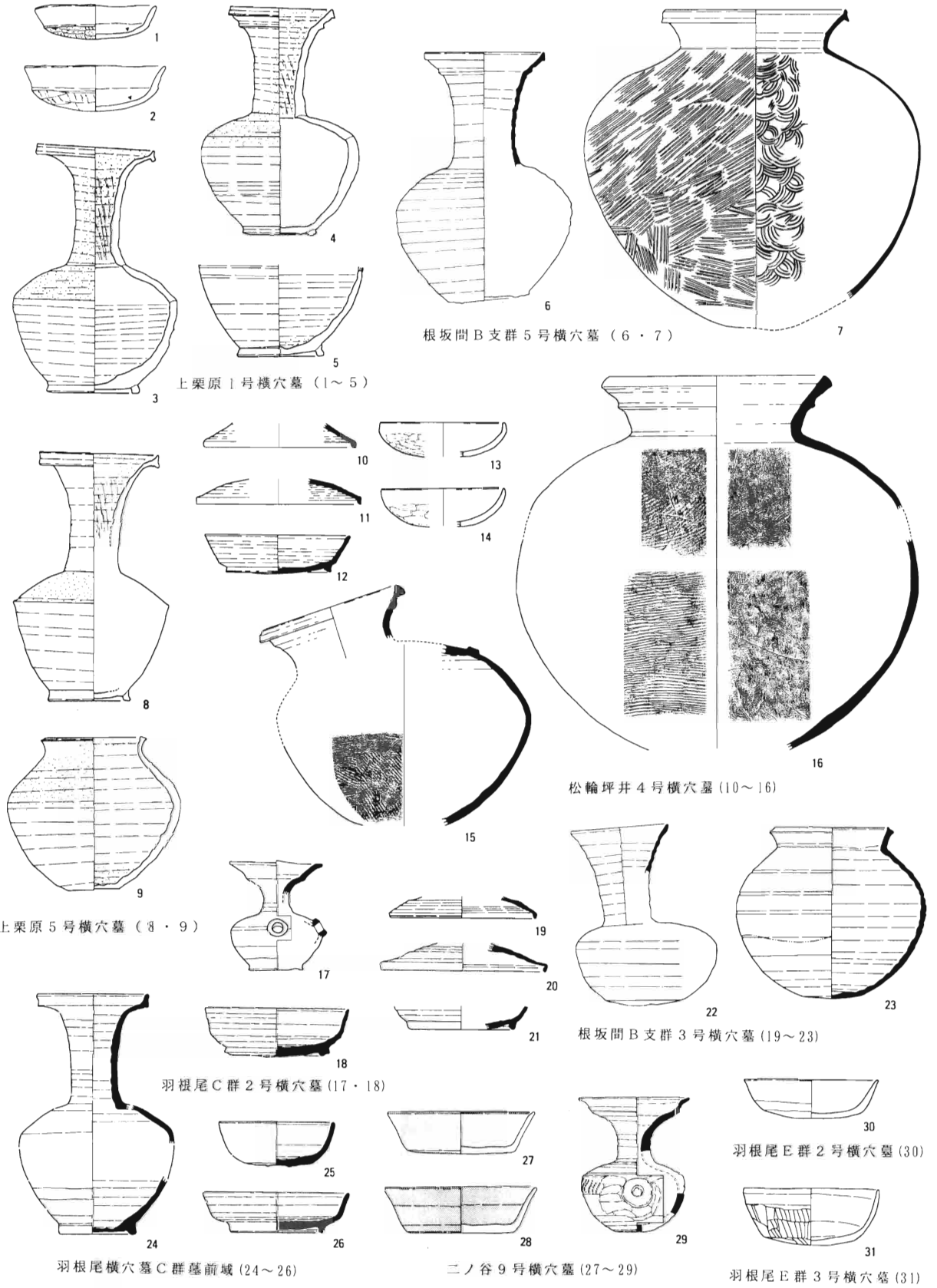
第２図　横穴墓出土土器（１）　(1/6)



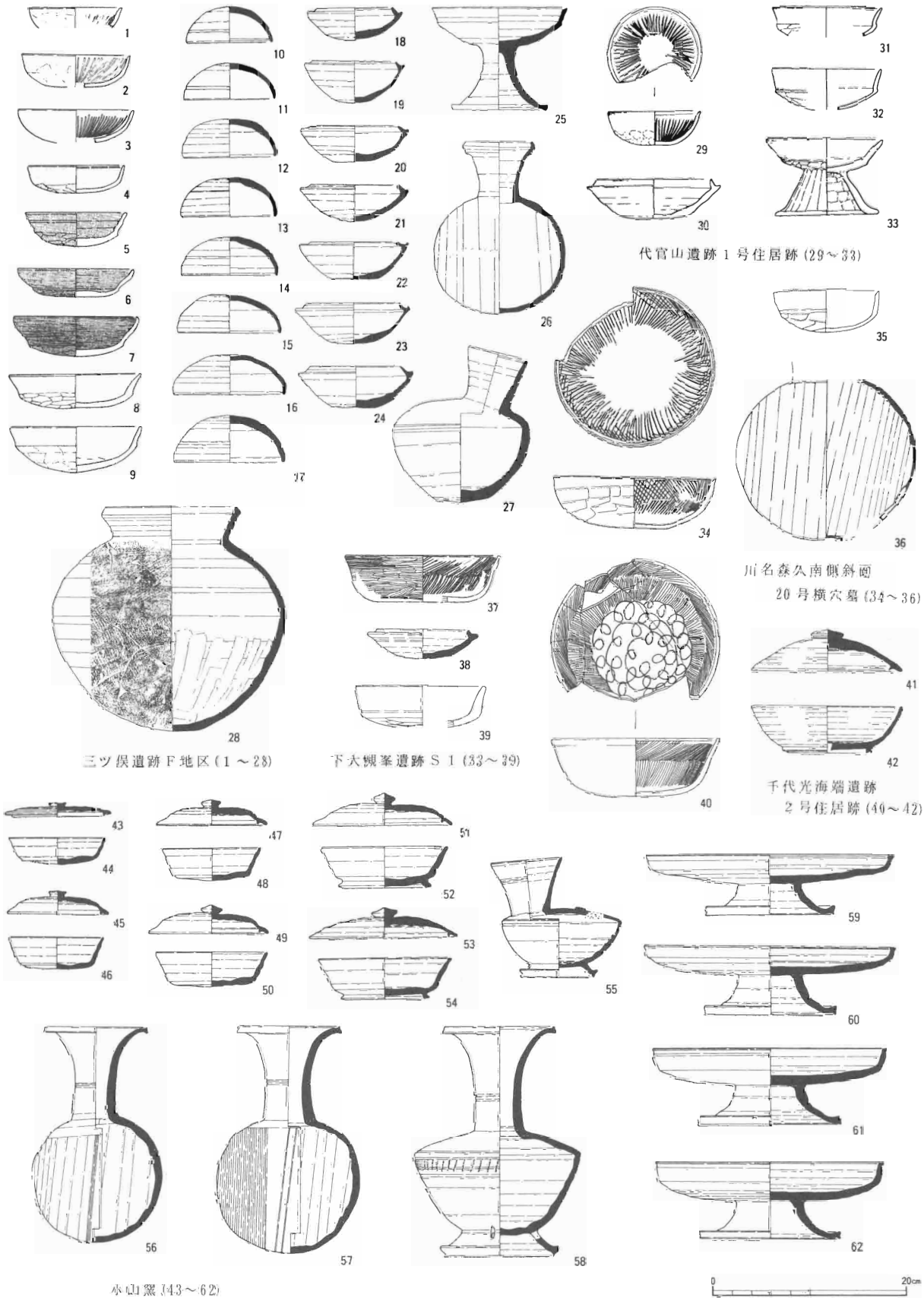
第3図　横穴墓出土土器（2）　(1/6)



第４図　横穴墓出土土器（３）　(1/6)



第５図　横穴墓出土土器（４）　(1/6)



第６図　畿内産土師器と共伴する土器・小山窯出土の須恵器(1/6)

横穴墓と火葬墓

村田　文夫

はじめに

横穴墓は現在の見解では，５世紀中葉に北九州で初現し，以後，山陰・山陽地域をかいして，６世紀代には高塚古墳が隆盛する畿内でもいくつかの集中域がみられる。そして東海地域をへて，南関東地域では６世紀末から７世紀代に多くが築造されたと考えられている。また，北関東の太平洋岸側から東北地方南部の太平洋岸側に沿っても集中しており，なかには壁面に装飾・線刻画などが認められることはよく知られている。

一方，古代における火葬は，古文献上は周知のとおり『続日本紀』文武四年(700)，奈良県明日香村の栗原(粟原)で物化された道昭和尚を嚆矢とする。以後，天武・持統天皇陵に合葬された持統天皇(大宝二年・702)や中尾山古墳に葬儀されたと文武天皇(慶雲四年・707)などによって実践された。背景には，道教・仏教的な思想面の浸透だけでなく，火急的に律令体制を確立・整備しなくてはならなかった当時の政治情況と相関していたとも考えられている。その火葬の風習が神奈川県を含む東国で実践されたのは，たとえば川崎市高津区の菅生潮見台古墓の火葬骨蔵器内から遺骸の荼毘時に一緒に焼かれた和同開珎(初鋳和銅元年・708)が納まっていたので，それを定点にすれば速くも８世紀第１四半期代である可能性はある。しかし，これはいわば第一波。事例数が顕著に増加するのは９世紀後半になってからのことであった。

このように横穴墓と火葬墓は時系列的にならべれば，８世紀のごく初期に両者の営為が並行して行われていた可能性はありうる。しかし，遺骸を直接「墓室」内に置き去りにする前者の伝統的な葬儀と，火焔によりきわめて短時間で遺骸を白骨化し，骨蔵器に収納する後者の革新的な葬儀とは明確に峻別しておく必要がある。それを承知のうえで標題を設定してきた企画者の意図は，両者に被葬者像などでの相違や，朝鮮半島などの葬制との関連性存否をにらんでのことと察する。

さいわい私がフィールドとして親しんできた多摩川下流域右岸を中心とした周辺では，横穴墓・高塚古墳，それに古代火葬墓に関する知見を総合的に俯瞰できる利点がある。そこで，近年の横穴墓研究の動静に学びながら，知りうるささやかな素材を窓口にして視界を広める努力をしたい。

1. 横穴墓にみる諸相

(1)横穴墓は渡来人の墓か

縄文時代以降，私たちの祖先は大陸・朝鮮半島の人々と往来し，時々の文化的な接触の痕跡が各地の遺跡から発掘されている。だが横穴墓に関しては，朝鮮半島には存在が確認できていない。ところが九州・筑後では，５世紀前半代で石蓋土坑墓内に土器類を副葬することが確認されていて(池

の上・古寺墳墓群)，これは死者に飲食物を供献する習慣をもつ朝鮮半島からの渡来人の葬制と推測され，以後，北部九州の横穴系埋葬施設(上ノ原横穴墓群ほか)の受容にあたって土器を玄室内に副える風習として定着したという。つまり，横穴墓のオリジンは朝鮮半島では確認できていない。が，わが国における横穴墓の初現形態とその系譜は渡来人をキーワードに語れるという。私の理解に誤りがなく，これが実相であるならば，その意味するところを真剣に問わなければならない。

そもそもこの場合の渡来人集団をどの程度の人数と想定するか。たとえば総数 80 基の横穴墓が調査された大分県上ノ原横穴墓群(5世紀後半から6世紀前半)の事例について，形質人類学者が上顔高・眼窩高・上顔示数・眼窩示数などの数値で比較したところ，被葬者は朝鮮半島から渡来した集団ではないという[1-1]。この地域は，律令期の豊前国戸籍に「秦部」など渡来人の名称がみえることから，時間的に若干さかのぼる上ノ原横穴墓群被葬者の出自が注目されたが，結果的には両者の系譜・脈絡は形質学的には否定されたわけだ。その意味するところは大きい。ちなみに文献上でみえる渡来の時期は，①4世紀末(応神・仁徳朝)，②5世紀末(雄略朝)，③6世紀末(推古朝)，④7世紀後半(天智朝)，⑤8世紀(奈良朝)の五段階が考えられている。うち上ノ原横穴墓群と時期的に並行する②は，百済滅亡を受けて土器や馬具製作などで優れた技術や才能をもつ人々が大勢して百済から逃れて渡来し，「今来才伎(いまきのてひと)」として遇された時期に相当する。が，上ノ原横穴墓群の被葬者はすくなくともそうした集団の流れを汲む一員ではない。そうすると，池の上・古寺墳墓群や北部九州の横穴系埋葬施設(上ノ原横穴墓群ほか)の葬られた人々は，現在の形質学では特徴がとらえられない程度の少人数の渡来集団であったのか，はたまた渡来人系の集団の墓とみることにそもそも無理があるのであろうか。

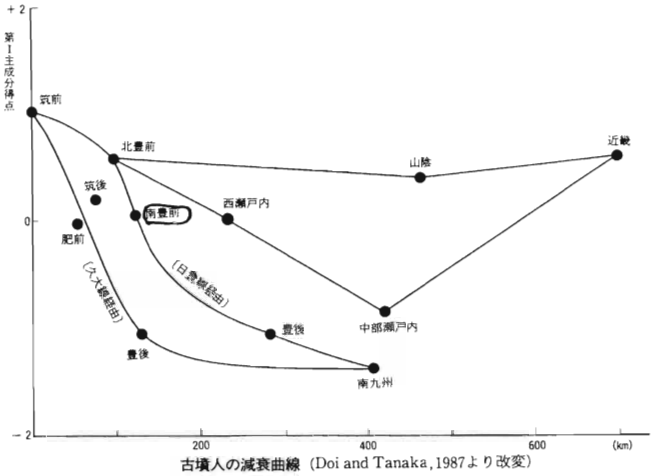
これらの課題は，今後とも形質人類学や文献史学との協業テーマであるし，そうした総合的な検証を経ていない段階では，到底，渡来系集団の墓とみる可能性にくみするわけにはいかない。

(2)発掘人骨などから探る外来要素

横穴墓の初現をめぐるさまざまな議論はまだまだ混迷すると思うが，その一方で確実に得られる知見は蓄積されていかなければならない。

神奈川県内の横穴墓群のうち，大磯町愛宕山下・横浜市緑区奈良熊谷・川崎市高津区下作延・川崎市高津区西田原・川崎市中原区井田伊勢宮の各横穴墓から発掘された歯の一部に特徴的な所見が確認されている。それは苧積み(おうみ)作業による切歯の磨耗と推測されている[1-2・1-3]。

わが国に木綿が輸入されるのは室町時代後半で，綿が国内栽培されて普及したのは江戸時代後期(室町時代とする考えもある)。それ以前は麻織物が使われていて，その麻には，大麻と苧麻(ちょま)の二種類があり，古墳時代には両者は半々の割合で使用されていた。苧積み作業は，青苧(あおそ)という粗組織を切歯でくわえ，両手で胸の前に引っ張りながら指の爪で青苧を裂いて細かくし，細くなった両端をつなげる作業をいう。結果的に噛みあう上・下顎切歯の内側(舌側)は，いちじるしく磨耗する。上記の横穴墓の切歯に認められた磨耗は，これらの作業に従事したと思われる女性(青



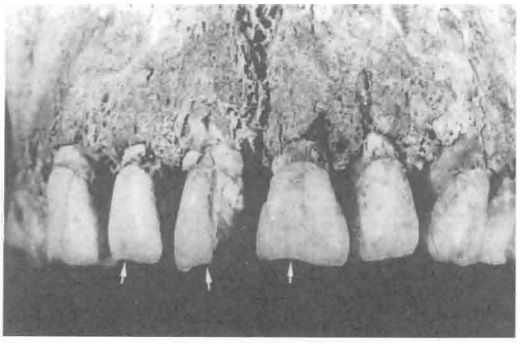
古墳人の減衰曲線（Doi and Tanaka, 1987より改変）

1-1 上ノ原横穴墓の被葬者は，南豊前の位置にあたる。（田中 1991）

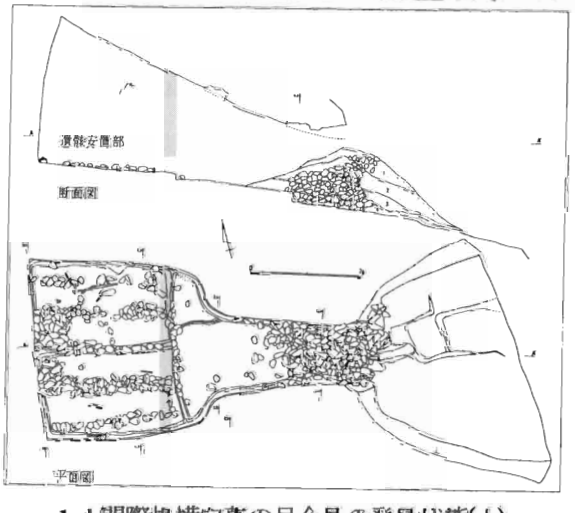
遺跡名（所在地）	時代（年代）	性別 年齢	特殊摩耗の存否
M1. 教来石民部館跡（山梨県白州町）	室町（14～16世紀）	女性 壮年期	2①｜①2 2①｜①2
M2. 前田（長野県佐久市）	室町（14～16世紀）	女性 壮年期	×①｜×2 ×①｜××
M3. 上の山（横浜市緑区）	室町（15世紀）	女性 壮年期	②1｜12 ②①｜1×
A1. 愛宕山下横穴墓群（神奈川県大磯町）	飛鳥（7世紀）	女性 成人	×①｜×× 2×｜××
A2. 奈良、熊谷横穴墓群（横浜市緑区）	飛鳥（7世紀）	少女 13歳	××｜×2 2①｜①2
A3. 下作延横穴墓（川崎市高津区）	飛鳥（7世紀）	女性 20歳	②①｜①2 ××｜××
A4. 井田伊勢宮横穴墓群（川崎市中原区）	飛鳥（7世紀）	女性 壮年期	××｜①× ××｜××

歯式の説明：アラビア数字は永久歯、○内の数字は特殊摩耗のみられる歯、×印は欠損のため状況不明。

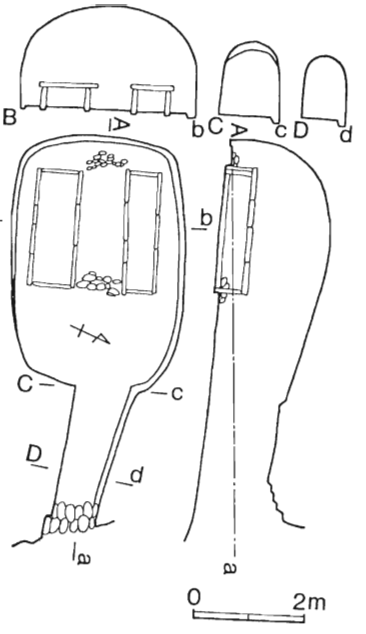
1-2 切歯磨耗がみられる古代・中世資料の一覧。みな女性。（森本 1995）



1-3 下作延横穴墓人に確認された切歯の磨耗。唇側。（森本 1995）



1-4 間際根横穴墓の吊金具の発見状態（上）と玄室内における推定・布帛の位置。



1-5 平瀬川ずい道西横穴墓の平面図。（新井 1988）

年から壮年)と思われ，しかも各横穴墓から複数個体の女性人骨があっても切歯が磨耗している女性は一個体のみ。つまり特殊な技術者なのである。ちなみに苧麻は別名「からむし」。ということで，朝鮮半島との文化交流が示唆されていると言いたいところであるが，それを確実に実証するためには，彼の地で切歯を磨耗する若い女性骨の検出が大前提となる。今後に期待しよう。

次に注意しないと見落とされるような地味な遺物であるが，横穴墓の壁面に小さな鉄製品が刺さって発見される。神奈川県内の横穴墓では，平塚市城山・川崎市高津区間際根[1-4]・高津区久地西前田の各横穴墓から発見されている。鉄製品が刺さっている位置は，玄室と羨門部の境界の両側壁とか棺座を仕切る両側壁などで，玄室面からの高さは約 1.5m前後。多くは鉄鏃の茎部の転用している。情況から推測して，両壁に刺した金具に布帛のような軽い製品の両端を縛り，垂下したものであろう。事例は宮城・福島・静岡・熊本の各県からも発見されている。また，横穴式石室からも似たような事例が発見されている。ただしこちらは吊金具として特注された遺物であり，垂下する位置も横穴墓のような玄室前面のほか，玄室奥面・両側面などが復元できる場合もある。

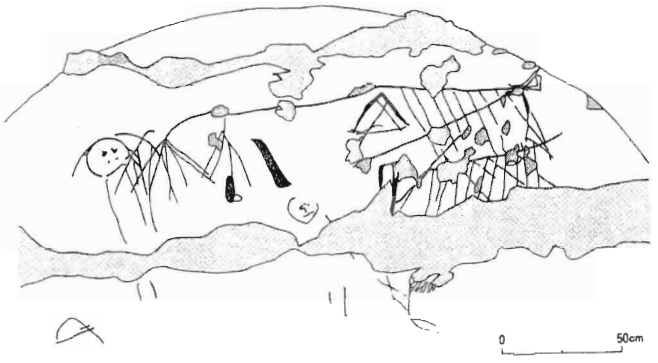
こうした鉄製品を壁面に嵌めこんだり・打ち込んだりする事例は，時期的に国内例より先行する著名な百済・武寧王陵(525 年築造)など朝鮮半島に多く発見されている。私も平成 14 年４月，発掘調査中の慶尚南道の松鶴洞第１号古墳の横穴式石室から発見された吊金具を実見できた。調査者は遺構の構築手法に，在地の伽耶的要素と外来の日本的要素が共存しているとみている。

(3)横穴墓内の追葬・改葬・集骨と片付けなど

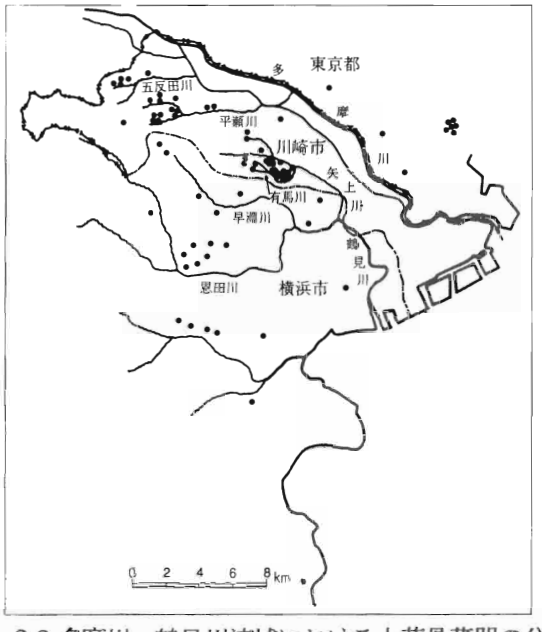
昭和 30 年代の緊急発掘調査のため記録保存上の措置としては十全でないが，それでも大きな問題点を提起している横穴墓の存在も無視できない。つぎにその一例をあげてみる。

神奈川県川崎市高津区の平瀬川隧道西横穴墓は，玄室主軸に平行するようにして２基の組合石棺を置く[1-5]。石棺内には遺骸を各１体を納める。２基の組合石棺の狭間には，川原石と岩塊を積みあげて障壁をつくりそこに２体。２基の組合石棺の前面にも２体。これらの６体はすべて伸展葬である。玄門近くの壁際にも，座位葬で２体が納まり，これで都合８体。さらに北側の石棺床面には川原石が敷かれ，その下層には川砂が厚さ５cm に敷かれ，その川砂の下層からは臼歯と小玉が発見されている。いずれにしろ，狭い玄室内に多数の遺骸が葬儀されていた。副葬遺物としては，石棺と奥壁の間から８本の直刀や 19 本の鉄鏃・1 本の鹿角鏃などがあり，とくに直刀はみな鞘から抜き取って壁に立てかけ，刀身が抜けた鞘は石棺の際にまとめられていた。

鞘から抜き取った直刀を壁際に立てかけ被葬者を悪鬼からガードする思惟は，各地の横穴式石室からも確認されているが，横穴墓でこれほど見事な事例はなかろう。それ以上に注目されるのが，多数の遺骸の存在である。勿論，初葬は北側石棺内の川砂層下の被葬者であろう。が，臼歯だけの発見であるから，これだけで１体とするにはためらわれる。おそらく初葬の遺骸を動かして同じ石棺内に「改葬」したときに，腐敗した遺骸から臼歯だけがこぼれ落ちたものであろう。仮に「改葬」したとすれば，その時期は後から南側石棺に遺骸を「追葬」した際のことであろう。残る 6 体は，

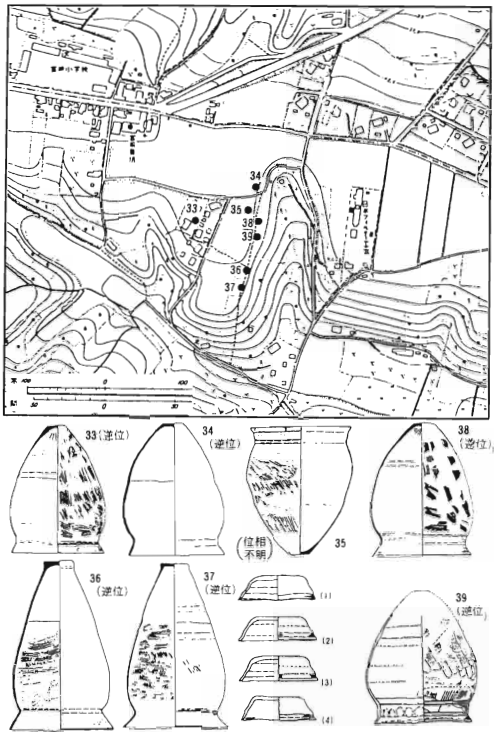


2-1 久本横穴墓群第6号墓奥壁の線刻画。

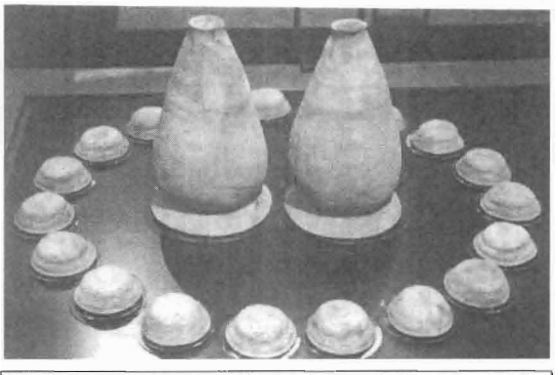


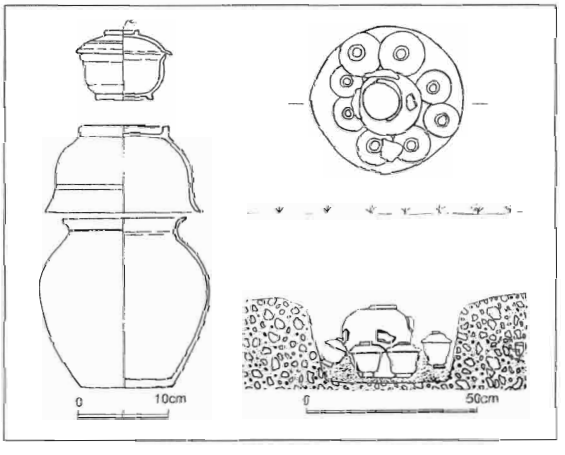
2-2 多摩川・鶴見川流域における火葬骨蔵器の分布図。

2-5 生田古墓発見の両耳付き須恵器骨蔵器と鹿角製刀子柄



2-3 有馬後谷戸古墓の骨蔵器発見位置と出土状態。





2-4 有馬後谷戸古墓(上)と韓国の扶余中井里唐山古墓(下)

石棺に挟まれた２体，石棺前面の２体，玄門近い壁際の座位葬２体の順で「追葬」されたものか。一方，直刀８本と鞘のまとまった発見状態は，到底「追葬」の都度のこととは思えない。最後の「追葬」時に一括してなされた儀礼と思われる。仮にそのように復元すると，直刀８本と遺骸８体はよく符号するし，この横穴墓へ葬送する家系図や序列が順守・確認されていた証左となる。

なぜこのような些事にこだわるのか。近年，横穴墓内から数体前後発見される遺骸や，墓道に構築された小型の横穴墓を「改葬墓」とする考えが出されている。しかし私は不勉強で，氾濫する「追葬」「改葬」あるいは「集骨」などの語彙の分類がよくわからない。

まず「改葬」というと，前記したような後続葬にあわせて先葬骨を丁重に動かすイメージがある。が，そのほかにも，風葬や洗骨葬との関連性も気にかかる。たとえば，八丈島に伝わる「シャリトリ」のように別の場所に一次葬し，ある年数が経過した後掘りだし洗骨して「改葬」する場合。沖縄に伝わる座位葬で納めた四角い木棺を丘陵に掘り抜いた岩窟墓内に納め，３・５・７年目の年忌のほか，次の葬儀がでたとき，それを引き出して洗骨し，骨を骨蔵器(陶製の厨子甕)に「改葬」するような場合などがある。沖縄の場合，数年程度の歳月ではまだ骨に肉がついている。そのため洗骨する縁者の女性は，肉をそぎ落として骨を泡盛で洗うという大変な労働がともなう。このあたりのイメージが共有できていないと，到底この種の議論に深まりは期待できないのである。

ちなみに大化２年(646)年の薄葬令では，庶民にいたるまで殯を営むことを禁じられた。逆説すれば，それまでは庶民階層までが殯を営んでいたことになる。たとえば，平瀬川隧道西横穴墓のような多数の遺骸を順次「追葬」している場合には，一旦喪屋で殯儀礼された人骨であった可能性もあり得よう。参考までに例示すれば，川崎市高津区の久本横穴墓の奥壁に描かれた線刻画は，コケシ形に描写された人間が，切妻構造で板葺屋根の建物の軒先からつながる紐を一生懸命に引っ張っているようだ[2-1]。私はこの建物こそ喪屋であり，葬儀後それを急いで引き倒している仕草でないか推測している。かくして考古学・形質人類学者が協業して，遺骸発見時の解剖学的な観察・復元をすることなどが，これらの議論の深まりを約束してくれることを再度指摘しておきたい。

2. 火葬墓にみる諸相

記録上，最初に火葬を実践した人物は高僧・道昭。ただその遺骸は，親族・弟子などが奪いあう前に飄風(つむじかぜ)に吹かれて行方知らずとなる。が，火葬をした最初の天皇の持統天皇も次の文武天皇も殯宮・誄(るい)・葬司任命など伝統的な儀礼の後に八角形墳内の横口式石槨に納骨されている(天武・持統天皇陵，中尾山古墳)。また墓誌などから，火葬を実践した人物に渡来氏族がいることなどから，火葬が実践できる階層はきわめてきわめて限定的に考えられてきた。しかし，多摩川下流域などを含む東国の事情になると当然ことながら違った景色がみえる。いまその多くを語る余裕はないので，ここでは被葬者像の推測に話題をしぼりたい。

(1).荼毘に付された骨からみえること

現在でこそ発掘調査によって火葬墓が発見されるので，骨蔵器内の人骨も取り上げられ鑑定される。しかし昭和 30 年代に集中的に発見された川崎市域の事例の多くは，農家の人が畑を深耕した際に偶然取り上げられたもの[2-2]。容器内の骨は気味悪がって遺棄されることさえあった。それでも当時の担当者が火葬骨も譲り受け保存してきた。その火葬骨を形質人類学者に鑑定いただいたところ，意外な傾向が判明してきた(表 1)。

年齢別では，成年の最多は十分うなずけるが，意外と若年から青年(思春期前後)の骨が多く，また性別では，判定できる骨では男性的と女性的が相半ばしていた。この事実は，火葬実践者を僧侶・官僚・渡来氏族中心に描いていた従来の史観の見直しを迫るものであった。また，ばらばらの時期に蒐集されてきた個別資料も地図上にプロットしてみると，有馬川・平瀬川などの小河川を見下ろす幾つかの地域単位にまとまることも判明してきた[2-3]。また発掘調査によって解明された川崎市麻生区の坂東谷古墓では，子供は成人墓の土坑規模をすこし縮小した程度の土坑に納まっていた。

これらを総合してみると，一定地域における火葬骨蔵器群のまとまりは，家族を紐帯とした一族の墓域とみれば，年齢・性別からみたバラツキも理解できるし，仏教教理を理解する以前の段階にある子供が，なぜ丁重に葬儀されていたかも首肯できよう。

火葬骨蔵器群のひとつ，川崎市宮前区の有馬後谷戸骨蔵器群からは，逆位となった 3 個体の大形甕を囲むように逆位の坏 20 個体が発見されている。ひとまずこれを心甕多坏式とする[2-4・上段]。国内での類例はまだ知らないが，韓国の扶余中井里唐山古墓からは，大形の壺を中心に小型の盌(椀)がぐるりと廻る火葬墓が知られている。これを心壺多盌式とする[2-4・下段]。当然ながらこの両形式の類似性は注目される。さらに加えるならば，武蔵国橘樹郡の人・飛鳥部吉志五百国の居住を伝える『続日本紀』神護景雲二年(766)の記事は，渡来氏族とのつながりを示唆し，あわせて家族単位で故地の葬法を実践していた可能性をうかがわせているのである。

このように前段の所見からは家族墓的な，そして後段の所見からは渡来系氏族との関連をうかがわせる若干の要素が確認できるのである。

(2).副葬遺物からみえること

火葬墓は薄葬思想と深くかかわるので，副葬遺物は原則的にはない。しかし，被葬者像に関する情報を示唆する顕著な事例もある。そのひとつを紹介する。

昭和 36 年，多摩区生田から耳(把手)付きの有蓋須恵器製骨蔵器が発見された。骨蔵器は 8 世紀中葉以降の製品で，骨蔵器内からは総量 1170 g の火葬骨とともに，鹿角製品 1 点が検出された。この鹿角製品は，小刀の茎部を収める刀子柄である[2-5]。奈良時代を中心とする律令体制の役人は「刀筆の吏」と呼ばれ，彼らにとって木簡を削る刀(刀子)は必需品であった。そこで被葬者には「刀筆の吏」の可能性が俄然浮上してきたが，火葬骨の鑑定結果も予測どおり成年・男性的であった。

これに関連して『三大実録』貞観十四年(872)年の記事によると，武蔵国橘樹郡に居住する節婦・巨勢朝臣屎子は位二階に叙され，同籍の者の課役が免ぜられている。この巨勢姓の者は，奈良時代

に武蔵国に赴任してきた国司に２名確認できる(天平神護二年(766) 巨勢朝臣公成，天応元年(781) 巨勢朝臣池長。ともに従五位下)。いま，橘樹郡内に居住した屎子と，国司・巨勢氏とのつながりは確認しようがないが，赴任国司が任期後も同国内にとどまったり，あるいはその有力な一族が周辺地に居住することは十分にありうるわけで，その場合，生前の業務を象徴する遺品が火葬骨蔵器に納められる理由は納得できよう。

いずれにしろ骨蔵器を含む考古遺物・火葬骨・古文献などを総合化することによって，火葬骨蔵器被葬者像の一斑が垣間見られてきたような思いがする。

3. 高塚古墳・横穴墓そして火葬墓

畿内から波及した火葬墓の受容にあたっては，地域的な事情が反映する。岡山県下では，奈良・平安時代の古墓 94 遺跡中，11 例が終末期古墳の石室へ火葬骨を追葬している。火葬という革新の葬法をとりつつも前代までの伝統的な記念物とのつながりが不可分で，おそらくこれは前代(石室内被葬者)との地縁や血縁性を証明するための行為なのであろう。

では，ここで話題にしてきた川崎市域を事例ではどうであろうか。

3-3 に図示したように，有馬川左岸域と平瀬川上流域の火葬墓群，平瀬川下流域で多摩川に面した横穴墓群，その中間の矢上川左岸域の高塚古墳群という顕著に地域分けができ，矢上川左岸域の高塚古墳群の次段階には，橘樹郡の郡寺である影向寺(橘樹寺)と橘樹郡衙が後続する。

火葬墓については，前記したように考古遺物・火葬骨・古文献などの総合所見から展望の一斑は垣間見えた。ただ，肝腎な集落・住居遺構など生活遺構に関する考古学上の情報は今のところ皆無である。高塚古墳群＋郡寺＋郡衙については，全国的にも普遍的な組合せである。もっともむずかしいのは，横穴墓群の位置づけである。

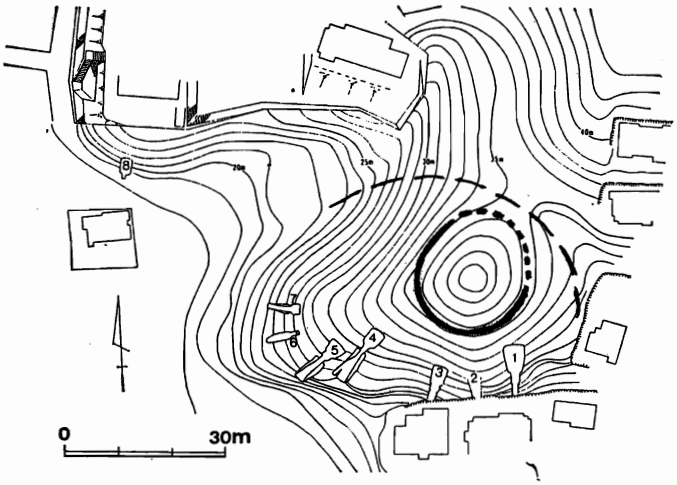
たとえば，高津区下作延の日向横穴群とその上位に位置する日向古墳は，セット関係の所謂「墳丘横穴墓」でまず間違いない[3-1]。すなわちこの「墳丘横穴墓」の墳丘は，直径 20 数m前後の盛り土に一列の埴輪(６世紀後半)列を巡らした部分――墳丘中心部に11本のトレンチを入れても石室類は確認できなかった――が相当し，「内部主体」は銅鋺などを副葬した複式構造の横穴墓(第３号墓)など７基の横穴墓が該当していることになる[3-2]。従ってここでは個々の横穴墓ではなく，両者を一セットとして捉えた範囲こそ注目すべきで，それは3-1 に細い破線で加筆した直径数十 m 前後を測る一大墳墓記念物となる。あきらかに南西位からの正面観も意識されていよう。

そのほかこの地域の横穴墓は，規模すこぶる大のほか，副葬遺物類も高塚古墳のそれに遜色のない質・量がともなう。たとえば，幅 3.8m，長さ 3.8mを測る超大形玄室部の奥壁沿いに設けられた「有蓋の造付け刳抜式箱形石棺」とか，組合せ石棺や木棺，銅鋺や銀象眼直刀などの遺物はその一部であり，６世紀代に築造が隆盛している。つまりその歴史的背景に訳ありを感じさせる。

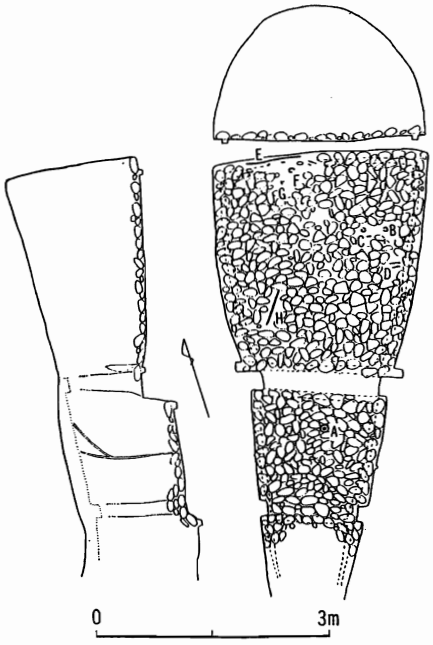
ちなみに律令下の橘樹郡には，橘樹・高田・御宅・県守(あがたもり)の四郷が当初置かれた(その

表1　川崎市域発見の火葬墓鑑定人骨の内訳

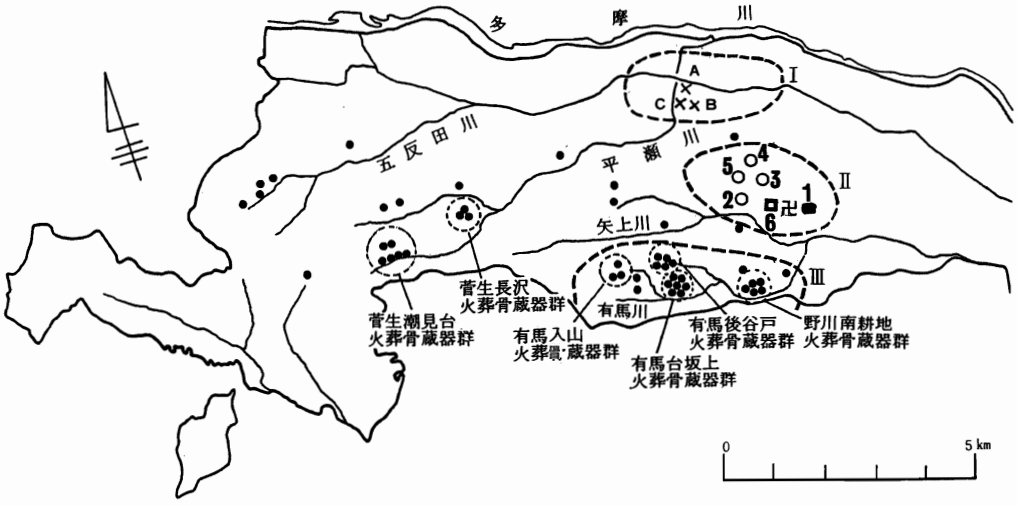
年　　齢	性　別	個数
若年（3～6歳）	性別不明	3
若年ないし青年（思春期前後）	性別不明	1
青年ないし成年	成年なら女性的	1
青年ないし成年	性別不明	4
成　　年	男性的	5
成　　年	男性的特徴優先	1
成　　年	女性的	3
成　　年	女性的特徴優先	1
成　　年	性別不明	2



3-1 日向横穴墓群と日向古墳。あわせて墳丘横穴墓。
日向古墳の埴輪位置を黒線で加筆。(伊東 1988)



3-2 日向横穴墓群第3号墳。
横穴式石室の複式構造を模する。



3-3 川崎市域における高塚古墳(II域)・横穴墓群(I域)及び骨蔵器群(III域)の分布図。
II域の郡寺(6)に隣接して郡衙(1)が発見された。

後，駅家郷が加わる)。橘樹郷の中心は，高塚古墳群＋郡寺＋郡衙が集中する野川・千年・子母口周辺地域で決まったようなもの[3-3のⅡ域]。高田郷は横浜市側に入った高田地域を中心とした地域でほぼ間違いない。御宅は屯倉と不可分にあるから，安閑天皇紀の国造職をめぐる争いとも関連しているのであろうが，考古資料から地域は特定できていない。県は，国のほかに大化前代にあった地方区画であり，その首長が県主(あがたぬし)であった。県守と県主が同じかどうかは異説があるようだが，「県」地名の分布からみて畿内勢力との強い関係は想定できる。平瀬川下流域で多摩川に面した津田山・久地・溝の口周辺の横穴墓に見られる秀逸な考古遺構・遺物は，強力な勢力基盤をもつ一族従類で，県守郷長に脈絡するような人物の奥津城である可能性を想察させてくれる。

主要参考・引用文献(順不動・個別の遺跡報告書は原則的に割愛した)

古墳時代プロジェクトチーム　1995～2002　「横穴墓の研究(1)」から「横穴墓の研究(8)」『神奈川の考古学の諸問題(Ⅱ)・かながわの考古学第５集』及び『かながわの考古学・研究紀要7』，(財)かながわ考古学財団。

伊東秀吉　1988　「日向横穴墓群」『川崎市史・資料編１』，川崎市。

上田薫「横穴墓」　1993　『神奈川県の考古学の問題点とその展望・かながわの考古学第３集』，神奈川県立埋蔵文化財センター。

池上悟　2000　『日本の横穴墓』，雄山閣出版。

池上悟　2004　『日本横穴墓の形成と展開』，雄山閣出版。

古江亮仁　1968　「市域のおいたち・先史時代及び古代」『川崎市史』，川崎市。

和田萃　1973　「殯の基礎的考察」『森浩一編・論集終末期古墳』，塙書房。

村田文夫　1990　「墳墓・古代」『坂詰秀一編・歴史考古学の諸問題』，近藤出版社。

村田文夫　1993　『古代の南武蔵－多摩川流域の考古学－』，有隣新書45，有隣堂。

森本岩太郎　1995　「苧積み作業によると思われる飛鳥・室町時代女性切歯の磨耗」『人類学雑誌』第103巻第５号，日本人類学会。

新井清　1988　「平瀬川隧道際横穴墓群」『川崎市史・資料編１』，川崎市。

村上久和　1991　「北九州周辺の横穴墓－発生期の横穴墓をめぐって－」『おおいた考古』第４集(特集・日本の横穴墓)，大分県考古学会。

田中良之　1991　「横穴墓被葬者の情報」『おおいた考古』第４集(特集・日本の横穴墓)，大分県考古学会。

花田勝広　1991　「近畿横穴墓の諸問題」『おおいた考古』第４集(特集・日本の横穴墓)，大分県考古学会。

*沖縄などの葬祭儀礼などについては，小島瓔禮氏(琉球大学名誉教授)の御教示をいただいたが，記述に誤りがあれば，文責は村田にあることを明記する。

横穴墓の線刻画

柏木 善治

はじめに

神奈川県は横穴墓の密集地域であると同時に、線刻されたものの存在も全国的に多いといえる。それら線刻という所作のなされた現象をどう理解していくか。分布や意匠の内容、年代的な側面などをふまえ、線刻画から見いだされる種種の事象を神奈川・東京を中心にみていくこととする。

1．装飾古墳の種類

装飾古墳は現在次の４種類に分類されている。

石棺系　４ｃ頃に発生した装飾古墳の初現といえる形態で、石棺の蓋や内部に直弧文や円文、鏡や武器・武具などを浮き彫り及び線刻したもの。

石障系　５ｃ前半以降発生した石障や仕切石に主に浮き彫りや彩色で装飾をしたもの。直弧文・円文・靫などが描かれ、石棺系と壁画系を繋ぐ存在といえる。

壁画系　６ｃ初頭頃から出現し、石室の壁面に彩色や線刻で壁画を描いたもの。九州に数多く、７ｃには鳥取や茨城にも彩色壁画が出現する。終末期には奈良県に全く違うタイプの極彩色壁画古墳が現れる。神奈川県では唯一川崎市の馬絹古墳があげられる。

横穴系　横穴墓の壁面に彩色や線刻で壁画を描いたもの。九州や東日本、山陰、近畿にも分布し、建物内部の梁などが表現されるものもある。神奈川県の横穴墓にも線刻を主体として比較的多く認められる。

2．装飾古墳と横穴墓の提示

彩色された横穴墓

丹彩や漆喰、白色粘土による装飾があるとされるが、判然としないものが多い。丹彩とされたものでローム層の地盤を掘削したものは、壁面に鉄分などが浮き出す自然現象の可能性もあり、漆喰がみられるとされる横穴墓も地質が類似する三浦半島や大磯丘陵などで多く、なかには土中の石灰質の影響を受けたものも含まれることが考えられる。

過去に報告などがされたものをみていくと、市ヶ尾15号などでは大型斑文を丹色で彩画したとされ(赤星1970)、白山神社裏は棟木や梁の表現とともに、玄室前半部側壁上部に丹色が点々と残存し、もとは壁面を全面丹彩と想定されている(赤星1970)。たれこやとなどでは漆喰と思われる白色顔料が残存とされ(大磯町郷土資料館1994)、浅間神社西側９号では、灰白色の粘土物質が刷毛状工具により奥壁など玄室内の壁面に塗布とされている(曽根1978)。

線刻された横穴墓

線刻された横穴墓は管見の限り52基を数え、都県別の内訳は神奈川49基、東京３基である。分布は以下のように、大きくは４つの地域に分けられる。①相模湾沿岸部の大磯丘陵南端、②相模湾沿岸部の境川流域、③多摩川と鶴見川に挟まれた地域、④三浦半島の東京湾側などで集中する。神奈川県では初現期の横穴墓が存在し、継続して展開するような地域である。そのなかで、矩形や撥形などの玄室形態及び付帯施設、規模においても線刻の有無による相違及び偏在は認められない。

３．描画の特徴と種類

線刻される場所

横穴墓の壁面に描画されるものは、すべて線刻であり陽刻のものはない。横穴墓が構築される丘陵や、台地の斜面等に施されるものも現在までは確認されていない。線刻が描画される壁面は、奥壁・玄室左右壁・天井・羨道左右壁・屍床仕切など多彩である。奥壁のみされるものは久本６号や高山７・８号、不動橋11号などの11基と最も多く、次いで玄室左壁のみのものが熊ヶ谷７号や桂町B-7号、七石山１・12号などの８基と続く。基本的に線刻は天井が上(天)、床が下(地)と意識して描かれたものが多いが、万田宮ノ入８号などは側壁から天井にかけて描画され、不明瞭ながら上が右(東)壁のように描かれる。あたかも東枕の被葬者を意識したような描画を成す特異な例である。

線刻による描画の特徴

線刻されている図の内訳は、形象では人物24例、馬５例、鳥７例、船９例、武器・武具７例(いずれも横穴墓単位)などで、なかでも人物が描かれる例が多く、線刻横穴墓の約半数に認められる。他、魚状、翳状、建物状、梯子状、格子目状、樹木状なども比較的多くみられ、それらが総合的に描かれるものとしては、白山１号や熊ヶ谷２号、堂後下９号などがあげられる。他方、文様は熊ヶ谷７号の同心円、王禅寺白山１号や洗馬谷４号の三角文のみである。

人物は赤星氏の先行研究により、一部は仏像との理解がされている(赤星1964･70など)。人物における特徴のひとつには鼻の表現があり、ａ・ｂと２種の相違点が見いだせる。ａは万田宮ノ入８号に代表され、鼻を２点の鼻孔により表現するもの。ｂは、早野や不動橋11号に代表され、鼻孔部分は潰され鼻筋の表現が強調されるものに大別される。ａは奥壁ほか様々な箇所でみられるが、ｂは奥壁のなかでも中央部に描画されるものが多い。早野や王禅寺白山１号などは、他の描写を無視して改めて描き足すという印象で、奥壁中央に存在感を持って描かれるという点では、越の山２号や庄ヶ久保８号に代表される仏像の描画と理解されてきたものに共通する。

ａ・ｂの違いをどう考えるべきか。古代の土師器坏に墨書された顔面像は、その表現が早野の奥壁顔面像に近似する。鼻孔表現の有無が、時代観を推し量る上での相対的な変化と捉えられるであろうか。仏画は発見されている線刻を持つ横穴墓がすべて既開口であることなど、後世の所作の可能性は否めない。ｂとした人物像や、庄ヶ久保８号の蓮葉状の表現などは後出的な色彩が強い。

モチーフとしての情景

線刻の各意匠が複合された総体としては、どのような解釈が可能であるか。A：具体的な情景とB：不明な情景の二種に大別することができるものと考える。Aとした具体的な情景は、生前の闊達な姿を描写したような比較的簡素な印象を受けるものであり、Bとした不明な情景はあたかも葬送観念を意識したような複雑に交錯する印象のものである。

線刻が施される横穴墓は、その大半が墓室内の１～３箇所程度、断片的に描画されるものであり、A・B共に神奈川・東京では主体となりえない。しかし、断片的に描画されるものはA・Bに分類したなかに個別の意匠として採用されているものもあり、原点は二種のいずれかに内包されていると考えられる。

A：具体的な情景　現在検証不可能な横穴墓もあるが、おそらくは生前の活動を物語るもので、舟戦・牧・漁などの情景と理解されているものがある。

「舟戦」は洗馬谷２号(赤星：1948)、「牧」は早野(三輪・村田1975)、「漁」は大日ヶ窪１・９号、堂後下12号などでみられる。

B：不明な情景　葬送観念を表していると理解されるが、辟邪の意匠としての認識も必要であろうか。代表的なものは王禅寺白山１号、熊ヶ谷２号、万田宮ノ入８号、堂後下９号などがある。

王禅寺白山１号のように樹木状の線刻が多く描画され、樹木状の線刻の一部はあたかも対で居並ぶゲートを表すかのように表現されるもの。熊ヶ谷２号や万田宮ノ入８号のように梯子状の線刻があたかも対の櫓を表すかのように描画され、そのなかには舟も見られるもの。堂後下９号のように両者が混在するものに分けられる。万田宮ノ入のみは左壁→天井→右壁への展開が考えられそうであるが、その他は玄門から奥壁方向に展開する描画として捉えられる印象である。

これら意匠に共通してみられることは、ゲートもしくは櫓状(梯子状)の線刻により展開が区切られていることであり、玄門・側壁・奥壁への視点の流れがあるとすれば、現世から冥界への旅路の行程が表現されているとも見受けられる。

すべてのモチーフが一時期に同時に描かれたとは考えにくく、時期を隔てた描画も考えられる。熊ヶ谷２号では側壁の人物像と奥壁の人物群は表現が異なり、顔面を抉り取られた人物像を中心とする後者は、あたかも奥壁中央に後刻されたものとも考えられる。また、王禅寺白山１号では奥壁中央の人物顔面像や翳状(天蓋)とみられる表現、万田宮ノ入８号の翳状(天蓋)や梯子状(幡)と見られる表現など仏教的色彩の強いものも存在し、いずれも後刻と考えられるであろうか。

４．線刻画をとりまく諸現象

横穴墓群内での位置と年代的指標

線刻の描画時期はいつになるのであろうか。線刻を持つ横穴墓はいずれも既開口墓であり、直接的な年代の指標は提示できない。いずれの横穴墓も副葬品を多く持つものはなく、全く遺物の出土しな

いものもある。横穴墓出土の遺物は初葬時、追葬時などと多岐にわたるものであり、それが構築や線刻の年代を表すものではない。

線刻を持つ横穴墓のなかで、最も古い遺物を内包するものは熊ヶ谷２号で、その須恵器提瓶はMT85とされる。これは、神奈川・東京における横穴墓の出現を考える上でも重要な位置を占めるものであり、熊ヶ谷の周辺を概観しても、TK43段階からは横穴墓が確実に存在するとされるが(浜田:1997)、それに先行しての存在となる。

横穴墓群のなかではどのような位置を占めるか。線刻を持つ横穴墓の数は、総数に比してもごく限られた数であり、一つの横穴墓群にその存在が大きく偏ることもない。群としての調査がなされた大日ヶ窪では2／33基、熊ヶ谷でも3／25基、万田宮ノ入では2／10基、堂後下では2／13基に線刻がされるのみである。この数は群の認識や今後の発見などにより大きく左右されるものではあるが、線刻の見られる横穴墓群ではこの比率を大きく超えるものは現在のところ存在しない。

律令的な現象との関係

仏教にその要素が求められる意匠の可能性は梯子状(幡)・翳状(天蓋)などに見出せる。出土遺物としては銅鋺・鉄鉢形土器・畿内産土師器坏・匙などが仏教関係の遺物として提示できるであろうか。これらの遺物を出土する横穴墓・古墳には、現在のところ線刻は認められていない。

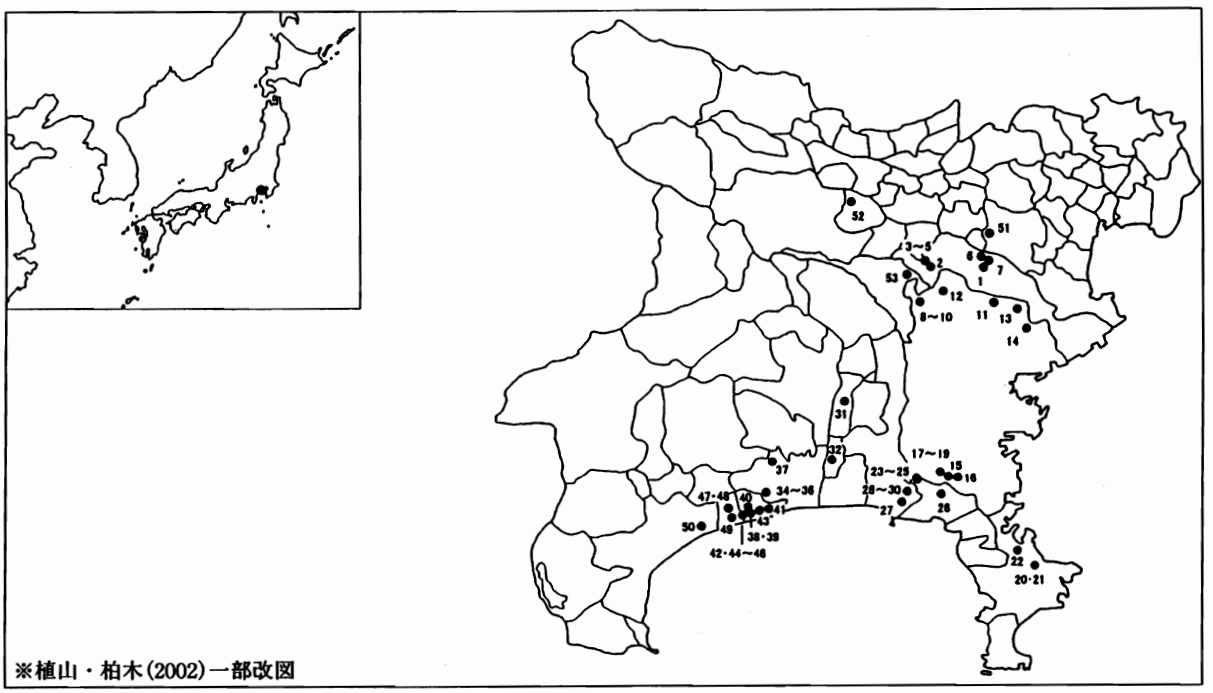
地域内へ仏教が浸透していく過程として、線刻された幡や天蓋の存在が考慮されるが、その浸透がダイレクトに葬送観念として横穴墓の線刻に反映されたとは考えにくい。現状では、断片的な採用のみに止まったと理解するのが良いであろうか。

５．小　結

墓に絵を描くという行為が、古墳時代に行われたことは否めない事実である。しかし、閉塞が行われた内部はとても暗く、線刻などはその意匠を眼で判然と見極めることは困難である。玄室内は現世とは隔絶された空間であり、描かれた意匠は死者に手向けた生者からのメッセージのごとく陰陰とした空間に存在している。

かような線刻が描かれた横穴墓の分布は、沿岸部と鶴見川・多摩川流域に大きく偏りを見せ、群内では主体とならず、形態などの偏在もない。意匠は、形象及び文様があり、なかで、人物は鼻孔の表現からａ・ｂと分類し、ａ→ｂへの相対的な変化を推察した。仏教的な要素として翳状は天蓋、梯子状は幡としての存在を推定し、ｂ人物像と共に後出的と捉えた。意匠の集合体である情景はＡ：具体的な情景とＢ：不明な情景に大別し検討を試みた。

古墳・横穴墓から出土する仏教関係の遺物は、古墳から寺院へという時節の流れのなかで解釈すべきものと固執し、次代へ至る墓制の変化は火葬という一側面のみで理解しようと試みていた。しかし、仏教受容後の横穴墓を考える上で、別の埋葬・葬送における理解という認識も必要であろう。それらの一つの過程を示すものが線刻画であり、葬送観念の一端を現すものであると考えている。



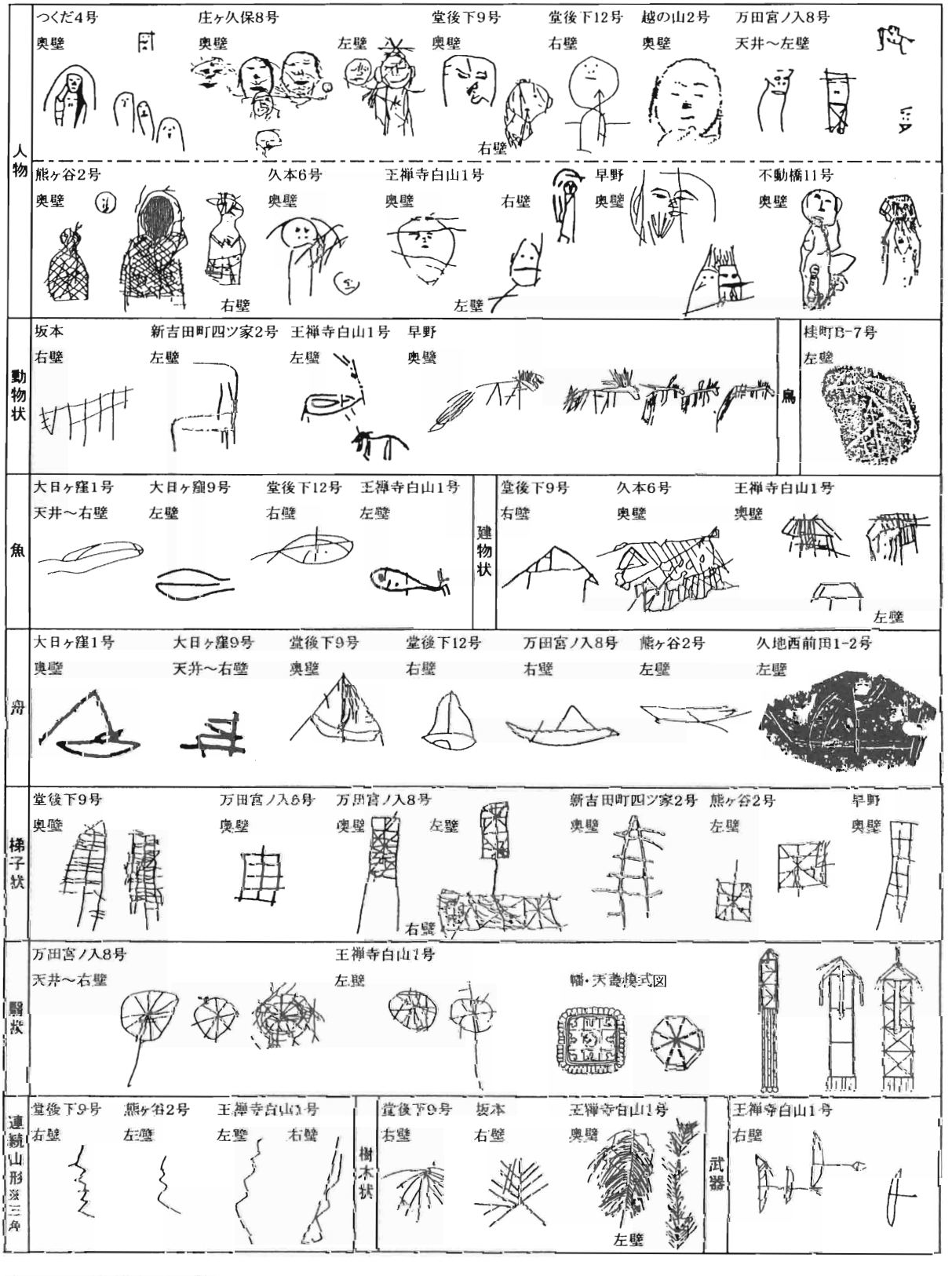
※植山・柏木(2002)一部改図

No.	遺跡名		所在	備考
1	馬絹	－	川崎市宮前区	白色粘土による，円文・「N」字状？
2	早野	－	川崎市麻生区	騎馬人物？あり・建物状・梯子状 左右壁は写真のみ
3～5	王禅寺白山	1号		連続三角文・鼎状・魚状・動物状・建物状・樹木状・楕円文
		2号		格子目など 報：江戸期（文化）にも線刻？
		3号		格子目状・幡状・樹木状 報：江戸期（文化）にも線刻？人物は後世仏画？
6	久地西前田	1次 2号	川崎市高津区	舟
7	久本	6号		切妻建物・人物など
8～10	熊ケ谷	2号	横浜市青葉区	奥壁中央人物外側の弧線は光背か 舟・鼓形の意匠・連続山形（三角）・魚？ 格子目状，※人物は2種あり （奥壁中央の人物は顔を抉り取られる）
		3号		意味不明（扇状斜線） （他壁にも後世？のもの数カ所あり）
		7号		同心円は方形区画内・斜格子状・鳥？など
11	新吉田町四ツ家	2号	横浜市港北区	動物状・梯子状
12	稲荷前	B－3号	横浜市青葉区	意味不明 石9枚分（縦列3枚は両面あり）
13	笑輪洞谷	4号	横浜市港北区	三角形内部を斜線で充填 報：年代疑問視（天井に「圃」の線刻）
14	大山	－	横浜市鶴見区	詳細不明，「線刻文様による壁面装飾を持つものがある」という
15	桂町	B－7号	横浜市栄区	水鳥？
16	中居丸山	A－2号		写真のみ，弓・矢，報：年代疑問視
17～19	七石山	1号		人物・弓・矢 ※「塗喰装飾後に描画」とされる
		6号		人物？
		12号		帆船？（2m×80cmの範囲）
20・21	高山	7号	横須賀市	意味不明
		8号		意味不明，※坂本横穴1号に類似
22	坂本	－		馬らしき？線刻（現在消滅・模造） 意味不明（玄室）
23～25	洗馬谷	2号	鎌倉市	人物・舟・弓・矢・盾など多数（舟戦）
		3号		人物など，後世の線刻もあり
		4号		人物・家など，三角文：家？
26	千葉ケ谷	1号		人物（顔）
27	新林右西斜面	1号	藤沢市	写真のみ，直線による意匠 （放射状・平行四辺形状などあり）

No.	遺跡名		所在	備考
28～30	森久谷	S－4号	藤沢市	写真と不明瞭な拓影のみ，人物のみ
		S－8号		不明瞭な拓影のみ，意味不明
		7号		人物など多数？
31	杉久保富谷	3号	海老名市	意味不明
32・33	越の山	2号	高座郡寒川町	人物・縦線など（顔のみ※他剥落？） 垂下様式の耳・仏像と想定
		4号		文章のみ，人物・縦線など 報：仏像と想定
34～36	万田宮ノ入	2号	平塚市	平行四辺形状，他詳細不明写真のみ 報：年代疑問視
		6号		格子目状・方形状など
		8号		鼎状・格子目状・梯子状・樹木状
37	城山B地点	7号		斜線基調のもの
38・39	堂後下	9号	中郡大磯町	建物状・梯子状・連続山形（三角），弓・舟？は判然とせず，人物など多数 分布調査：3号「1～3・10号に線刻あり」と記載，1955年の調査との対比は困難
		12号		魚と銛 ※矢を受けのけぞる？ ※「1～3・10号に線刻あり」と記載，1955年の調査との対比は困難
40	庄ケ久保	8号		蓮の葉・茎 ※奥壁は三尊仏？，左壁人物には白毫？ ※分布調査：7号
41	清水北	1号		図・写真なし ※奥壁人物は白毫？ ※分布調査：15号
42	たれこやと東	1号		※分布調査「線刻らしきものあり」とのみ記載
43	高平	1号		※分布調査「線刻あり」とのみ記載
44	がまん谷戸西	2号		※分布調査「線刻あり」とのみ記載
45	東奥沢	7号		※分布調査「線刻あり」とのみ記載
46	西奥沢Ⅶ	－		※分布調査「線刻らしきものあり」とのみ記載
47・48	大日ケ窟	1号	中郡二宮町	魚 ※報：幾何学文？ 報：年代疑問視
		9号		魚 ※報：幾何学文？
49	諏訪脇	東1号		写真のみ，意味不明 ※報：多数の櫂を持つ船と想定
50	羽根尾つくだ	4号	小田原市	人物など多数 ※人物外側の弧線は光背か？
51	不動横	11号	世田谷区	動物状・魚状・鼎状・杖？など
52	坂西	1号	日野市	※「馬・鳥らしき」と記載 他「永仁」の文字線刻あり
53	能ケ谷カゴ山	7号	町田市	

第1図　神奈川・東京の装飾古墳

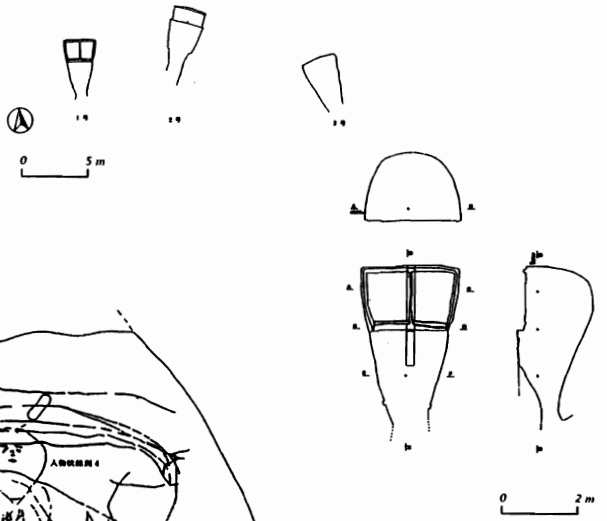
※1は古墳，2～53は横穴墓

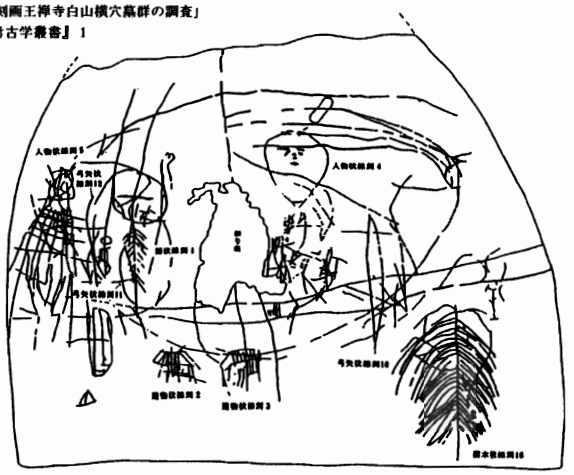

人物
つくだ4号 奥壁
庄ヶ久保8号 奥壁
左壁
堂後下9号 奥壁
右壁
堂後下12号 右壁
越の山2号 奥壁
万田宮ノ入8号 天井～左壁
熊ヶ谷2号 奥壁
右壁
久本6号 奥壁
王禅寺白山1号 奥壁
右壁
左壁
早野 奥壁
不動橋11号 奥壁
動物状
坂本 右壁
新吉田町四ツ家2号 左壁
王禅寺白山1号 左壁
早野 奥壁
鳥
桂町B-7号 左壁
魚
大日ヶ窪1号 天井～右壁
大日ヶ窪9号 左壁
堂後下12号 右壁
王禅寺白山1号 左壁
建物状
堂後下9号 右壁
久本6号 奥壁
王禅寺白山1号 奥壁
左壁
舟
大日ヶ窪1号 奥壁
大日ヶ窪9号 天井～右壁
堂後下9号 奥壁
堂後下12号 右壁
万田宮ノ入8号 右壁
熊ヶ谷2号 左壁
久地西前田1-2号 左壁
梯子状
堂後下9号 奥壁
万田宮ノ入6号 奥壁
万田宮ノ入8号 奥壁
左壁
右壁
新吉田町四ツ家2号 奥壁
熊ヶ谷2号 左壁
早野 奥壁
鬚状
万田宮ノ入8号 天井～右壁
王禅寺白山1号 左壁
幡・天蓋模式図
連続山形(三角)
堂後下9号 右壁
熊ヶ谷2号 左壁
王禅寺白山1号 左壁
右壁
樹木状
堂後下9号 右壁
坂本 右壁
王禅寺白山1号 奥壁
左壁
武器
王禅寺白山1号 右壁

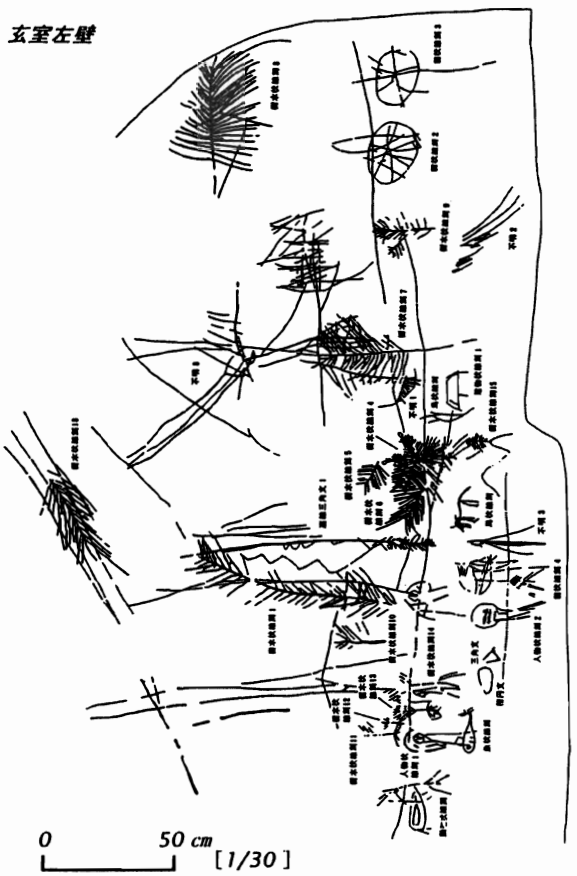
第2図　線刻意匠一覧

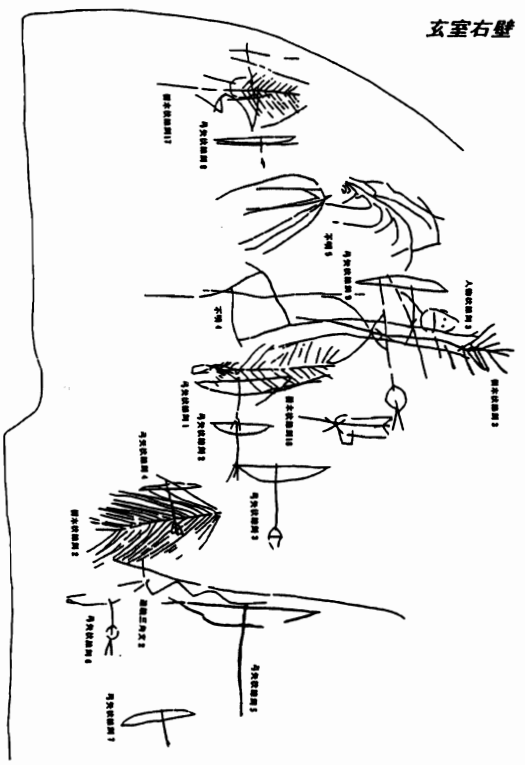
王禅寺白山横穴墓群 第１号墓（おうぜんじはくさん）

所在地	神奈川県川崎市麻生区王禅寺字白山
立地	真福寺川左岸の舌状台地南斜面　標高約 48 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁なし・敷石
時期	７世紀前葉
出土遺物	なし（調査は部分的に実施）
図文の場所・方法	玄室（奥壁・左右両壁）　線刻
図文の種類	三角文・楕円文・弓・矢・人物・鞘状・馬・動物状・鳥状・魚状・建物状・榊木状など
その他	叙事詩的 ６基からなる横穴墓群、西側３基を１区、東側３基を２区として区分
主要文献	東原信行 1984「川崎市北西部谷本川流域の横穴古墳群」 『川崎市文化財調査集録』第 20 集　川崎市教育委員会 村田文夫・浜田晋介 1994「線刻画王禅寺白山横穴墓群の調査」 『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』１





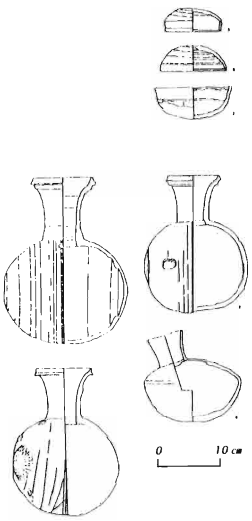


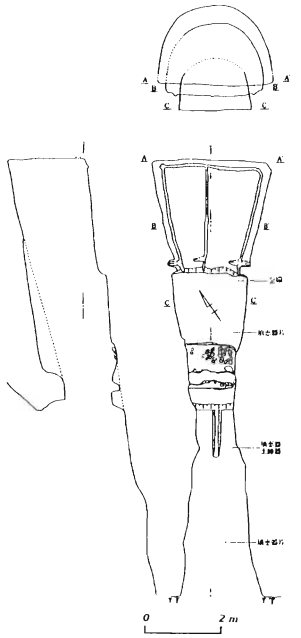


第３図　神奈川の線刻横穴墓（1）

早野横穴墓（はやの）

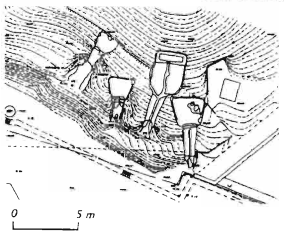
所在地	神奈川県川崎市麻生区早野字上ノ原
立地	鶴見川流域、多摩丘陵南縁付近の西斜面
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	複室・前壁あり・敷石
時期	7世紀中葉
出土遺物	須恵器長頸壺・平瓶・坏蓋、土師器坏、金環、鉄製品（鉄鏃・刀子）
図文の場所・方法	奥室（奥壁・左右壁）　線刻
図文の種類	人物・馬・建物状・梯子状など
その他	叙事詩的　2群16基からなる横穴墓群中の1基
主要文献	樋口清之 他 1974「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」 『川崎市文化財調査集録』第9集　川崎市教育委員会 村田文夫・浜田晋介 1994「線刻画王禅寺白山横穴墓群の調査」 『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』1

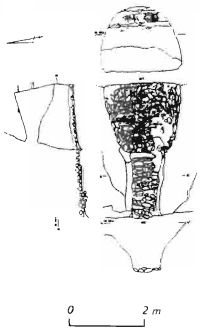


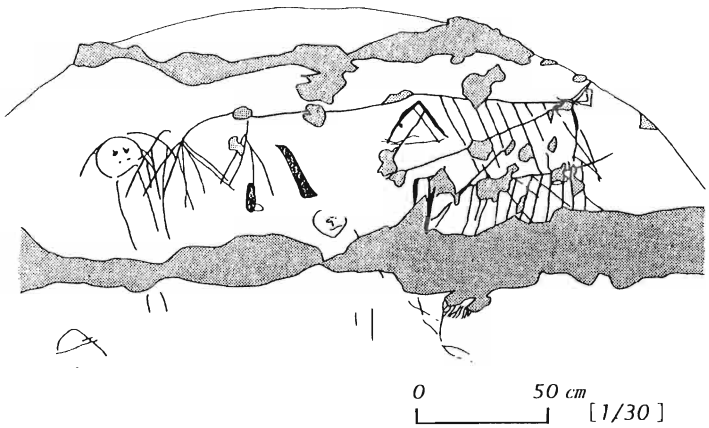


久本横穴墓群 第6号墓（ひさもと）

所在地	神奈川県川崎市高津区久本
立地	多摩川下流域右岸の丘陵西側斜面　標高約19.5 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁あり・敷石
時期	およそ7世紀代
出土遺物	金環、ガラス玉など
図文の場所・方法	玄室（奥壁）　線刻
図文の種類	人物・建物状など
その他	叙事詩的　2群13基からなり、前壁が存在するもの多し
主要文献	後藤喜八郎 他 1996『川崎市高津区久本横穴墓群発掘調査報告書』 久本横穴墓群発掘調査団

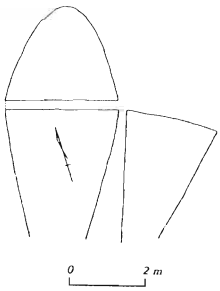


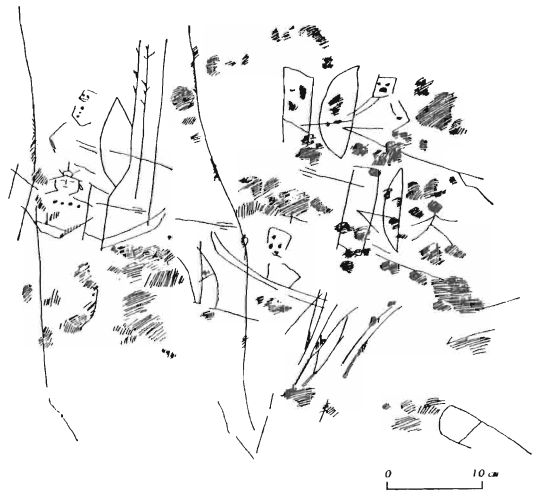




洗馬谷横穴墓群 第2号墓（せんばがや）

所在地	神奈川県鎌倉市関谷
立地	小谷中程の西南斜面
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁なし
時期	7世紀末～8世紀
出土遺物	なし
図文の場所・方法	玄室（右・左壁）　線刻
図文の種類	人物・舟・弓・矢・盾など
その他	叙事詩的（舟戦）　横穴群は小規模、2基ずつ上下2段のつごう4基が存在
主要文献	赤星直忠 1948「相模洗馬谷横穴群に就いて」 『考古学雑誌』第35巻第1・2号 合併号 神奈川県県民部県史編集室 1979『神奈川県史』資料編20 考古資料

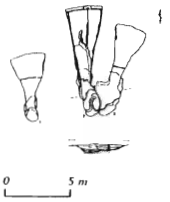


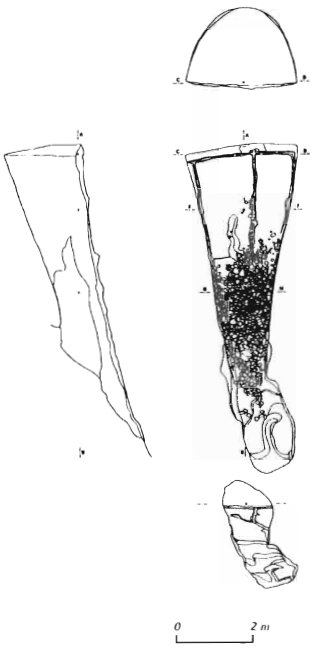


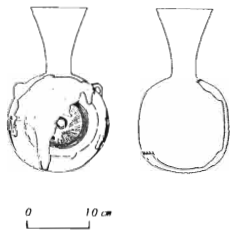
第4図　神奈川の線刻横穴墓（2）

熊ヶ谷横穴墓群 第２号墓（くまがや）

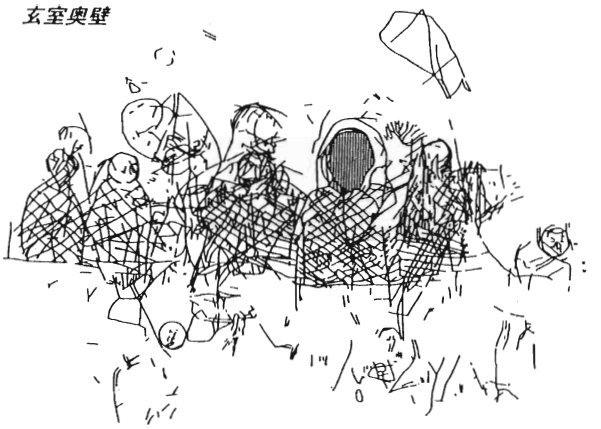
所在地	神奈川県横浜市青葉区奈良町
立地	奈良川西岸の谷戸　標高 65 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁なし・敷石
時期	６世紀末～７世紀前半
出土遺物	須恵器提瓶、鉄製品（刀子・鉄鏃・両頭金具）、耳環、ガラス小玉
図文の場所・方法	玄室（奥壁・左右両壁）　線刻
図文の種類	人物（仏含む？）・舟・梯子状・格子目状・連続山形（三角）など
その他	横穴墓は南斜面に 19 基、東斜面に６基の２支群 25 基
主要文献	池上悟 他 1984「熊ヶ谷横穴墓群」『奈良地区遺跡群発掘調査報告書』II



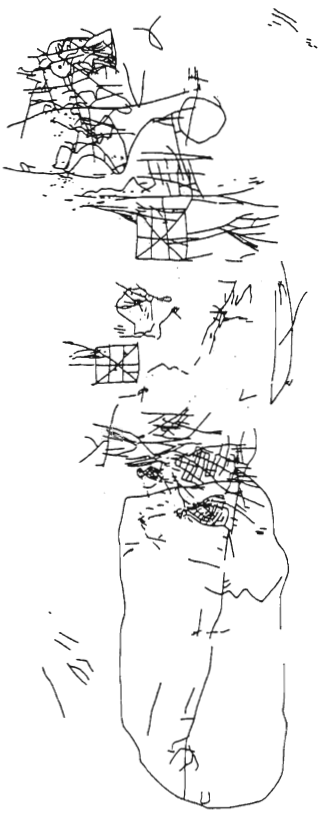


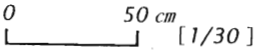


玄室奥壁



玄室左壁



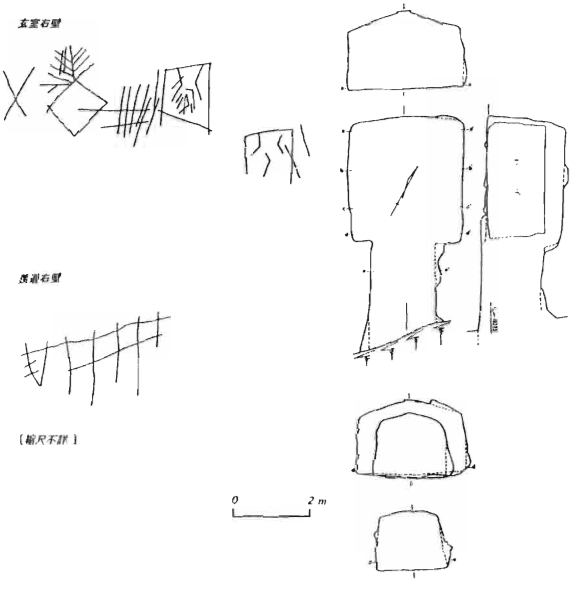


玄室右壁

第５図　神奈川の線刻横穴墓（3）

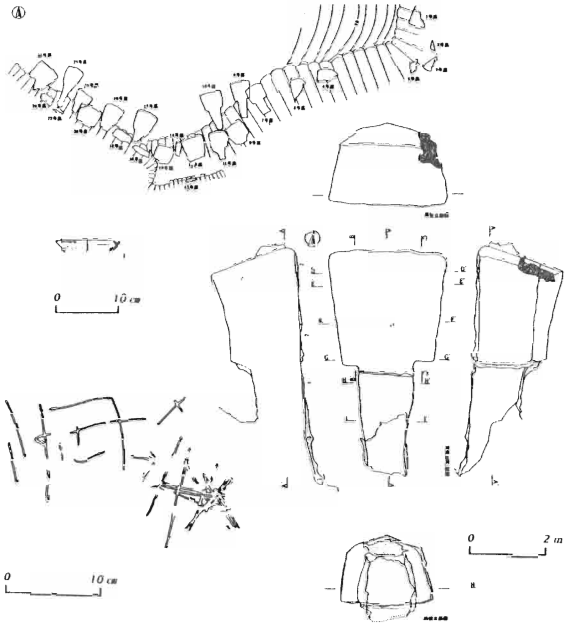
坂本横穴墓（さかもと）

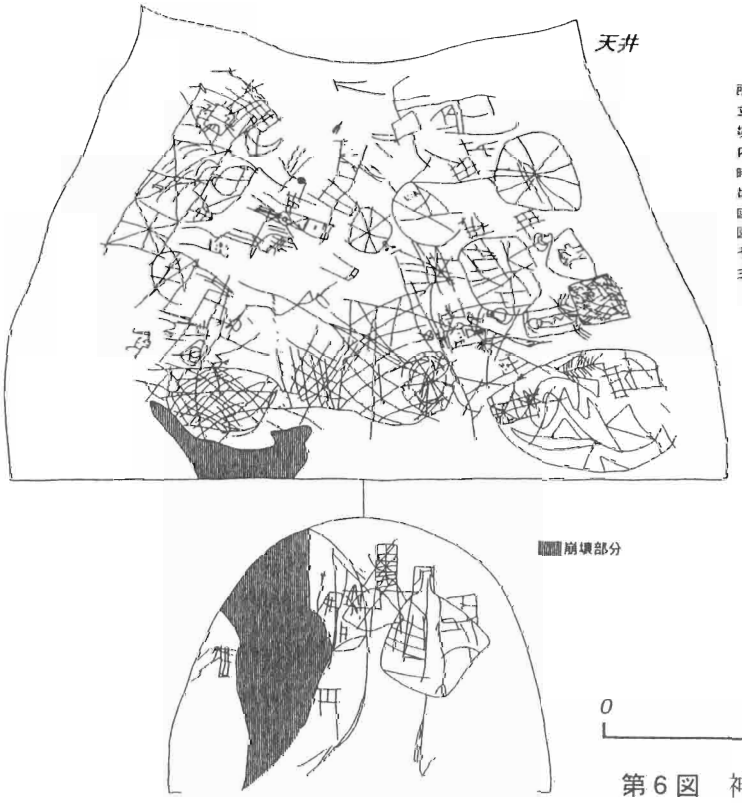
所在地	神奈川県横須賀市坂本
立地	東京湾に面した台地南斜面　標高約46 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁あり
時期	7世紀中頃
出土遺物	なし
図文の場所・方法	玄室（右壁）、羨道（右壁）　線刻
図文の種類	意味不明（馬らしきものあり）
その他	抽象的　東に隣接して奥壁のみ一部残存する横穴があるが未調査
主要文献	赤星直忠 他 1981『横須賀市坂本横穴の調査』坂本横穴調査団



高山横穴墓群 第8号墓（たかやま）

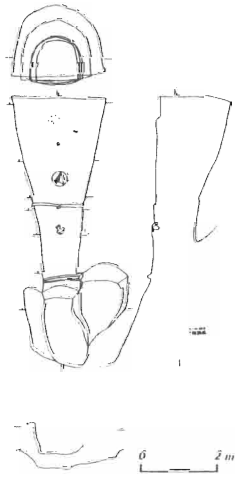
所在地	神奈川県横須賀市田戸台
立地	東京湾と平作川に挟まれた通称上町台地の南斜面　標高約30.5 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁あり
時期	7世紀前半代？
出土遺物	須恵器坏など
図文の場所・方法	玄室（奥壁）　線刻
図文の種類	意味不明（方形状・扇状の斜線）
その他	抽象的　横穴群は横須賀市域で最大規模。古くは46基の存在を確認
主要文献	上田薫・依田亮一 2000「高山横穴墓群（2次）」 『かながわ考古学財団調査報告』87





万田宮ノ入横穴墓群 第8号墓（まんだみやのいり）

所在地	神奈川県平塚市万田字宮ノ入
立地	谷戸の南・東斜面　標高約60 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁なし
時期	おおよそ7世紀後半代？
出土遺物	須恵器長頸壺、鉄製品（詳細不明）
図文の場所・方法	玄室（奥壁・左右両壁・天井）　線刻
図文の種類	人物・舟・鹿状？・梯子状・格子目状・樹木状など
その他	横穴墓は南斜面に5基、東斜面に5基存在、1基のみやや離れる
主要文献	杉山博久 1987『万田八重窪・宮ノ入横穴墓様』 万田八重窪・宮ノ入横穴墓群発掘調査団



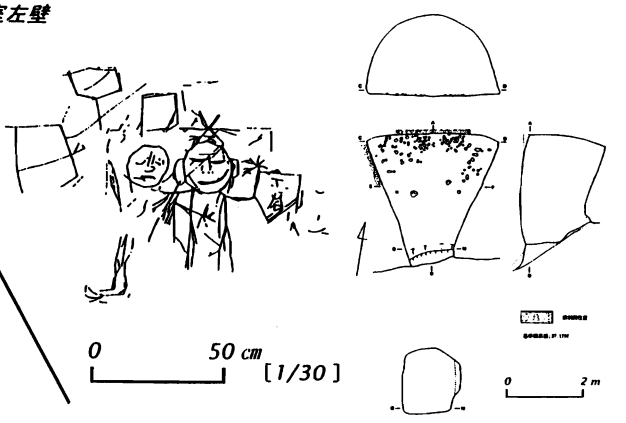
第6図　神奈川の線刻横穴墓（4）

玄室奥壁

庄ヶ久保横穴墓群 第８号墓（しょうがくぼ）

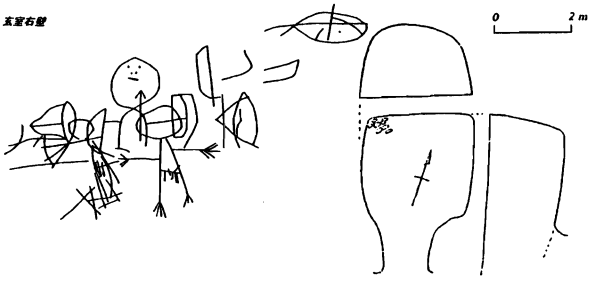
所在地	神奈川県中郡大磯町国府本郷字庄ヶ久保
立地	通称「マリヤ山」東側裾の谷　標高約 37 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁なし・敷石
時期	およそ７～８世紀代
出土遺物	須恵器甕・坏（いずれも散逸）
図文の場所・方法	玄室（奥壁・左壁）　線刻
図文の種類	人物など
その他	仏像？　横穴墓はほぼ横一列に９基が並ぶ
主要文献	赤星直忠 1964「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』第１冊 神澤勇一・川口徳治朗 1992「大磯丘陵横穴墳墓群（２）」 『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第 19 号

玄室左壁



堂後下横穴墓群 第12号墓（どうごした）

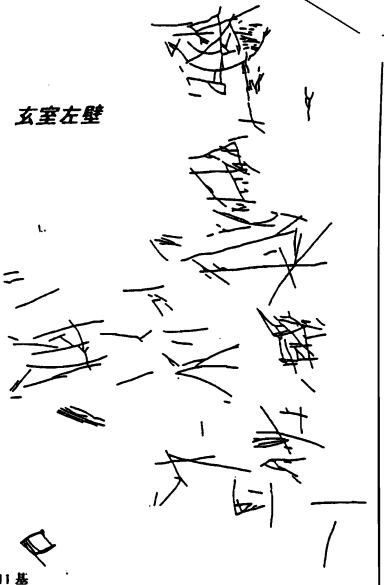
所在地	神奈川県中郡大磯町国府本郷字堂後下
立地	通称「なこう山」東側中腹　標高約 25 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁あり・敷石
時期	およそ７～８世紀代
出土遺物	須恵器甕（断片　※文章表現のみ）
図文の場所・方法	玄室（奥壁・右壁・天井）　線刻
図文の種類	人物・舟？・魚？・鮎？など
その他	叙事詩的　横穴墓は上下２列に並び上段２基、下段 11 基
主要文献	赤星直忠 1964「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』第１冊 神澤勇一・川口徳治朗 1992「大磯丘陵横穴墳墓群（２）」 『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第 19 号

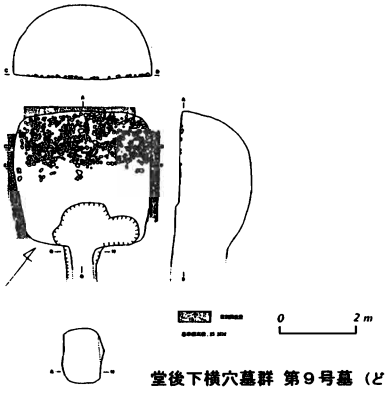


玄室奥壁

玄室右壁

玄室左壁

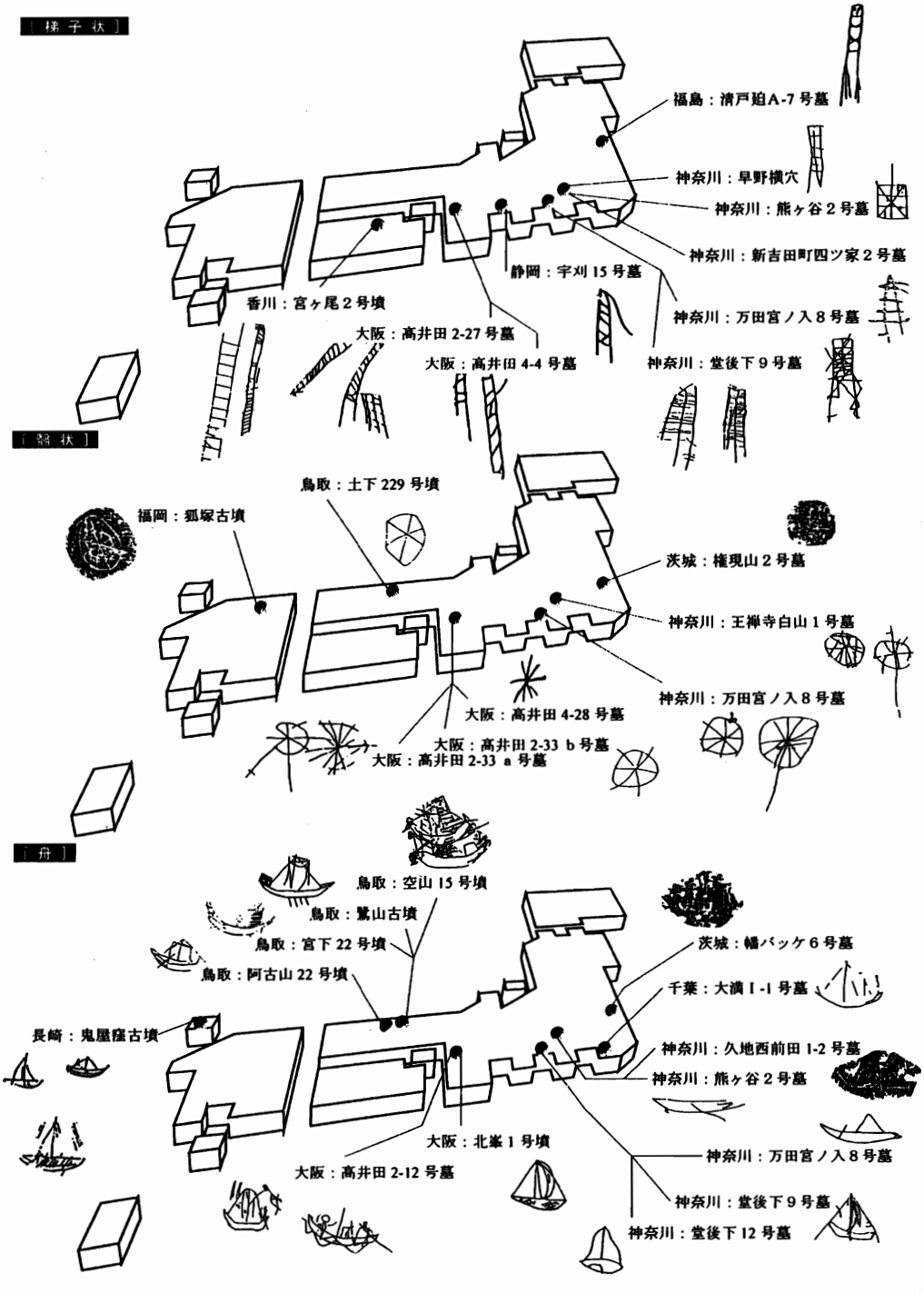




堂後下横穴墓群 第９号墓（どうごした）

所在地	神奈川県中郡大磯町国府本郷字堂後下
立地	通称「なこう山」東側中腹　標高約 25 m
墳丘・外表施設	横穴墓
内部主体・施設	単室・前壁あり・敷石
時期	およそ７世紀代？
出土遺物	須恵器甕・坏、鉄製品（直刀・鉄鏃）
図文の場所・方法	玄室（奥壁・左右両壁）　線刻
図文の種類	人物・舟・梯子状・連続山形（三角）など
その他	叙事詩的　横穴墓は上下２列に並び上段２基、下段 11 基
主要文献	赤星直忠 1964「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』第１冊 神澤勇一・川口徳治朗 1992「大磯丘陵横穴墳墓群（２）」 『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第 19 号

第７図　神奈川の線刻横穴墓(5)



第8図　各地域の線刻意匠

引用・参考文献　※報告書は割愛・他文献は2003 柏木参照
1948 赤星直忠「相模洗馬谷横穴群について」『考古学雑誌』35-1･2合併号
1964 小林行雄『装飾古墳』平凡社
1964 赤星直忠「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』第1冊 大磯町教育委員会
1970 赤星直忠「神奈川県における横穴古墳の線刻壁画」『考古学ジャーナル』48
1975 三輪修三・村田文夫「川崎市多摩区早野横穴古墳線刻画の一考察」『三浦古文化』第18号
1978 曽根博明『浅間神社西側横穴古墳群第9号墳調査報告書』大和市教育委員会
1994 大磯町郷土資料館「大磯町の横穴墓群」『資料館資料』5
1997 浜田晋介「加瀬台古墳群の研究Ⅱ」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』3
2003 柏木善治「横穴墓の線刻画について」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集

相模の古墳･横穴墓と古代氏族

須藤智夫

はじめに

古墳・横穴墓の被葬者を特定することは、決定的な資史料がほとんど得られないため、たいへん困難な状況にある。しかし、古墳・横穴墓の特質・系統・階層性を明らかにし、それらの存在する地域にいかなる古代氏族の分布が確認できるかを考慮してみることで、手がかりが得られる可能性はあると思われる。今回はそれについての基礎作業の報告となる。

1、主要古墳・横穴墓の概観

ここでは、特別な意味が想定される副葬品を持ったものと、形態的に注目すべきものを中心に俎上に載せて考察を進めたい。

師長国造のクニの古墳・横穴墓　令制以前の師長国造の支配のおよぶ地域は、令制下の足上郡・足下郡・余綾郡に相当すると考えられるが、６世紀後葉から、足柄平野西縁部にあたる酒匂川支流の狩川西岸の丘陵部に群集墳の築造が活発となる。とくに南足柄市の塚田・塚原・岩原の各古墳群、小田原市の久野古墳群が代表的存在で、副葬品にも装飾大刀や銅製品など注目すべきものが多い。とくに、岩原黄金塚古墳出土の環頭単竜柄頭は塚田２号墳出土の単鳳環頭柄頭をさかのぼる可能性が指摘されている。久野古墳群に属する総世寺裏古墳には６世紀末から７世紀初頭に横穴式石室が築かれ、この地域の導入期の横穴式石室となっている。副葬品としては銅鋺をともなう。これに続いて７世紀前葉に、久野２・４号墳、天神山所在古墳（小田原市）など河原石積みの横穴式石室をもつ古墳が出現する。この地域では横穴墓が沼田城山横穴墓群（南足柄市）以外は知られていない。

酒匂川東岸部では、６世紀後葉において、大磯丘陵西端部の物見塚古墳（小田原市）が知られ、７世紀になると、三ツ俣遺跡（小田原市）で４基の円墳が海岸線に近い一帯で検出される。横穴墓では、森戸川東岸の田島１１号横穴墓（小田原市）から７世紀後葉の畿内産土師器が検出されている。また、足柄平野北部の酒匂川中流域においては、南原１号墳（山北町）が横穴式石室を有し、出土した須恵器の年代から６世紀末から７世紀初めのものであることがわかった。これと同様な古墳群が酒匂川の河岸段丘にいくつか確認されている。この地区の横穴墓については、瓦窯址に近接し、圭頭大刀が確認された唐沢･河南沢横穴墓群（松田町）が注目される。

大磯丘陵における古墳は、丘陵中部の不動川流域や丘陵東部の高麗山東南麓、あるいは丘陵北部から北東部にかけて、いくつかのまとまった存在が想定できるようになった。とくに、高麗山東南

麓で特筆すべき古墳は、登山１号墳と同様に北武蔵系の円筒埴輪が確認された坊地古墳群（大磯町）と、相模では稀少な切石積横穴式石室を持ち青銅製散蓮華形小匙が発見された釜口古墳（大磯町）であろう。なお、丘陵北東部には市場古墳（平塚市）があって古墳の周溝の跡が発見された。復元すると全長３１ｍの前方後円墳になり、横穴式石室の痕跡も確認されている。

この地域は横穴墓の密集地帯として全国的にも名高い。まず注目されるのは諏訪脇横穴墓群（二宮町）で、その初現期の造墓と思われるＢ２０１号墓、 石棺前壁を残した高棺座をもつＡ１号墓、圭頭柄頭と馬具〔鈹具〕などを出土したＢ５号墓、金銅製・イモガイ製の馬具〔帯先金具・飾金具〕を出土した西９号墓など、検討を要するものが多い。この他にも、変形四獣鏡・金銅製馬具〔皮先金具〕をともなう下田５・６号墓（大磯町）、金銅製馬具〔杏葉〕の確認された坂田山南横穴墓群（大磯町）が目立った存在となっている。さらに、５世紀後葉のものと考えられる朝鮮半島製の陶質土器を出土した愛宕山横穴墓（大磯町）や、畿内産の土師器坏を検出した下田１０号横穴墓や清水北７号横穴墓（大磯町）も忘れてはなるまい。前者の坏が７世紀第２四半期、後者のものが７世紀末ごろのものとされる（田尾 1993)。また、清水北１０号墓は棺室構造を持つ横穴墓の初源的なもので６世紀末ごろの年代が推定され、これに楊谷寺谷４・７号墓（大磯町）などが継続してゆくようである（田村 2004)。さらに丘陵東端部に目を転じると、初源期の６世紀後葉のものと評価される万田熊之台１９号墓、根坂間４号墓（以上、平塚市）が注目され、後者からは鈴釧が確認されている。また、高根横穴墓群（平塚市）よりは金銅製馬具〔雲珠・杏葉〕の出土が伝えられ、７世紀前葉ごろのものと評価されている。

なお、近年、中村川東岸の比奈窪中屋敷１５号墓（中井町）より円頭大刀の出土が確認され、在地の有力者の存在が不明であったこの地域にあって貴重な発見となった。

秦野盆地においては、広畑３号墳（秦野市）が６世紀後葉の横穴式石室の導入段階の古墳で、これに桜土手１４号墳・３８号墳（秦野市）などが継続し、独特の石積み施設を持つ古墳群を形成する。これ以降、秦野盆地を中心に爆発的な勢いで多くの群集墳が築かれるようになる。なお、広畑古墳群が所在する丘陵斜面には岩井戸横穴墓群（秦野市）が展開し、銅鋺を出土していることに注意したい。

相武国造のクニの古墳・横穴墓　このクニは相武国造の支配のおよぶ地域で、令制下の大住郡・愛甲郡・高座郡に相当するが、師長国造のクニより大規模に古墳群が展開するといってよい。中期から継続的に群集墳が営まれているケースもあるが、横穴式石室をもつ古墳は、現在のところ伊勢原市の下谷戸７号墳が先行しよう。この古墳は石室の構造や出土した土師器・須恵器の様相から６世

紀前半にさかのぼることが指摘されているが（宍戸 2000）、この時期の相模では今のところ唯一の横穴式石室をもつ古墳である。これと同時期の古墳は、厚木市・平塚市・伊勢原市などで横穴式石室をもたずに周溝しか検出されない小規模円墳の分布が確認できるばかりである。そのなかには、厚木市の小鮎川南岸の尼寺原丘陵に登山１号墳があり、北武蔵との関係が指摘される多数の円筒埴輪と形象埴輪が周溝より発見され、被葬者の特殊な地位を想定させる（稲村 1999）。さて、横穴式石室をもつ古墳は、６世紀後葉になって、鎧塚１号墳（伊勢原市）、岡津古久古墳・上原１号墳（以上、厚木市）などが出現すると考えられるが、いずれもそれぞれの地域の導入段階のものである。

６世紀末ごろより、以上のものに登尾山古墳（伊勢原市）、上依知１号墳（以上、厚木市）などが続いて築造されたと思われる。とくに、登尾山古墳は相武でもっとも古墳が密集する大山山麓の三ノ宮地域の中心的古墳で、圭頭大刀・金銅製馬具・銅鋺・銅鏡などをともない、副葬品では他に追随を許さない。周囲にも注目すべき副葬品を持つ古墳が多く、装飾大刀は栗原古墳・御領原２号墳（以上、伊勢原市）より、単竜環頭柄頭・双竜環頭柄頭が確認され、金銅製馬具ではらちめん古墳（伊勢原市）より杏葉・鞍金具が、三ノ宮３号墳・鈴川古墳（以上、伊勢原市）よりは雲珠などが発見されている。一方、上依知１号墳は中津原台地北部の群集墳のひとつで鈴釧をともなっているが、他に目立ったものはなく、周辺の古墳も副葬品に特筆すべきものが少ない。しかしこれ以降、出土品の多少はあるが、上述してきた古墳の存在する伊勢原市の三ノ宮地域・日向地域、厚木市の玉川流域・中津原台地といった丹沢東南麓では、群集墳が爆発的な勢いで集中的に築造されていったと考えられるのである。さて、横穴墓については、伊勢原市・厚木市を中心に秦野市、座間市におよぶ範囲で、羨門部から前庭部にかけて石積み施設を持つものが造作されており、ひとつの文化圏的なものを形成している。この中で、三ノ宮地域にある下尾崎１号墓（伊勢原市）より出土した輪鐙、上栗原５号墓（伊勢原市）より出土した壺鐙はきわめて特殊な遺物で、ここでも三ノ宮地域の特殊性が感じられる。

こうした動きに刺激されるように７世紀前葉には相模川東岸でも、中津原台地の対岸にあたる谷原古墳群、東原古墳群（以上、相模原市）をはじめとして、横穴式石室をもつ古墳群が形成されてくることになるが、この地域は横穴墓の方が主流をしめることもあってか、分布密度は西岸に比べるとかなり稀薄である。ところが、この東岸には相模川の沖積微高地上の低地部に立地する宮山中里遺跡の古墳群（寒川町）が存在する。それぞれの古墳は周溝しか残っていないが、墳長が約３０ｍの前方後円墳１基と直径が１０ｍ台の円墳７基が確認されている。主体部には横穴式石室を導入した痕跡が認められず、いずれも周溝から発見された須恵器の短頸壺や土師器坏・甕より６世紀後

半から７世紀初めにかけて築かれたものと考えられる。横穴墓の分布は、相模原市・座間市・海老名市の相模野台地の西端部に分布が認められ、同じ台地の南端部や高座丘陵ではさらに高い密度で展開して特筆すべきものが少なくない。篠谷３号墓（茅ヶ崎市）は須恵器提瓶の年代観から６世紀中ごろまでさかのぼる可能性が指摘され、越の山７・９号墓（寒川町）は７世紀前葉の「河内型」の系統をひくものとしてその位置づけが問題となっている。なお、ここでいう河内型の横穴墓とは玄室が矩形平面で奥壁に造付石棺を設置し、天井はドーム形をなすものを指すが、その変容形をふくむ。甘沼横穴墓群では、凝灰岩切石の組合式石棺が２基の横穴墓から確認され、玄室は撥形だが造付石棺を持つものも１基発見されている。このように相模野台地の南端部周辺は古墳・横穴墓に注目すべきものがそろい、下寺尾寺院跡や高座郡衙跡の存在も考慮に入れると、７世紀代に相模の拠点的な地域のひとつになっていた可能性がある。また、相模野台地を南北に走る引地川沿いにも横穴墓が目立っているが、代官山５・１６号墓（藤沢市）は河内型の構造をもち、越の山７・９号墓より先行する７世紀前葉に造墓されたと思われる。これらに大庭折戸３号墓（藤沢市）・万田八重窪３３号墓（平塚市）などが継続してゆくと思われる（田村 2004）。

三浦半島の古墳・横穴墓　三浦半島の付け根に位置する境川下流域の朕ガ塚古墳（藤沢市）は円筒埴輪を出土し、６世紀代のものと考えられている。同じ流域の南側に位置するすくも塚南方古墳（藤沢市）は、７世紀代の切石の組合式石棺をともなう古墳であり、この種の石棺は茅ケ崎市内の横穴墓などにも見られる。両古墳のある片瀬丘陵は横穴墓の密集地で、その出現期のものとしては、６世紀後葉の須恵器提瓶を出土した新林右西２号墓（藤沢市）や同時期に近い須恵器坏蓋が発見された同９号墓などがあげられ、前者からはやはり同時期の所産と考えられる単鳳環頭柄頭が出土した。また、片瀬川に東側から落ち合う柏尾川の支流に鼬川があり、その流域一帯は七石山横穴墓群、・中居丸山横穴墓群（以上、横浜市）など、奥壁中央に棺室を造作するタイプのものが集中することで知られ、７世紀前葉より８世紀前葉まで継続したと思われる。

鎌倉市の滑川流域から葉山町にかけては６世紀前半の古墳として采女塚古墳・和田塚古墳（以上、鎌倉市）などが築かれ、いずれも上毛野系統の形象埴輪をともなうことで注目されるが、墳丘の大きさや形状は不明である。これらに横穴式石室をもつ一色古墳（葉山町）が続くと考えられる。この地域も横穴墓の密集地で、とくに、圭頭柄頭や鈴釧の出土が伝わる新宿１号墓（逗子市）、須恵器提瓶の年代観から６世紀後葉の築造が指摘されている久木２号墓（逗子市）などに注意したい。

三浦半島の中央部には目立った古墳は確認されず、横穴墓としては、円頭大刀の出土が伝えられる佐島２号墓（横須賀市）、頭椎大刀の可能性のある装飾がなされた大刀が確認された長浜２号墓（横

須賀市）が目立った存在で、この地域にも在地の実力者の存在を想定できる。半島の先端部に目を転じると、６世紀前葉から中葉の北武蔵系統の形象埴輪をともなう向ケ崎古墳（三浦市）が興味深い。なお、洞窟遺跡や横穴墓群との関連が問題となっている雨崎１号墳（三浦市）は、全長が３０mに達する前方後円墳であることがわかっている。横穴墓に関しては江奈２号墓（三浦市）が特筆される。ここからは近年の調査から銀象嵌を持つことが明らかになった６世紀末ごろの所産の円頭大刀が確認され(柏木 2004)、この横穴墓が在地の有力者のものであったことは間違いないだろう。

さて、三浦半島でもっとも後期の古墳が密集しているのは平作川流域のいわゆる古久里浜湾周辺である。まず、６世紀代のものとしては、平作川西岸にその前半の北武蔵系統の埴輪をともなう八幡神社４号墳があり、帆立貝式の前方後円墳である蓼原古墳もこの中ごろの古墳で上毛野系統の円筒埴輪・形象埴輪をともなう。対岸の丘陵上に形成された大塚古墳群では、帆立貝式の前方後円墳の４号墳、三浦半島最大の前方後円墳である１号墳が６世紀後葉に築造され、これに前方後円墳１基と円墳３基が続いている。古久里浜湾の周囲では、後期の段階に継続的に地域の首長層の墳墓が営まれている様子がうかがえる。また、平作川西岸の西方の丘陵上には、円墳で切石の箱式石棺をもち、金銅製品が副葬されていたかろうと山古墳が異彩を放っているが、時期は７世紀中葉ごろのものであろう。横穴墓については、鳥ヶ崎横穴墓群より方頭柄頭・銅鋺・銅鏡の出土が伝えられ、特別な様相を示しているといえる。

古墳・横穴墓の行方　相模では７世紀前葉ごろに横穴式石室をもつ古墳や各種横穴墓の築造がピークを迎えるとみられるが、石室や墳丘は縮小する傾向にあって、それぞれの地域ごとに均質化してゆく様相がみられる。こうして、各地域の河川水系沿いに７世紀後葉まで次々と古墳群が形成されてゆき、７世紀末ごろには終末を迎えると考えられる。横穴墓も７世紀中葉まではさまざまな特色をもつものが造墓されてゆくが、７世紀後葉になるとその数を大きく減じ、副葬品も限られたものとなってゆく。そして、造墓については８世紀前葉ごろに終結することになる。

２、相模の古代氏族

丈部・丈部造［足上郡・余綾郡］　天平１０年（７３８）の「駿河国正税帳」には「俘囚部領使相模国余綾団大毅大初位下丈部小山」と、天平勝宝８年（７５６）２月６日付の「相模国朝集使解」には「足上郡主帳代丈部人上」という肩書き付きの人物名がみえ、８世紀前葉・中葉に丈部氏が、軍団や郡の職員として活躍していたことを伝える。丈部氏は、東国の郡司およびそれに準じる在地の首長として多くが確認され、武蔵・下総・常陸の郡司である丈部氏のなかには直姓のものも含まれる。これらの諸氏族の祖先たちは各地域の国造家関連の一族であった可能性が高く(佐伯 1980)、

丈部の設定も東国に重点がおかれていたとみられる。余綾郡・足上郡の丈部氏はいずれも郡司に準じる地方の役人なので、彼らの祖先を師長国造家関連の一族と考えるべきであろう（加藤 1984）。また、『続日本紀』霊亀元年（７１５）３月丙午条によると、足上郡の住人に丈部造氏がいたことがわかる。『萬葉集』巻二〇に防人歌を残している丈部造人麿も足上郡の住人と推定されている。『新撰姓氏録』右京皇別上によると、丈部造氏は大彦命の後裔であることが記され、阿倍氏と同族関係にあることがわかる。阿倍・膳氏系の氏族が各地のミヤケの経営に関わっていたケースは多く、これらの丈部造氏も師長国造のクニのミヤケ経営に関係したと推測でき、そういった面からも師長国造家にふさわしい氏族と評価できる。

君子（部）［足上郡・鎌倉郡］　『続日本紀』霊亀元年３月丙午条に、足上郡の住人として君子尺麻呂の名が見える。ほかにも、鎌倉郡においては天平勝宝８年（７５６）２月６日付の「相模国朝集使解」により、君子伊勢麻呂が郡司代として活躍していることがわかる。君子のもともとの名称は君子部で、これは服属した蝦夷で構成された部民で、東北地方南部から関東地方南部に分布する。大王家の経済・軍事基盤として設定されたと考えられるが、そのうちの一部は倭王権のもとに出仕していたようである（佐伯 1982a）。また、『新撰姓氏録』左京皇別下によると、吉弥侯（君子）部は奈良君を祖としていることがわかるが、奈良君は奈良神のことと思われ、この神は蝦夷征討の際の守護神と認識されていたことが明らかになっている（黛 1985）。したがって、この後裔とされる東国の君子部は蝦夷から倭王権を守るための軍事的な部とみなされていたと推定できよう（関口 1992）。君子部は倭王権と蝦夷の軍事抗争が明らかになる７世紀中葉あたりから設定されはじめたと考えるべきであろう。

大伴部［足上郡・鎌倉郡］　足上郡には大伴郷が存在し、この地域に大伴部が設定されていたことが推定できる。鎌倉郡では、天平勝宝元年（７４９）１０月の「調庸布墨書」に方瀬郷の戸主として大伴部首麻呂が、同じころの「調布墨書」には沼浜郷戸主として大伴部広麿がそれぞれ確認されている。これらの大伴部は、膳大伴部が関東地方に広く分布を見せ、膳氏の勢力も房総・武蔵を中心に強くおよんでいた状況から、膳大伴部であると判断される傾向にある（加藤 1984）。しかし、丸子部の分布もあわせて考えると大伴氏の部民として、その軍事力を支えていた可能性も残っている（黛 1982）。ここでは両方の可能性のあることを留意しておきたい。

桑花（蘇我）［足下郡］　足柄平野東南部の台地で足上郡・足下郡の境界付近に「曽我」の地名が残り、律令制以前に蘇我氏の進出があった可能性を指摘されることもあったが、古代の史料上では蘇我系の人物名は確認されていない。しかし、公式令朝集使条の「東海道坂東（坂とは足柄峠を示す）」解釈について『令集解』釈説は、「須流河與桑花界内」と説明しており、これは「スルガとソウカ（ソガ）との界の内」と読めることが指摘されている（荒井 1998）。そうすると、８世紀段階に足柄峠の西部にスルガ、東部にソウカ（ソガに通じる）という地名が存在していたことになり、後者のソウカ（ソガ）の位置は相模の足柄平野にあったと考えるのが自然となる。これは蘇我氏の地方進出

が師長国造のクニにまで及んでいたことを推定させる事実である。その際に「蘇我部」の設定がなされて、蘇我氏の経済・軍事基盤となったと考えられるが、これは東国では東海道に遠江・上総・下総、東山道に美濃・信濃と確認されるので、相模に分布することは十分に予測される。

丹比部［足下郡］　『萬葉集』巻二〇には足下郡の防人として丹比部国人の歌が残されているが、諸国の丹比部氏はそのほか常陸・越中・出雲などに分布を見せる（佐伯 1982b）。丹比部はタジヒノミズハワケの名前をもつ反正天皇（大王）の名代である可能性も指摘されているが、この大王は河内に丹比柴籬宮を営んだという。『新撰姓氏録』右京神別下の丹比宿禰条には、丹比部が大王家の王子の経済基盤（湯沐邑）として設けられたという説が記されている。丹比部の伴造氏族には丹比連が考えられ、この氏族は宮城十二門の一つに数えられる丹治比門の守護を担当する門号氏族で、倭王権に軍事的な奉仕をしていたことがわかるが、その本拠地は河内の丹比郡であったと考えて間違いないであろう（直木 1976）。足下郡の丹比部も、大王家の経済・軍事的基盤として設定されたと想定できよう。

磯部［余綾郡］　天平１０年の「白布墨書」には「（相模国余綾カ）郡大□郷大磯里の戸磯部白髪の輸す調併せて庸の布一端」と見え、ここには磯部白髪という人物名が記されており、８世紀前葉の大磯に磯部氏が存在していたことを伝えている。もともと、磯部氏は律令制以前に磯部を管掌していた伴造氏族であるが、磯部は伊勢部・伊蘇部・伊西部・石部などとも表記され、本来的には伊勢神宮に貢納していた部民で志摩国答志郡を本拠としていたとみられる（加藤 1983）。６世紀後葉ごろから、東海道・東山道・山陰道の諸国を中心に広く分布することになり、このうち東海道では阿倍・膳氏系の敢石（磯）部が伊勢・美濃・尾張・遠江・駿河に設定されてゆき（大山 1975）、その分布の様相から膳大伴部との密接な関係も指摘されている。大磯の磯部がこれに該当するかは不明であるが、膳大伴部は関東地方に多く分布している部民であるので、該当する可能性を指摘できよう。史料に見える白髪の祖先は、６世紀後葉以降のある時点で漁業・舟運を主要な職務とするようになり、倭王権より海産物の貢納を求められることになったと推測できる。

丸子部・丸子連［余綾郡・鎌倉郡］　天平１０年の「駿河国正税帳」には「御贄部領使余綾郡散事丸子部大国」という人物が登場し、丸子部氏が８世紀前半に郡の下級役人として活躍していたことがわかる。丸子部は６世紀初頭から７世紀前葉に、倭の大王家にしばしば椀子・麻呂古などと表記されて登場するマロコ王子の経済基盤として設定されたミヤケの部民と考えられ（篠原 2003）、この名をもつ王子は聖徳太子の子孫にも確認されるので、推古期には上宮王家がマロコ部を管理していた可能性がたかい。丸子部は東国を中心に設定されたと考えられ、丸子部の分布する地域の周辺には、大伴氏の分布も、まず間違いなく確認できる事実がある（黛 1982）。例えばいま述べたように、余綾郡に丸子部が存在していたことが確実であるが、その西隣りの足上郡には大伴（伴群・伴郡）郷があり大伴部が設定されていたことが推測できる。鎌倉郡では『萬葉集』巻二〇に防人として丸子連多麿が見え、『今小路西遺跡出土木簡』には「郷長丸子□□」との記述があるが、同郡には

大伴部が存在したことが確実である。武蔵国造のクニに属していた橘樹郡には丸子庄が存在し、この庄域に含まれていたと思われる川崎市津田山久地５号横穴墓からは大伴氏との関係が深い頭椎大刀が出土している。こうした事実から丸子部は軍事氏族の大伴氏の配下にあったと考えられる。東国（とくに陸奥）を中心にまとまって分布しているのは、大王家の王子の経済・軍事基盤のミヤケの民として設定された理由のほかに、７世紀前葉ごろからは征夷政策の遂行とも関連していたと考えられる。

壬生・壬生直［大住郡・高座郡・鎌倉郡］　壬生直氏は、承和７年（８４０）に大住郡大領として壬生直広主が、同８年には高座郡大領として壬生直黒成がそれぞれ多大な穀物を貧窮民に代わって貢納していることが確認できる。こういった事実から壬生直氏を相模川流域の国造級の首長に想定することができ、相武国造家にふさわしい氏族といえる（鳥養 1973）。また、壬生直氏が管掌した壬生部は『日本書紀』推古天皇１５年（６０７）２月条にその設置記事がみられる。これは７世紀初頭の段階に倭王権の王子・王女のための部民が統一したかたちで一斉に設置されたことを意味し、後の大住郡域にもこのころより設置されていた可能性は高いと思われる。また、鎌倉市にある由比ヶ浜中世集団墓地遺跡の竪穴住居跡から出土した９世紀代の坏には漢字一文字分で「生壬」の墨書があり、鎌倉郡にも壬生部が設定されていた可能性を物語っている（大河内 1996）。また、相模の周辺諸国で、壬生部とミヤケの関係の深さについての指摘があることにも注意を要する（原 2002・篠原 2003）。

当麻部［大住郡］　天平１０年の「駿河国正税帳」には「俘囚部領使大住団小毅大初位下当麻部国勝」とあって、大住郡に所在した軍団の職員をつとめていた当麻部氏が俘囚を引率していることが記されている。当麻部についてほかには『日本三代実録』貞観１８年（８６７）１０月２２日条に甲斐国都留郡の人として「当麻部秋継」という人物が確認できるだけで、その性格は不詳とされることが多いが、聖徳太子の弟である当麻王子を祖先とする当麻公氏が管掌する部民であった可能性があるので、大王家との関係が強かったと思われる。当麻王子にはマロコ王の別称があることからすると、もともとは丸子部に類する部民であったのかもしれない。

大神朝臣［大住郡］　『日本三代実録』貞観元年（８５９）３月５日条には大住郡司であったと思われる大神朝臣田仲麻呂がみえるが、大神朝臣氏はもともと三輪君氏と称し大神神社をまつる氏族であった。相模の大神氏を律令制以前から相模に移住してきた伝統的な氏族とみれば、大神部が倭王権を支える有力氏族の部民として設定されていた可能性がでてくる。

漆部直［大住郡］　『続日本紀』神護景雲２年（７６８）２月戊寅条によると、漆部直伊波が相模国国造に任じられ、相模宿禰と改姓している。この存在から相模に漆部が設定されていたことを推測させるが、東国では遠江・武蔵でも確認できる。大住郡・余綾郡には倭王権の軍事的基盤となっていたと思われる部民が散見されることから、漆部も武器の製造などに携わっていたのかもしれない。現在の秦野市北矢名漆窪をその拠点とする説があることにも注意しておきたい（松本 1983）。

中嶋連［大住郡］　『正倉院宝物銘文集成』調庸関係銘文６２によると、大住郡のある郷の戸主として中嶋連五百足の名前が見えるが、この氏族は尾張国中島郡が本拠地とみられている中嶋連氏と同族関係にあるのかもしれない。これが「天神本紀」に見られる「尾張中島海部直」にも関係すると考えれば、海洋民的性格を有していたと推測できよう。相模の中嶋連氏は相模川の河口付近を拠点として、相模湾で活躍していた可能性がある。

物部［愛甲郡］　『類聚国史』大同２年（８０７）３月３日条に愛甲郡人として物部国吉女がみえるが、この物部氏の系統は不明である。物部氏は６世紀代に東国に勢力基盤を拡大していったと考えられ、物部が東海・東山・北陸道諸国に広く分布する。武蔵には国造級の氏族として物部直氏が存在していたのはよく知られ、相模にも存在していた可能性を指摘できる。東国での物部氏の勢力圏は広大なものであったと思われるが、６世紀末ごろより蘇我氏にとって代わられたと思われる（加藤 1983）。なお、鎌倉郡には尺度郷があって、坂戸物部氏にちなむ地名の可能性があるが、これは河内出身の氏族である。

大田部直［高座郡・御浦郡・郡不詳］　宝亀２年（７７１）３月８日付の「沙弥慈窓経師貢進文」によると土甘郷戸主として大田部直乎多麻呂が、天平勝宝８年２月６日の「相模国朝集使解」によると三浦郡の郡司代として大田部直圀成が知られる。それぞれの地にミヤケの耕作を担当した田部の一種とその管掌者がいたことを物語っている。坂東では大田部・若田部の分布地域にはミヤケが存在していた可能性が高いと考えられ（佐伯 1970）、三浦半島では宗元寺付近にあったとする説がある。

矢作部［高座郡］　矢作部広益が土甘郷戸主である大田部直乎多麻呂の戸口として知られる。矢作部は矢の製作を担当する部民であるが、伴造氏族として河内出身の矢作連氏との関係が想定される。この氏族は若江郡の矢作神社付近を本拠地としていた可能性が高い。矢作・矢作部は東国を中心に分布し、伊豆・甲斐・相模・上総・下総・常陸などで確認できる。

飛鳥部［高座郡］　茅ヶ崎市の居村Ｂ遺跡より出土した天平年間のものと推定される放生関係の木簡に飛鳥部氏の存在が確認できるが、これと関連して、南武蔵では橘花・倉樔の両ミヤケの管理者と見られる飛鳥部吉志氏の存在が注目される。吉士（吉志）系の諸氏は倭王権から派遣されたミヤケ経営の専門集団であり、飛鳥部氏は河内の安宿郡に本拠をもつ渡来系氏族とみてよい。高座郡の飛鳥部氏も元来はミヤケの経営に携わった可能性がある（須藤 1995）。飛鳥部氏は東国では、相模・武蔵・越中などに分布し、それが確認できる周辺の地域では横穴墓の存在も確認できる傾向にある。この氏族が横穴墓（とくに河内型）の造営に関わっていたことが推測されるわけであるが、これについては別に稿を用意する予定である。

春部（春日部）［高座郡］　居村Ｂ遺跡出土木簡に飛鳥部と併記されてその存在が知られることから、渡来系の春日部氏である可能性が高いだろう。その本拠地は河内国の高安郡と考えられ、天平年間に春日部村主廣田という人物が知られる。『延喜式』には、高安郡に春日戸社坐御子神社が掲載

されており、山城にも分布が確認できる。春日臣氏の部民とみれば、その氏族出身の后妃のために全国的に設定されていたことが知られる。

秦［高座郡・愛甲郡？］　「長屋王家木簡」225 の裏面には、「和銅七年十月」の年月が記されているが、表面には高座郡美濃里に「秦大贄」という人物名が見え、相模にも秦氏関連の氏族が確認される。秦氏は国家の財政的業務や殖産事業に携わることが多かったと思われる渡来系氏族であるが、実質的なミヤケ経営の手腕をもっていた。その支配下の民は、渡来系の秦人や在地系の秦人部・秦部などとよばれた人々で、これが全国的に組織されて展開したと考えられる（加藤 1998）。高座郡の対岸の愛甲郡に属する中津原台地には依知の地名が残り、これは近江が本拠地の依知秦氏にちなむものと推定されている。全国各地の群集墳と秦氏の存在が関連付けられることがあるが、この依知地域も相模では有数の群集墳が存在する。

他田臣［鎌倉郡］　相模では郡司の少領として他田臣国足が存在するが、この系統の氏族は駿河・下総・美濃・信濃・上野などで在地の有力氏族として確認できる。これらは他田部の伴造氏族と考えられるが、他田部の名称は敏達天皇の訳語田（おさだ）幸玉宮にちなんだものであろう。大王家との関係が強い阿倍氏関連の氏族であると思われる。

軽部［鎌倉郡］　宮久保木簡には鎌倉郡鎌倉里の人として「軽部□寸」という人物が記され、「田令軽部麻呂」、「郡稲長軽部真国」という郡の官人の肩書きをもつ人物名も確認できる。このうちの「田令」は６世紀代にミヤケの管理者で倭王権から派遣された「田令」と共通した名称で、ミヤケ制下の役職名が律令制下の郡関係の役職名に反映したものと考えられる。軽部麻呂も鎌倉郡の居住者であれば、この地にミヤケが設置されていたことを傍証するものである（篠原 2004）。軽部はもともと允恭天皇の王子である木梨軽王子の名代であったといわれ、東国では遠江・相模・下総・常陸・下野などに分布が確認できる。

上村主［鎌倉郡］　『日本三代実録』貞観７年（８６５）３月２１日条には鎌倉郡人として上村主真野と上村主秋貞の存在を伝える。この氏族は河内国安宿郡賀美郷、大県郡賀美郷・津積郷などを本拠地とした渡来系氏族で、律令制下では郡の下級役人レベルで実務的に活躍していたと推測されるが、これが飛鳥部造氏と同族であり、ミヤケの倉人を勤めた次田倉人氏の後身と推定されることなどを考慮すると（篠原 2004）、令制以前に相模に移ってきた時点ではミヤケの管理を任されていたと思われる（加藤 1984）。なお、鎌倉郡の尺度郷を郡北部の柏尾川やその支流である鼬川流域に求める説があるが、鼬川の上流には上郷の地名がある。このあたりは横穴墓の密集地帯として注目されている地域である。

鹿嶋臣［御浦郡］　『日本書紀』持統６年（６９２）７月乙未条に、祥瑞〔赤烏〕をえた人物として御浦郡人の鹿嶋臣櫟樟の名前が見える。この氏族は他に確認できないが、三浦半島の交通拠点的な性格や鹿島神宮の祭祀に関わった中臣鹿嶋連氏の存在などから、常陸の鹿島郡との関係が推定される（篠原 2004）。資料に見える人物名の「櫟樟」は楠を表しており、これが船材として貴重な木

材であることを考慮すると、三浦半島周辺の海道の舟運に関連した人物かもしれない。

小結

横穴墓と氏族の問題を絡めて考えた場合に注目すべき地域を確認しておくと、まず高座郡南部があげられよう。この地域には古墳時代後期に宮山中里遺跡の前方後円墳を擁する古墳群があり、大神塚古墳の周辺には横穴式石室をもった古墳も知られている。古墳の被葬者は在地系の首長層と考えられるが、付近にある横穴墓には、河内との関連をもった氏族がその造営に関わっている痕跡がうかがえる。たとえば、代官山横穴墓群には、７世紀前葉の河内型の系統の横穴墓が２基確認され、これに継続すると考えられるものも越の山横穴墓群に２基確認される。河内系の人物がこの地域の開発などのために移住してきたことを推測させよう。この地域の古代氏族を確認してみると、居村Ｂ遺跡出土木簡から飛鳥部氏・春日部氏の存在が知られ、両者は河内の安宿郡・高安郡地方に本拠をもっていた渡来系氏族である。とくに、飛鳥部氏の本拠地には大阪府柏原市安福寺横穴墓群・高井田横穴墓群などが存在し、これらの横穴墓群で玄室平面が矩形で奥壁に造付石棺を設置し、天井がドーム型になるものが造られているのである。飛鳥部氏が高座郡南部に移住して、７世紀前葉にミヤケの経営等にその手腕を発揮していたことが十分想定できる。そして、墳墓についても本拠地のタイプに基づいたものを造営した可能性があろう。その後、高座郡南部には古代寺院の存在が確認でき、郡衙の存在も確認されている。高座郡南部は中央の政権に注目されていた地域であったのではなかろうか。

次に、横穴墓の屈指の密集地帯である余綾郡南部の大磯丘陵を見てみよう。この地域の古墳はきわめて限られているが、随所に古墳群の痕跡が認められ在地系の人々のものであった可能性が高いだろう。この中で釜口古墳の存在は突出していて、非在地系の人物の墳墓である印象もうける。一方、横穴墓は６世紀後葉から遠江系のものを中心に広く拡大して存在する様相をしめし、この時期にまとまった集落が成立してきたことを推測させる。この郡の古代氏族には丈部氏・丸子部氏・磯部氏の存在が知られるが、とくに磯部氏は大磯丘陵に居住し、東海道に広く分布する氏族である。この氏族やこれを支配下におく氏族が遠江系の横穴墓を伝播させるきっかけをつくった可能性は十分にあるだろう。もちろん渡来系氏族も存在し、横穴墓の伝播・造営に関わっていたと思われる。

この他にも、春日部氏・上村主氏・大田部直氏・鹿嶋臣氏などが、横穴墓の造営に関連してくることが予測できるが、詳細な検討は他日を期したい。

各地域の代表的古墳・横穴墓と古代氏族

地域	水系	古墳・横穴墓名	装飾大刀	馬具	銅製品	その他副葬品・施設	郡名	郷名	分布氏族	備考
師長西部	狩川	塚田2号	●	◎			足柄	駅家		
		塚原山神塚	■					岡本		
		岩原黄金塚	●					岡本	丈部(造)	
	久野川	久野2号	○					足柄	丹比	
		総世寺裏			▲			足柄	君子	
	酒匂川中流	河南沢1号	■					高家	*大伴部*	
	森戸川	田島11号				畿内産土師器		高田		
	中村川	比奈窪中屋敷15号	○					中村		
								大伴		
師長東部	葛川	諏訪脇B5号	■				余綾	霜見		
		諏訪脇西8号	○					霜見		
		諏訪脇西9号		◎				霜見		
	不動川	下田5号			▼			余綾		
		下田6号		◎				余綾		
		下田10号				畿内産土師器		余綾	丈部	
	鴨立川	北中尾3号				切石組合石棺		*伊蘇*	丸子部	
		清水北7号				畿内産土師器		*伊蘇*	*磯部*	
		清水北10号				棺室構造		*伊蘇*		
		坂田山南		◎				*伊蘇*		
		愛宕山				朝鮮系土器		*伊蘇*		
	金目川	市場				前方後円墳		金目		
		岩井戸			▲			金目		
	水無川	桜土手38号		◎				幡多		
相武西部	金目川	坊地				形象埴輪	大住	高来		
		釜口			▽			高来		非在地系か
		根坂間4号			△			川相		
		高根		◎				高来		
	鈴川	登尾山	■	◎	▲▼	形象埴輪		日田		
		栗原	●					日田	壬生直	
		御領原2号	●	◎				日田	当麻部	
		らちめん		◎	▼			日田	漆部	
		三ノ宮3号		◎				日田	*大神朝臣*	
		鈴川		◎				日田	中嶋連	
		上栗原5号		*				日田		馬具は壺鐙
		下尾崎1号		*				日田		馬具は輪鐙
	相模川下流							*大上*		
								中島		
	相模川中流	上依知1号			△		愛甲	船田		
	小鮎川	登山1号				形象埴輪		印山	物部	
	恩曽川	衣紋原			△			印山		
	玉川	北高森3号			△			玉川		
相武東部	相模川	谷原2号	□?				高座	塩田		
								美濃		
	目久尻川	本郷(平安期包含層)	●					高座	*秦*	
		宮山中里H5号				前方後円墳		寒川	壬生直	
		越の山7号				造付石棺		寒川	飛鳥部	
		越の山9号				造付石棺		寒川	春部	
		甘沼(玉林寺坂西方)				切石組合石棺		河會	大田部直	
		甘沼(八幡社西隣)				切石組合石棺		河會	矢作部	
	引地川	代官山5号				造付石棺		高座		
		代官山16号				造付石棺		高座		
								土甘		
三浦半島	片瀬川	すくも塚南方				切石組合石棺	鎌倉	*方瀬*	*大伴部*	
		新林右西2号	●					*方瀬*	丸子(連)	
	滑川	采女塚				形象埴輪		鎌倉	経部	
		和田塚				形象埴輪		鎌倉	壬生	
	鶴川	中居丸山				棺室構造		尺度	上村主	
	田越川	新宿1号			△			*沼浜*	他田臣	
									君子	
	小和田湾	佐島2号	○				御浦	御浦		
		佐島3号			△			御浦		
	長浜海岸	長浜2号	●?					御浦		
	平作川	八幡神社4号				形象埴輪		走水		非在地系か
		夢原				形象埴輪		走水		
		大塚1号				前方後円墳		走水	鹿島臣	
		かろうと山				切石箱式石棺		走水	大田部直	
	浦賀湾	島ヶ崎A			▲			走水		
		島ヶ崎B			▼			走水		洞穴にも銅鏡
		島ヶ崎D	□					走水		
	江奈湾	江奈2号	○					氷蛭		
	北条湾	向ヶ崎				形象埴輪		御崎		

凡例 ●＝環頭大刀　■＝圭頭大刀　○＝円頭大刀　□＝方頭大刀　◎＝金銅製馬具　＊＝特筆すべき馬具
▲＝銅鋺　▼＝銅鏡　△＝鈴釧　▽＝銅匙
・古墳・横穴墓名の太字は横穴墓を示す。
・郷名の斜字体・行書体のものは、分布氏族の同一書体の氏族と史料的な結びつきが確認できることを示す。

主要参考文献

明石新（2001）「相武国から相模国へ」『相武国の古墳－相模川流域の古墳時代－』
赤星直忠（1925）「相州鴨居の横穴（一）～（三）」『考古学雑誌』15-8・15-9・15-11
赤星直忠（1926）「逗子町の横穴」『考古学雑誌』16-4
赤星直忠（1929）「相模佐島横穴」『考古学雑誌』19-2
赤星直忠（1964）「神奈川県大磯町の横穴」『大磯町文化財調査報告』1
赤星直忠（1970）「登尾山古墳」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』1
赤星直忠（1973）「二宮町諏訪脇横穴群（西半部）」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』4
赤星直忠（1974）「釜口古墳調査概報」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書』6
赤星直忠（1975）「茅ヶ崎市篠谷横穴群調査概報」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書』8
赤星直忠（1976）「三浦市江奈横穴群」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』10
荒井秀規（1990）「古代相模の「渡来人」と「帰化人」」『三浦古文化』48
荒井秀規（1998）「神奈川古代史素描－ヤマト王権の進出と足柄評の分割」『考古論叢　神奈河』7
荒井秀規（2001）「文献に見る相武国造」『相武国の古墳－相模川流域の古墳時代－』
荒井秀規（2003）「古代の高座郡－郡家の所在をめぐって－」『公開セミナー　高座郡衙（郡家）の世界　発表要旨』
安藤文一（1999）『神奈川県山北町　南原古墳群　試掘調査報告書』
池上悟（2000）『日本の横穴墓』、雄山閣
池上悟（2004）『日本横穴墓の形成と展開』、雄山閣
伊勢原町勢史編纂委員会（1963）『伊勢原町勢史』、伊勢原町
市川正史・伊丹徹（1986）「三ツ俣遺跡」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』13-1
稲村繁（1999）『人物埴輪の研究』、同成社
稲村繁（2004）「横須賀市かろうと山古墳」『横須賀考古学会年報』39
岩本義雄（1964）『横浜市戸塚区鼬川流域の横穴群について』、鵠沼女子高等学校地理研究部
上田薫・砂田佳弘（1986）「代官山遺跡」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』11
上田薫（1989）「高棺座について」『神奈川考古』25
上田薫・三瓶裕司（2002）「比奈窪中屋敷横穴墓群」『かながわ考古学財団調査報告』136
大河内勉（1996）『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書』
大山誠一（1975）「大化前代遠江国浜名郡の史的展開」『日本歴史』321
柏木善治（2004）「神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討」『研究紀要９　かながわの考古学』
加藤謙吉（1983）『蘇我氏と大和政権』、吉川弘文館
加藤謙吉（1984）「相模の豪族とミヤケ」『宮久保木簡と古代の相模』
加藤謙吉（1998）『秦氏とその民』、白水社
かながわ考古学財団古墳時代研究プロジェクトチーム（1995）「横穴墓の研究（１）」『かながわの考古学』5
かながわ考古学財団古墳時代研究プロジェクトチーム（1996～2003）「横穴墓の研究（２）～（８）」『研究紀要１～７　かながわの考古学』
かながわ考古学財団古墳時代研究プロジェクトチーム（1998・1999）「小田原市久野・総世寺裏古墳の調査（１）・（２）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』40・41
小出義治・久保哲三編（1985）『秦野下大槻－古墳群と集落址の調査－』
小林義典・小山裕之ほか（2001）『御組長屋遺跡　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点　発掘調査報告書』
小林義典・田村良照（1991）『岡田越の山横穴群・岡田おこり塚（十三塚）』、寒川町
近藤英夫（2000）「大磯町中央域における遺跡分布調査報告」『大磯町史研究』7
近藤英夫・立花実・田尾誠敏（1991）『国府津三ツ俣遺跡』
斉木秀雄・川又隆央・押木弘己（1997）『神奈川県逗子市久木横穴群の調査』
佐伯有清（1970）「子代・名代と屯倉」『古代の日本』7
佐伯有清（1980）「丈部氏および丈部の基礎的研究」『日本古代史論考』
佐伯有清（1982a）『新撰姓氏録の研究』考証編第二、吉川弘文館
佐伯有清（1982b）『新撰姓氏録の研究』考証編第三、吉川弘文館
佐伯有清編（1994）『日本古代氏族辞典』、雄山閣
坂本太郎・平野邦雄監修（1990）『日本古代氏族人名辞典』、吉川弘文館
桜土手古墳群発掘調査団（1989）『神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査』
佐藤明生・中三川昇（1997）「埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅴ　八幡神社遺跡Ⅱ」『横須賀市文化財調査報告書』31

宍戸信悟・宮坂淳一・松田光太郎（2000）「三ノ宮・下谷戸遺跡（№14）Ⅱ」『かながわ考古学財団調査報告』76
篠原幸久（2003）「丸子氏と丸子部について」『鎌倉』97
篠原幸久（2004）「鎌倉の屯倉をめぐる若干の問題」『鎌倉』99
清水信行ほか（1989）『唐沢・河南沢－瓦窯址群と横穴墓群の調査－』
杉山博久（1977）「平塚市内の横穴墓群（Ⅱ）」『平塚市文化財調査報告書』13
杉山博久（1987）『万田八重窪・万田宮ノ入横穴墓群』
鈴木一男・國見徹（1996）「大磯町の横穴墓群－詳細分布調査の成果と課題－」『考古論叢神奈河』5
鈴木靖民（1993）「相模の木簡」『古代東国と木簡』
須藤智夫（1995）「古墳時代相模における在地社会の一様相」『考古学の世界』10
須藤智夫（2001）「古墳時代後期の相模と倭王権」『古代国家の政治と外交』
田尾誠敏（1993）「田島弁天山横穴 11 号墓出土の畿内産土師器について」『小田原市郷土文化館研究報告』29
田尾誠敏（1999）『相模国のはじまり　相模地方の豪族と相模国の成立』、東海大学校地内遺跡調査団
田尾誠敏（2000）「遺物から見た『相模』の形成」（『相模国の成立と地域社会』）」『東海大学校地内遺跡調査団報告』9・10
高杉博章・小山裕之ほか（2000）『上吉沢市場地区遺跡群発掘調査報告書』
立花実（1995）「三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書」『伊勢原市文化財調査報告書』17
立花実・手島真美（1999）「伊勢原市登尾山古墳再考－その再整理に向けて－」『東海史学』33
立花実（2001）「相武国の確立」『相武国の古墳－相模川流域の古墳時代－』
玉口時雄・大坪宣雄監修（1997）『吉井・池田地区遺跡群Ⅰ・Ⅱ』
田村良照（2000～2002）「相模の横穴墓（1）～（4）」『湘南考古学同好会々報』80・83・84・88
田村良照（2004）「相模の横穴墓」『考古論叢神奈河』12
寺田兼方（1966）「大庭折戸の横穴古墳」『藤沢市文化財調査報告書』3
寺田兼方・中嶋登（1980）「藤沢市川名新林横穴群調査概報」『藤沢市文化財調査報告書』15
寺田兼方・藤原直人・渡辺清史（1996）『藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
冨永樹之ほか（1998）「厚木の古墳」『厚木市文化財調査報告書』38
鳥養直樹（1973）「律令国家形成過程における在地首長の動向」『神奈川県史研究』21
直木孝次郎（1976）「丹比連について」『美原の歴史』2
中川成夫（1955）「相模大磯町愛宕山横穴調査報告」『史苑』16－1
仲野正美（1977）「当麻遺跡・上依知遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』12
中三川昇（2000）「三浦半島と相模（『相模国の成立と地域社会』）」『東海大学校地内遺跡調査団報告』9・10
長谷川厚（1999）「万田熊之台横穴群」『平塚市史』11 上　別編考古（1）
林原利明（2004）「チンガ塚古墳発掘調査報告書」『藤沢市文化財調査報告書』39
原秀三郎（2002）「遠江・駿河・伊豆山国の成立」『地域と王権の古代史学』
樋口清之・金子皓彦・青木豊（1974）「神奈川県岡津古久遺跡の調査」『考古学ジャーナル』102
日野一郎ほか（1972）『谷原　神奈川県相模原市谷原遺跡の調査』
日野一郎・杉山博久（1976）「平塚市内の横穴墓群（Ⅰ）」『平塚市文化財調査報告書』12
松本信道（1983）「漆部直伊波と相模国」『秦野市史研究』3
黛弘道（1982）「舂米部と丸子部 - 聖徳太子子女名義雑考」『律令国家成立史の研究』
黛弘道（1985）『上毛野国と大和政権』、上毛新聞社
三上次男・大井晴男（1972）「二宮町諏訪脇横穴群調査報告（東部分）」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』3
三ツ橋勝（1992）『神奈川県相模原市東原遺跡』
南舘則夫（1997）「物見塚古墳発掘調査報告書」『小田原市文化財調査報告書』63
山内昭二ほか（1996）「久野第２号古墳」『小田原市文化財調査報告書』58
横須賀市教育委員会（1987）「蓼原　神明地区埋蔵文化財調査報告（1）」『横須賀市文化財調査報告』13
横須賀市人文博物館（1994）『三浦半島の古墳　用語解説』
吉田章一郎・今津節生・伊丹徹（1992）『登山１号墳出土遺物調査報告書』
鎧塚古墳発掘調査団（1991）「鎧塚古墳群第１号墳発掘調査報告書」『伊勢原市文化財調査報告書』16
渡辺外・市川正史ほか（2004）「宮山中里遺跡・宮山台畑遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』170

神奈川の横穴墓の様相

池上　悟　（立正大学文学部）

1

神奈川県における横穴墓は、横穴墓が密集分布する東国にあっても特に注目されてきたところである。戦前からの赤星直忠・石野瑛などを中心とする地域考古学の実践は高く評価されるところであり、昭和30年代前半に結実した赤星の横穴墓型式・編年論は(1)、その後長く地域研究を主導してきたところである。

また報告書の刊行が著しく遅延した横浜市・市カ尾横穴墓群の調査は、横穴墓を群集の相において捉え、また地区の古墳文化を総体的に把握したという意味において重要であった(2)。しかしながら調査時点に明確となった横穴墓構造の全体を把握した重要な意義に対し、報告段階の研究内容の遅れが目立つものとなっている(3)。横浜市域の調査では、未だ報告書の刊行されていない重要な古墳も多くあり、地域古墳文化の究明を大きく阻害している。

近年における留意すべき研究としては、神奈川県埋蔵文化財センターによる神奈川県下に分布する既報告の７１１基の横穴墓を対象とした、平成７～14年の総括的な分析が認められる(4)。内容は横穴墓構造と付帯施設を中心とした出土土器類を基礎とした構築年代に基づく編年を主眼とした分析を主体としており、僅かに横穴墓群の形成過程の分析を果したに過ぎない。総体としては、分析の前提として設定された「同時期に形成された高塚群集墳との社会的な意味や形態・構造面での違いが何を物語るのか」という問題解明(5)の前提作業と位置づけることができよう。今後の継続した意欲的な検討が望まれるところである。

また神奈川県下最大の密集度を示す大磯丘陵所在の横穴墓については、平成２～５年度の分布調査の成果を基に、鈴木一男・国見徹両氏により67群487基を対象として基礎的な検討が行われている(6)。地域に主体的な逆台形平面・アーチ形天井構造の横穴墓を大磯型、大磯丘陵の西側に顕著に認められる肋状壁面仕上げを旧地名を以って余綾技法と提唱している。地域研究の一つの方向を明示した分析と評価されよう。

大磯丘陵に隣接する旧大住群域の横穴墓については、明石新氏により総括されている(7)。大磯丘陵の東・北側を南流する金目川流域を中心とする平塚・秦野・伊勢原・厚木・茅ヶ崎市域所在の横穴墓を対象としている。当該地域の横穴墓を矩形玄室平面・ドーム形天井を主体とする第１段階(６世紀後葉)→→→　逆台形・アーチを主体とする第２段階(７世紀前半)→→→　長逆台形・アーチを主体とする第３段階(７世紀中葉)→→→　小型長逆台形・アーチを主体とする第４段階(７世後半)の変遷を明示している。横穴墓の変遷を地域史に組み込んだ総括として重要なものである。

旧鎌倉群所在の横穴墓については、鎌倉市内における３横穴墓群の報告に合わせて、田村良照氏により既報告横穴墓の集成が果されている(8)。川崎市内における３横穴墓群の報告に合わせた鶴見川および多摩川下流域の横穴墓の様相の総括(9)とともに、基礎的な検討として重視されよう。

2

横穴墓の研究は、何を目指して実践されてきたのであろうか。現在までに①横穴墓始原論、②横穴墓編年論、③横穴墓企画論、④横穴墓型式論、⑤横穴墓埋葬様式論、⑥横穴墓埋葬儀礼論、⑦横穴墓被葬者論、⑧横穴墓群集墳論など、様々な視点から実践研究されてきた。

①横穴墓始原論は、昭和 30 年代に家屋構造を写した家形横穴墓を最古形とする赤星編年が出土遺物の無検討を批判されて以降では県内では問題とならない。昭和 30 年代後半の山本清の出土遺物を根幹とした北部九州地方における発現の指摘(10)の具体的事象は、昭和 40 年代後半に北部九州は豊前の地で確認され、以降横穴墓葬法は、北部九州を起点としての東方各地への展開が想定されている(11)。赤星以後 55 年を経過して多元論から一元論への転換が慥かなところであるが、現状では関東・東北の各地へ波及した横穴墓型式は、北部九州のみならず、出雲・河内・東海地方で定型化した型式が波及している点を確認することができる(12)。近隣地域との関連性の確認も漸く問題とされてきてはいるものの、総体としての問題意識の欠如により十分には展開していない。

また横穴墓の始原は、北部九州の豊前を中心に検討されてきたところであるが、朝鮮半島南部の百済・公州の地において確認された初現期に特有な、入口部を斜面上位に設定して内部の玄室を一段低く設定する特異な構造は、北部九州の５世紀後半代の初現期横穴墓と酷似するところであり(13)、彼我の交流を物語るところである。従前の北部九州の地において竪穴系横口式石室を構造的規範として現出されたとする横穴墓始原論は再考すべき段階に至ったものと認識される。

②横穴墓編年論は、個別横穴墓の所産時期を明確とし横穴墓群の造営年代幅、群内個別横穴墓の関連を明確にするための前提作業であり、横穴墓群の変遷の大綱を把握するための重要な作業である。特定地区に波及・定着した横穴墓は、地区総体の個別的特性によって変遷の過程を異にしている。当初波及の要素を継続的に保持する地区、新たな構築要素を受容して構造を転換する地区、地区首長墓と位置づけられる横穴式石室の構造を規範として変化するなど多様である。

東海以西の地方と異なり、関東・東北横穴墓から副葬品が多量に出土することは稀である。出土土器からの横穴墓構築年代が不明な状況を打開するために実践されてきたのが横穴墓企画論である。

③横穴墓企画論は、昭和 30 年代に尾崎喜左雄博士により上野地域の横穴式石室を対象として開始され方法(14)を継受したものであり、必ずしも内容が十分に理解されていない分野でもある。横穴墓も構造物である以上、構築に当たっての基準となる長さは当然それぞれの横穴墓掘削工人集団には墨守されていたはずであり、この点を否定しては横穴墓企画論は成り立ち難い。

神奈川県横浜市所在の熊ヶ谷・熊ヶ谷東横穴墓群(15)で検討してきたところでは、横穴式石室で想定された 35 ㎝→→→30 ㎝→→→25 ㎝という基準長の変遷に合致するところであり(16)、墳墓構築集団の密接な関連性を窺わせるものとなっている。横穴式石室と横穴墓構造の類似性の検討は、７世紀代の切石を用いた石室との関連が問題となるところであり、在地首長墓としての石室墳と従属する集団の墳墓としての横穴墓という関連が想起される。

④横穴墓型式論は地域あるいは地区に特徴的な横穴墓構造を確認し、よって来たる系譜を明確にして特定型式横穴墓展開の背景を考えるものである。神奈川県下における横穴墓の変遷は、矩形・ドーム構造から逆台形・アーチ構造を基本とする型式に変化している。この過程で玄室床面を礫敷きとする要素が、特に多摩丘陵部において顕著に現出している(17)。特定地域における横穴墓型式は、初現以降の複数回の要素の流入により複雑に変遷している。

鎌倉郡を中心として確認される特徴的な横穴墓型式としては棺室横穴墓が認められ、あわせて奥壁側の高棺座横穴墓も顕著に発展している。特に群構成における棺室横穴墓と先行横穴墓の型式的断絶は、外房地区における高壇式横穴墓と先行横穴墓型式間の様相に一致するところであり、広い視野での検討が望まれるところである。

⑤横穴墓埋葬様式論は、埋葬人骨の検出と群構成の解明を前提とする。横穴墓は古墳時代後期に盛行した埋葬法であり、実際にどのように埋葬に使用されたかの確認は、造営集団の性格をも想定し得る重要な研究課題と認識される。しかしながら埋葬法まで確認できる調査例は極めて少ない。

一般的に横穴墓は、その内部で追葬を含めた複数回の埋葬に対応したものと考えられる傾向にあるものの、中には出土人骨が改葬された状態で確認される例も知られ、改葬前の第１次葬の場所が問題となる。群中の隣接する横穴墓を第１次葬の場所と考えた場合には同時期複数の横穴墓造営の様式が想定される。神奈川県下に僅かに確認される改葬横穴墓は７世紀代の造営と想定されるところであり、先行して６世紀代に確認される東北南部地域との関連が考えられる(18)。また房総半島南部においては顕著に人骨の集積された事例も知られるところであり(19)、南関東一体に波及した事象として、この点においても横穴墓構築集団間の交流を想定することができる。

⑥横穴墓埋葬儀礼論は、出土遺物の使用状態の復元的検討を主体として想定される。この点は発生期以来の高塚古墳における埋葬儀礼の復元研究に等しい。竪穴系埋葬施設から横穴系埋葬施設の転換期における埋葬施設内への土器類の副葬は、北部九州における横穴墓初現期以降に漸移的に増加し黄泉国観念の確立に伴って定型化するようである。しかしながら横穴墓内から豊富な土器類を出土するのは東海地方までであり、関東・東北では一般的に横穴墓内部への副葬は僅少例に留まる。従って出土土器類をもってする埋葬儀礼の考究は墓前域からの僅かな出土例が検討の対象となるところであるが、現状では見るべき成果は挙がってはいない。

また横穴墓内部壁面に確認できる釘の存在によって布帛の存在が指摘されており(20)、横穴墓壁面に線刻された埋葬に係る壁画とともに埋葬儀礼の検討も果されている(21)。

⑦横穴墓被葬者論は、戦前の副葬品の僅少さから想定された庶民階級とする見解から脱却して、戦後に神奈川県下所在例を対象として進展した。昭和30年代の赤星見解では、「時間と共に彼等の首長から里長へと、更に戸長へと一般化した」とされ、昭和40年代の阿部黎子見解は、「その被葬者はいわゆる庶民ではあり得ず、ごく限られた数世帯の人々であったと言えるであろう」とし、「郡司・里長などの在地豪族や、その他朝廷によって東国に移入された氏族集団などであったかも知れ

ない」としている(22)。

現今の被葬者論は、出土遺物・横穴墓型式論の発展により上記の見解を否定する傾向にある。横穴墓を古墳時代に盛行した群集墳の一類型と認識しての検討であり、内在的要因以上に外的要因が大きいものかと思考されるところである。

⑧横穴墓群集墳論は、⑦と密接に関連する研究視点である。横穴墓が一般的に群集して存在する点は分布が認められる各地で共通するところであり、最大の特質として認識できる。昭和 40 年代末葉以降、我が国における横穴墓の初現は5世紀後半代と考えられており、竪穴系埋葬施設をもってする初期群集墳の開始年代に一致している。また東北地方にまで拡散した6世紀後半代は、横穴式石室を構築した高塚群集墳の盛行時期に附合しており、東国における横穴墓盛行年代である7世紀代は終末期群集墳と併存している。しかしながら従前の群集墳研究では、特に古墳文化の中心地である畿内地方における横穴墓の偏在性に起因した故にか高塚古墳が主体的に検討されてきており、横穴墓をあわせて検討した論考は先駆的な門脇俊彦(23)を除けば広瀬和雄(24)・大森円(25)など僅少にすぎない。

神奈川県下の横穴墓を対象としたところは、水野敏典による検討に留まる現状である(26)。神奈川県下の後期古墳から出土する被葬者の性格を明示し得る稀少副葬品としての銅鋺・銅釧・装飾大刀・馬具の、横穴墓からの出土を高塚古墳と比較した結果では、両者に顕著な差異が見出せない点を確認し、両者には副葬品の上では際立った差異を見出し難い点を明確にしている。これら稀少副葬品は、群集墳に伴うものではなく特定被葬者個人に属した可能性も考慮されてはいる。

既に新納泉の指摘に明確なように(27)、これら稀少副葬品は従前からの明確な在地系譜を有する首長墓から出土する一方で群集墳からも出土する。問題とすべきは、神奈川県下においては6世紀後半～7世紀前半代におけて地域を掌握した有力首長墓、あるいは個別地区を統括した首長墓の存在が認められないという点である。群集墳の存在様相は、畿内を対象とした白石見解を引くまでもなく、密接に在地首長墓と関連している。多摩丘陵地区においてはこの時期、河川流域の小地区を基盤として横穴式石室を構築した小型前方後円墳ないしは円墳を中心として周辺に横穴墓が展開する様態が考慮できる。地区開発の主導的地位を担った高塚古墳被葬者と従属する有力集団構成員の墳墓としての横穴墓の位置づけである (28)。しかしながら、この様態もまた自立的に機能したものとは考えられない、地域内ないしは地域外の有力集団との連繋のもとの現象と考えられる。地区に有力首長墓の存在が顕著ではなく、横穴墓を含めた群集墳が盛行する地域は神奈川県下のみではなく、東国各地に確認できる。遠江・駿河・伊豆の静岡県下、南東北の福島県下、北東北の宮城県下などであり、いずれも横穴墓が顕著に展開している(29)。

以上に触れた全ての点において、横穴墓を個別地域の内在的要因を強調して理解することは限界がある。前方後円墳体制から方墳体制に転換する時期に盛行期を迎える横穴墓は、時代の所産として広く築造の背景を問題とすべきであろう。

3

東国各地の横穴墓群に確認できるところは、6世紀後半代の初現期に西方各地からの系譜を想定できる横穴墓型式が波及・定着して横穴墓葬法が確立していくが、次いで7世紀代の展開期にも地区独特の型式の定立を確認できる。東国に顕著なところでは、横長玄室平面に平入家形天井を浮き彫りにて表し、玄関床面には刳り貫きの棺を複数設置して羨道床面からは1m以上の格差を以って構築された外房地区の高壇式横穴墓である。また南武蔵・多摩川上流域地区では、地区首長墓として円墳に構築された胴張り複室石室を規範とした胴張り複室横穴墓が展開しており、多摩丘陵地区では切石使用の矩形石室を規範とした単室構造横穴墓を確認することができる(30)。

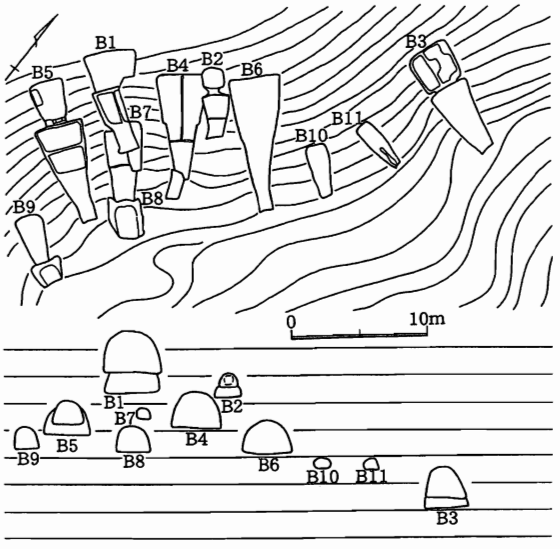
神奈川県下におけるこの時期の特徴的な横穴墓構造としては、柏尾川の支流域を中心として展開した棺室横穴墓を確認することができる。地区に特徴的な長台形玄室平面・アーチ天井構造の横穴墓の奥壁に埋葬用の空間を別途に造作したものである。これが出現に至る系譜としては、地区に特有な長台形玄室平面・アーチ天井構造横穴墓の奥壁沿いに設えた高棺座横穴墓の変遷の結果とする滝沢亮氏(31)・東原信行氏の見解(32)が認められる一方、近野正幸氏により横口式石槨からの影響が指摘されている(33)。また棺室横穴墓の分布については、川崎市・夢見ヶ崎横穴墓の報告において東原信行氏により纏められている。神奈川県下においては横浜市南部の柏尾川流域を中心として西側は大磯丘陵、北側は川崎市・夢見ヶ崎横穴墓と確認され、西端は伊豆・柏谷百穴横穴墓群に及んでいる。さらに東京湾を挟んで対峙する房総半島南部の上総・安房の内房地区にも類似横穴墓が多数存在する点が確認されており、相模地区からの棺室構造の波及も想定されている。

しかしながら従前の検討においては、棺室構造横穴墓を対象とした分析は決して十分であったとは言い難い。その要因としては出土遺物の僅少なために所産年代把握の困難な点があり、さらに従前それほど多くはなかった発掘調査に起因するところであろう。神奈川県立埋蔵文化財センター・古墳時代研究プロジェクトチームによる集計では、神奈川県下の所在する棺室横穴墓は59基を数える。ここでその後に調査・報告された主要な棺室横穴墓80基を集成してみると、棺室部分の面積として2.0㎡～4.0㎡が主体をなす中にあって、約4.5㎡以上を占める大型棺室横穴墓の存在が注意され、最大は13㎡ほどを占める。

棺室横穴墓の大半が時期を明示する出土土器類を欠如する中にあって、近時報告された鎌倉市二ノ谷・岩瀬上耕地横穴墓群(34)は異型式の横穴墓相互の変遷過程を出土遺物から跡付けられる格好の資料となっている。二ノ谷横穴墓群は、丘陵斜面の窪地の上位に大型異型棺室横穴墓である第5号墓が位置しており、この横穴墓の両脇斜面下位に、長台形玄室平面・アーチ形天井構造の奥壁沿いに高い棺座を設えた5基と3基の高棺座横穴墓が展開している。出土遺物からは棺室横穴墓である第5号墓が7世紀中葉、高棺座横穴墓が7世紀中葉～後半代の構築と想定でき、群形成の端緒を大型異型棺室横穴墓が担ったものかとも考えられる。

異型とする所以は、前室床面から110㎝上位に設定された棺室床面に「コ」の字形3棺座を造作

する点である。「コ」の字形３棺座は広く見れば中九州は肥後型横穴墓に特徴的な構造であり、６世紀後半代には東北北部の宮城県・大崎平野周縁地区に波及し長羨道を付加して地区型式を確立している(35)。一方関東地方においても僅少例の存在を確認でき、神奈川県下においては川崎市・津田山丘陵に初現期に遡及するものと想定できる少数例が知られる(36)。



岩瀬上耕地Ｂ横穴墓群

しかしながら想定される７世紀中葉における類例は、千葉県北部の利根川南岸地区において６世紀後半代以降に展開した横穴墓群の中に知られるのみである(37)。関東に稀な長羨道を伴う下総町・西大須賀横穴墓群中に確認されるところであり、東北北部との関連を想起させる。二ノ谷横穴墓群の造営開始にあたって千葉県北部を経由した東北北部との関連も考えさせるところである。

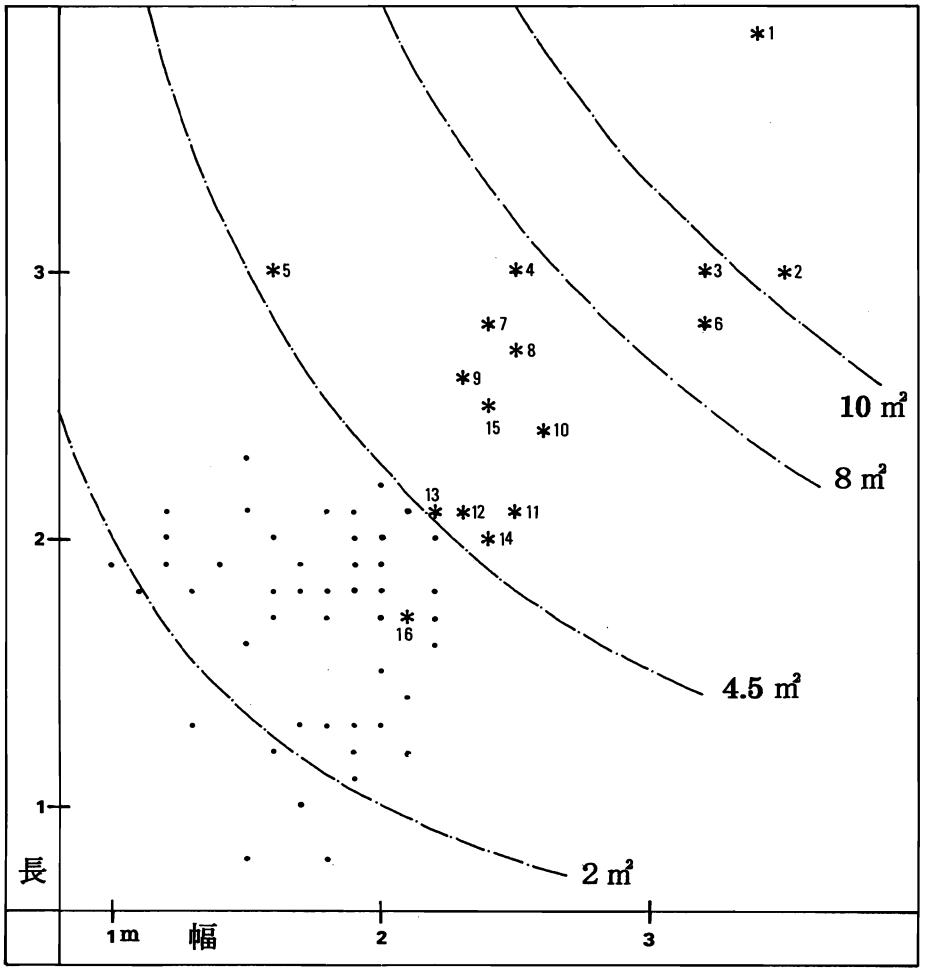
岩瀬上耕地横穴墓群はＡ群１基、Ｂ群 11 基、Ｃ群７基で構成されており、Ｂ群３基、Ｃ群２基の棺室横穴墓を含んでいる。棺室横穴墓の位置を明確に確認できるのはＢ群である。僅かな袖を残す台形玄室平面・アーチ天井構造の第４号墓から７世紀初頭頃の須恵器、長台形玄室平面・アーチ天井構造の第６号墓から６世紀末頃の須恵器が出土しており、小型の第７・９・10・11 号墓からは７世紀初頭から中葉にかけての須恵器が確認されている。幅 1.25m、長さ 2.3m の小型の第 11 号墓からは７世紀中頃の須恵器とともに腸抉柳葉型式の鉄鏃５本が出土している。しかしながらこの型式の鉄鏃は６世紀後半代の所産にかかるものであり(38)、人骨からの確認はできないものの、副葬品を２次的に移動した結果と判断される。この点を勘案すると、岩瀬上耕地横穴墓群においては横穴墓型式としては定立しない小型横穴墓は、大型横穴墓である第６・８号墓に付随した改葬墓として構築されたものと考えこともできよう。

高棺座横穴墓・棺室横穴墓の出土遺物からの構築年代を確定することはできないが、個別横穴墓の群内占地を勘案すると、①第３・５・10・11 号墓、②第１・２・４号墓、③第５・８・９号墓の３単位による造営と考えることができ、６世紀末～７世紀初頭に台形・長台形平面横穴墓、次いで７世紀前半代に高棺座横穴墓、最終時である７世紀中葉以降に棺室横穴墓を位置づけることができよう。以上の鎌倉市二ノ谷・岩瀬上耕地横穴墓群(に窺われる棺室横穴墓の位置は、地区に先行する横穴墓型式の後を受けて高棺座横穴墓に先行する場合と後出する両様を確認することができる。また大型棺室横穴墓の群中に占める位置は、通常規模の棺室横穴墓に先行する点をほぼ確認することができ、先行する地区型式である長台形玄室平面・アーチ形横穴墓に後続する点をも確認できる。

ここで群別に棺室横穴墓の占める位置を確認すると、地区に先行するアーチ形横穴墓を群中に含

主要棺室横穴墓集成				
名　　称	最大幅×最大長	棺室床面高さ	平面形	備　　考
夢見ケ崎横穴墓	2.1×1.7m	50cm	楕円形	ドーム天井
中居丸山A－1号墓	★2.3×2.6m	20cm	方形	天井前壁
A－2号墓	1.7×1.8m	80cm	方形	
B－1号墓	2.2×1.6m	60cm	不整台形	
B－2号墓	1.5×1.6m	70cm	不整円形	
B－3号墓	2.0×1.9m	90cm	不整台形	
B－4号墓	1.9×1.9m	100cm	方形	
B－5号墓	1.5×2.3m	90cm	長台形	
C－2号墓	1.3×1.3m	80cm	不整台形	
C－6号墓	1.8×1.8m	90cm	不整台形	
C－8号墓	1.8×1.7m	120cm	不整円形	
C－9号墓	2.0×2.2m	170cm	隅丸方形	
C－10号墓	1.5×2.1m	60cm	不整台形	
C－11号墓	1.2×1.9m	50cm	長方形	
D－2号墓	★1.6×3.0m	130cm	長方形	
D－3号墓	1.4×1.9m	50cm	台形	
D－4号墓	1.6×1.7m	160cm	台形	
D－5号墓	★2.5×3.0m	70cm	台形	
D－6号墓	1.2×2.1m	50cm	台形	
D－7号墓	2.1×2.1m	70cm	台形	
E－1号墓	1.6×2.0m	90cm	長方形	
宮ノ前A－1号墓	★2.6×2.4m	70cm	方形	
A－2号墓	★2.3×2.1m	130cm	方形	排水溝
A－4号墓	2.0×2.0m	60cm	台形	
B－1号墓	1.7×1.8m	80cm	台形	排水溝
B－2号墓	1.1×1.8m	50cm	不整長方形	
B－3号墓	1.6×1.8m	70cm	隅丸方形	排水溝
B－4号墓	1.9×2.1m	120cm	隅丸方形	排水溝
B－5号墓	2.0×2.0m	90cm	方形	
B－6号墓	★3.4×3.9m	20cm	長方形	天井前壁・排水溝・框状造出
B－7号墓	1.4×1.9m	20cm	不整長方形	
C－2号墓	2.0×2.0m	60cm	方形	
C－3号墓	1.4×1.9m	80cm	長方形	
七石山　A－1号墓	1.8×2.1m		方形	
A－2号墓	1.6×1.2m		横長長方形	
A－3号墓	1.9×1.8m		方形	
A－4号墓	1.7×1.3m		方形	
A－7号墓	★2.2×2.1m		横長長方形	
A－8号墓	1.5×1.8m		方形	
A－9号墓	1.9×1.8m		方形	
A－11号墓	1.8×0.8m		横長長方形	
A－12号墓	2.0×2.0m		方形	
A－13号墓	2.0×1.3m		横長長方形	
A－15号墓	2.0×1.8m		方形	
A－16号墓	1.8×1.3m		横長長方形	
A－17号墓	1.9×1.3m		横長長方形	
A－19号墓	1.8×1.8m		方形	
A－20号墓	2.0×1.5m		台形	
A－26号墓	1.9×2.0m		台形	
A－28号墓	1.7×1.9m		台形	
滝ヶ久保1号墓	★2.0×2.2m		方形	
2号墓	1.6×2.0m		方形	
3号墓	2.1×1.5m		横長長方形	
七石山　C－45 号墓	2.2×2.0m	60cm	方形	
C－1号墓	1.9×1.9m	90cm	方形	
E－1号墓	2.0×1.7m	150cm	台形	
E－2号墓	1.0×1.9m	70cm	長方形	
E－4号墓	1.9×2.0m	60cm	台形	
E－5号墓	★2.5×2.1m	60cm	方形	
E－6号墓	★2.2×2.1m	90cm	方形	
西念寺境内横穴墓	2.2×1.8m	120cm	台形	
桂町3号墓	1.3×1.8m	100cm	不整長方形	
桂町4号墓	1.9×1.1m	140cm	不整台形	
桂町8号墓	1.9×1.2m	110cm	不整台形	
桂町10号墓	1.7×1.0m	90cm	不整台形	
桂町13号墓	1.9×1.9m	110cm	隅丸方形	
山野根5号墓	2.1×1.4m	100cm	台形	
小坪うちで中横穴墓	2.1×1.7m	60cm	台形	天井前壁
小坪うちで右横穴墓	2.2×1.7m	50cm	方形	天井前壁
二ノ谷5号墓	★2.5×2.7m	120cm	方形	有縁3棺座・アーチ天井
岩瀬上耕地B－2号墓	1.6×1.8m	60cm	不整台形	
B－3号墓	★3.5×3.0m	40cm	方形	排水溝
B－5号墓	★2.4×2.8m	50cm	台形	
C－4号墓	★2.4×2.5m	70cm	方形	排水溝
C－6号墓	2.1×1.2m	110cm	横長長方形	
大磯・清水北4号墓	★3.3×3.0m	0cm	方形	天井前壁・奥棺座・框状造出
10号墓	★3.2×2.8m	0cm	隅丸方形	天井前壁・框状造出
大磯・庄ヶ久保1号墓	1.5×0.8m	70cm	横長長方形	
大磯・揚谷寺谷4号墓	★2.4×2.0m	0cm	方形	天井前壁・框状造出
函南・柏谷百穴12号墓	1.2×2.2m	70cm	長台形	

む横穴墓群としては上記の鎌倉市・岩瀬上耕地横穴墓群のほかに、横浜市・宮ノ前A・C地区横穴墓群(39)、同・滝ヶ久保横穴墓群、同七石山A地区横穴墓群(40)、同・桂町横穴墓群が知られる。これに対して先行するアーチ形横穴墓を含まない横穴墓群としては、上記の鎌倉市・二ノ谷横穴墓群のほかに横浜市・中居丸山横穴墓群、同宮ノ前B地区横穴墓群、同・七石山E地区横穴墓群(41)を確認できる。棺室横穴墓の中心分布地区においては、棺室横穴墓のみで群を構成する横穴墓群も存在しており、棺室横穴墓造営期に横穴墓被葬者集団の急激な拡大が確認される。

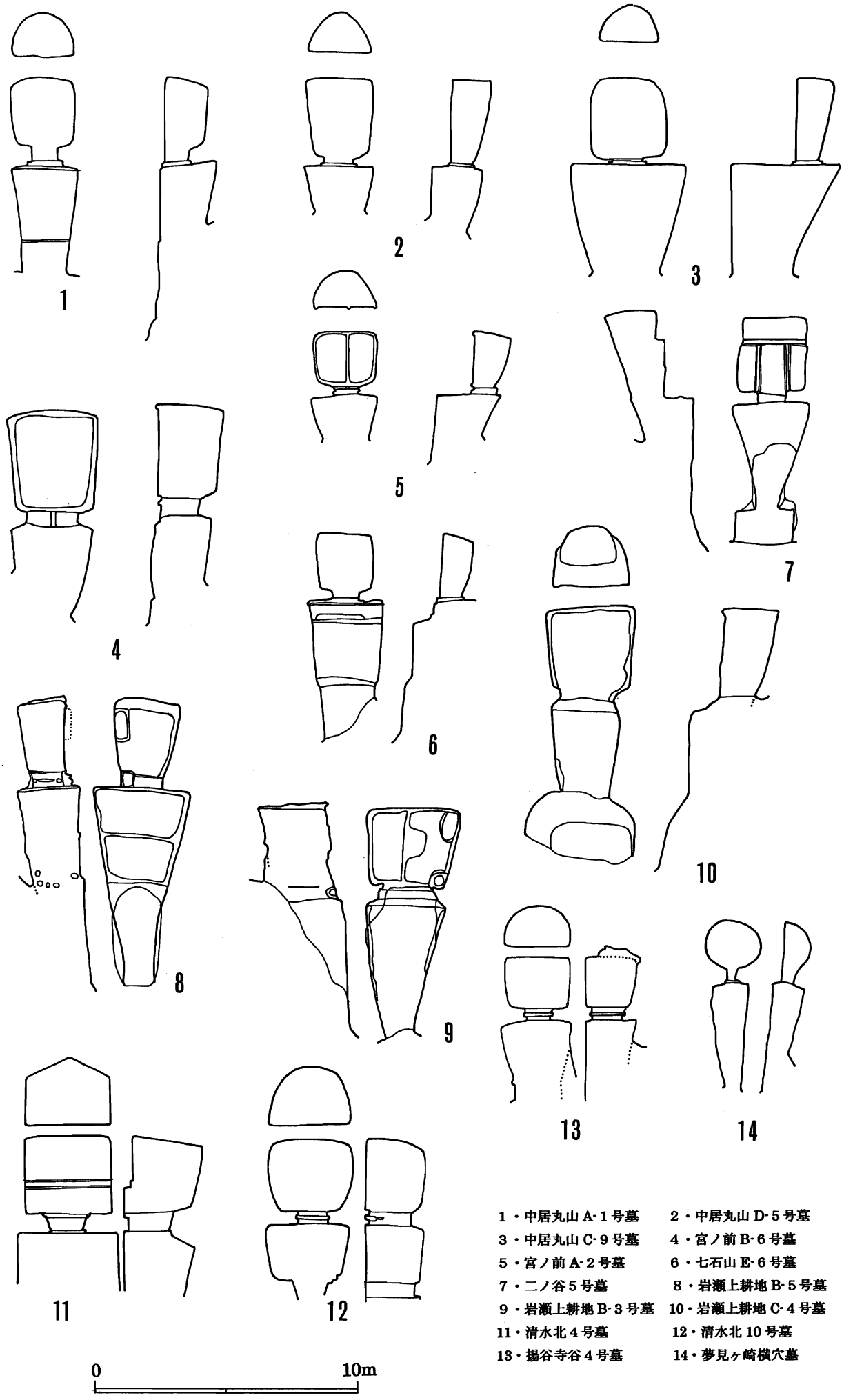


1・宮ノ前B-6号墓　2・岩瀬上耕地B-3号墓　3・清水北4号墓　4・中居丸山D-5号墓
5・中居丸山D-2号墓　6・清水北10号墓　7・岩瀬上耕地B-5号墓　8・二ノ谷5号墓
9・中居丸山A-1号墓　10・宮ノ前A-1号墓　11・七石山E-5号墓　12・宮ノ前A-2号墓
13・七石山E-6号墓　14・揚谷寺谷4号墓　15・岩瀬上耕地C-4号墓　16・夢見ヶ崎横穴墓

神奈川県下所在・主要棺室横穴墓規模集成表

先行アーチ形横穴墓からの横穴墓型式の変遷は、①直接棺室を構築する横浜市・宮ノ前A・C群、同・七石山A群、②高棺座横穴墓に後続して棺室横穴墓を構築する横浜市・桂町横穴墓群、鎌倉市・岩瀬上耕地横穴墓群の２様相が確認でき、③棺室横穴墓から高棺座へ変遷する横穴墓群は鎌倉市・二ノ谷横穴墓群に過ぎない。棺室横穴墓が横浜市域の柏尾川の支流域を中心として盛行する７世紀中葉以降には、藤沢・鎌倉市域を中心として高棺座横穴墓が展開している(42)。③の様相が確認される二ノ谷横穴墓群は、棺室横穴墓の中心分布地帯から懸隔された立地に起因するものかと思える。

大型棺室横穴墓は、上記したほぼすべての横穴墓群において少数存在しており、出土遺物による年代づけは難しいものの群内占地を勘案すると通常規模の棺室横穴墓に先行して構築されたものと



1・中居丸山A-1号墓　2・中居丸山D-5号墓
3・中居丸山C-9号墓　4・宮ノ前B-6号墓
5・宮ノ前A-2号墓　6・七石山E-6号墓
7・二ノ谷5号墓　8・岩瀬上耕地B-5号墓
9・岩瀬上耕地B-3号墓　10・岩瀬上耕地C-4号墓
11・清水北4号墓　12・清水北10号墓
13・揚谷寺谷4号墓　14・夢見ヶ崎横穴墓

考えられ、少数の大型棺室横穴墓が構築された後に通常規模の棺室横穴墓が定型化して盛行したものと想定される。これら以外では大磯丘陵地区に所在する例が知られるものの様相を異にしている。

主要展開地区で留意すべき構造の大型棺室横穴墓は、①中居丸山A－1号墓、②宮ノ前B－6号墓、③岩瀬上耕地B－3号墓である。ともに前室奥幅と棺室幅がほぼ等しく、前室床面と棺室床面の段差が顕著ではなく20～40㎝程度を測るに過ぎない。更には①・②に認められる棺室天井部Bの前壁、②・③に認められる棺室床面周囲の排水溝、②に認められる入口部の框状の造作を特徴として確認することができる。

大磯丘陵に所在する3基の大型棺室横穴墓はともに前室床面と棺室床面段差を設けてはおらず、角の明瞭な矩形玄室平面・奥側の棺座を造作した清水北4号墓、複室構造を呈する清水北10号墓・揚谷寺谷4号墓ともに棺室入口部を一段高くした框構造を造作しており、棺室横穴墓中心分布地区とは異なる背景による現出と理解できる。特に角の明瞭な矩形玄室平面を呈する清水北4号墓は、正確な実測図を欠くもののほぼ30㎝を基準長とした幅11・長さ10、高さ9として企画されたものと考えられ、同地区内所在の類例との関連が問題となる。大磯丘陵所在の横穴墓のうちには、台形玄室平面・アーチ天井構造の横穴墓が主体をなす中にあって清水北4号墓と同じく平面角の明瞭な横穴墓が数基存在している。群として展開している南井戸窪横穴墓群については実測調査を果たして企画性を確認した。6基の横穴墓群のうち奥壁沿いに高さ40㎝の棺座を設けた第6号墓以外の、家形4基を含む5基の横穴墓はともに30㎝を基準長として企画された7世紀前半代の所産であり、隣接する釜口古墳の横穴式石室との関連が考慮される(43)。この点を勘案すると大磯丘陵には通常規模の棺室横穴墓として庄ヶ久保第1号墓が所在するものの、大型棺室横穴墓とされる類例は地区独自に横穴式石室を構造的規範として創出されたものと理解できる。

一方、通常規模の棺室横穴墓の始原形態としての棺室中心分布地帯における大型棺室横穴墓の構造も上記した特徴に留意すれば、規範となったのは切石使用の横穴式石室であったものと想定できよう。しかしながら現状では隣接して横穴式石室を構築した高塚古墳の存在は知られていない。

神奈川県下において横穴式石室を構造的規範にして新たに地区に現出したと考えられる横穴墓は、従前は多摩丘陵地区に限定されていた。初現期横穴墓としての位置づけをなされてきた横浜市・市カ尾横穴墓群の始原形態であるB－16号墓、谷を隔てて立地した小黒谷第3号墓(44)、川崎市・日向第3号墓(45)などであり、周辺に多数の横穴墓を従属させた地区首長墓としての高塚古墳の主体部として構築された横穴式石室を模倣した結果と考えられ、自ずと石室模倣横穴墓被埋葬者の性格を暗示するとことである。

従って柏尾川の支流域を中心として展開した棺室横穴墓の始原形態と考えられる大型棺室横穴墓の初現については、東国各地で7世紀代前半に現出した地区の横穴式石室を模倣した横穴墓現出の趨勢のうちに誘因を考慮することができよう。大型棺室横穴墓のうち、前室床面と棺室床面の大きな段差を設定していない、初現形態として位置づけられる宮ノ前B－6号墓と中居丸山A－1号墓

の企画を検討すると、報告されている実測図に問題はあるものの前者で 30 cmを基準長とした棺室奥幅 11・前幅 10・長さ 12・高さ 8 と想定でき、後者は 25 cmを基準長とした棺室奥幅 10・前幅 9・長さ 10・高さ 5 に復元できる。既に検討したところでは(46)、横穴式石室および横穴墓において基準長の変換を明確に確認できるのは多摩丘陵地区の特質であり、これら横穴墓の現出には多摩丘陵地区の横穴墓との関連を想起することができる。また出現の時期は 7 世紀の前半代でも中葉に近い頃と考えられ、中葉以降に通常規模の棺室横穴墓が定型・展開したものと考えられる。

以上の検討は特徴的な棺室横穴墓の初現についてであり、前室に比較して棺室が小型化し前室床面と棺室床面の大きな段差を特徴とする通常規模の棺室横穴墓の定型を検討したものではない。この点は中心分布地区を藤沢・鎌倉市域として展開した高棺座横穴墓とも関連するところである。両者の関連は、横浜市・桂町横穴墓群および鎌倉市岩瀬上耕地横穴墓群に窺われるように、高棺座横穴墓が先行して定型化し、その影響が棺室横穴墓に及んだものと考えられる。

長台形玄室平面横穴墓の奥壁沿いの造り付け石棺の変遷として高棺座横穴墓が現出する想定については、その過程が必ずしも分明ではないとの批判が提示されている。高棺座横穴墓は長台形平面の玄室奥沿いを遺体安置の場所として高く設定したものであり、棺室横穴墓は類似する構造を呈するものの、遺体安置の場所を明確に室として区画して棺室を造作している。7 世紀前半代に現出した横穴墓様相であり、合わせて広く多摩丘陵地区を除く神奈川県下に展開している。

この様相は千葉県の外房地区の茂原周辺を中心として展開する、7 世紀初頭以後に定型化した大型横長平面の玄室全体を高く設定した高壇式横穴墓(47)にも通じる特徴であり、更に内房地区に展開した棺室類似横穴墓にも類似している。遺体安置部分を高く設定する埋葬施設の現出については、近野正幸氏による横口式石槨との関連性の指摘はあるものの(48)、東国終末期古墳として明瞭に段差を有して棺室部分を設定した横穴式石室は、千葉県富津市に展開した内裏塚古墳群中の割見塚古墳(49)と森山塚古墳(50)に留まる現状である。従って在地首長墓としての埋葬施設の採用であり、時期的な趨勢としての横口式石槨の影響は考えられるものの、棺室横穴墓への直接的な影響は確認し難い。直接遺体埋葬部分を高位に設定する要因は現状では不明とせざるを得ない。

特定地域に特定型式の横穴墓の集中展開は、従前とは異なる埋葬様式の実践と、周辺とは異なる被葬者集団を考えさせるところである。埋葬様式は出土の人骨が確認されなければ実証できないところであり確実に知られるところでは、川崎市・夢見ヶ崎横穴墓に留まる。棺室から確認された成人女性骨と幼児骨 7 体分は一見乱雑に見れるものの、「成人女性骨は幼児骨を抱くように横たわっていた」と報告されており、棺室内で先葬者を集骨して埋葬を果したものと思われる。しかしながら幅・長さともに 130 cm規模の棺室横穴墓も存在しており、利用形態の一つとして改葬も考慮されるべきであろう。被葬者集団の特性は副葬品に具現されるところであるが、棺室横穴墓からは顕著な副葬品は検出されてはいない。7 世紀中葉を境としての一層の被葬者階層の拡大によるところと考えられ、古墳時代が終焉する時期的特質と理解される。

註

1　赤星　直忠『鎌倉市史』考古篇　昭和34年
2　甘粕　健　「横浜市市カ尾遺跡群調査の概況」『私たちの考古学』第3巻第4号　昭和32年
3　甘粕　健　「横浜市市カ尾古墳群の発掘」『横浜市史資料編』21　昭和57年
4　古墳時代プロジェクトチーム「横穴墓の研究(1)～(8)」『神奈川の考古学の諸問題Ⅱ』平成7年
『研究紀要1～7』平成8～14年　神奈川県立埋蔵文化財センター
5　長谷川　厚「横穴墓の研究(1)」『神奈川の考古学の諸問題Ⅱ』平成7年
6　鈴木一男・國見徹「大磯町の横穴墓群」『考古論叢・神奈河』第5集　平成8年
7　明石　新　「横穴墓の世界」『平塚市史』別編考古(Ⅰ)　平成11年
8　東国歴史考古学研究所『鎌倉の横穴墓』　平成14年
9　玉川文化財研究所『川崎市内における横穴墓群の調査』　昭和61年
10　山本　清　「横穴の型式と時期について」『島根大学人文科学論集』第11号　昭和37年
11　村上　久和「北九州周辺の横穴墓」『おおいた考古』第4集　平成3年
12　池上　悟　「東国横穴墓の型式と伝播」『おおいた考古』第4集　平成3年
13　(財)忠清文化財研究院『公州・丹芝里横穴墓群』　2004年
14　尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』　昭和41年
15　立正大学考古学研究室『武蔵・熊ヶ谷横穴墓群』・『武蔵・熊ヶ谷東遺跡』　昭和59・61年
16　池上　悟　『東国の横穴式石室と横穴墓』　甎全舎　平成年
17　池上　悟　「礫敷横穴墓の様相」『白門考古学論叢』中央大学考古学会　平成16年
18　池上　悟　「東国横穴墓の型式と交流」『日本古代史叢考』　平成6年
19　小高　幸男『市宿横穴墓群発掘調査報告書』　平成8年
20　村田　文夫「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛」『みちのく発掘』　平成7年
「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛・その後」『民俗と考古の世界』　平成12年
21　村田　文夫「神奈川県・王禅寺白山横穴墓線刻画考」『列島の考古学』　平成10年
22　阿部　黎子「横穴被葬者に関する一考察」『考古学雑誌』第52巻第2号　昭和42年
23　門脇　俊彦「出雲国大井谷横穴群の研究」『私たちの考古学』第8号　昭和31年
24　広瀬　和雄「群集墳論序説」『古代研究』第15号　昭和53年
25　大森　円　「豊前における群集墳造墓単位の分節過程」『古文化談叢』第39集　平成9年
26　水野　敏典「群集墳の一形態としての横穴墓」『古代』第93号　平成4年
27　新納　泉　「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号　昭和58年
28　池上　悟　「南武蔵における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集　平成4年
29　池上　悟　「群集墳としての横穴墓」『日本横穴墓の形成と展開』　平成16年
30　池上　悟　「展開期横穴墓の様相」『立正史学』第89号　平成13年度
31　滝沢　亮　「横穴群調査の成果と問題点」『横浜市戸塚区桂町遺跡群発掘調査報告書』　昭和54年
32　東原　信行「川崎市夢見ヶ崎横穴墓発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』17　昭和56年
33　近野　正幸「横穴墓の研究(4)」『研究紀要3』平成10年　神奈川県立埋蔵文化財センター
34　東国歴史考古学研究所「二ノ谷横穴群」「岩瀬上耕地遺跡」『鎌倉の横穴墓』　平成14年
35　池上　悟　「東北横穴墓型式の成立と展開」『立正大学文学部研究紀要』第14号　平成10年
36　新井清・持田春吉「川崎市津田山横穴群概要」『考古たちばな』第5・6号　昭和41年
37　池上　悟　「千葉県北部の横穴墓」『多知波奈考古』第3号　平成9年
38　池上　悟　「南武蔵における後期古墳出土の鉄鏃について」『多知波奈考古』第2号　平成9年
39　岩本　義雄『横浜市戸塚区独川流域の横穴群について』鵠沼女子高等学校地歴研究部
40　佐野　大和「横浜市戸塚区七石山横穴古墳群及滝ヶ久保横穴古墳群の調査」『七石山遺跡調査報告書(1)』昭和44年
41　明星大学考古学研究部『長谷久保遺跡・七石山横穴群』　昭和55年
42　上田　薫　「高棺座について」『神奈川考古』第25号　平成元年
43　池上　悟　「南井戸窪横穴墓群実測調査報告」『大磯町史研究』第7号　平成12年
44　池上　悟　「小黒谷横穴群の調査」『小黒谷遺跡発掘調査概報』中央大学考古学研究会　昭和48年
45　伊東　秀吉「川崎市下作延日向横穴古墳調査報告」『川崎市文化財調査集録』第2集　昭和41年
46　池上　悟　「展開期横穴墓の様相」『立正史学』第89号　平成13年度
47　松本昌久・上野恵司「千葉県内の横穴墓群」『関東横穴墓遺跡検討会資料』茨城県考古学協会　平成3年
48　近野　正幸「横穴墓の研究(4)」『研究紀要3』平成10年　神奈川県立埋蔵文化財センター
49　千葉県『千葉県史料』(原始古代編・上総国)　昭和42年
50　国学院大学文学部考古学研究室『森山塚』　昭和59年

平成１６年度考古学入門講座

講座担当役員　曽根博明・大坪宣雄・田村良照・滝沢晶子・上原正人（幹事）

平成１６年度考古学講座

神奈川の横穴墓

編　集　神奈川県考古学会講座担当

発　行　神奈川県考古学会

印　刷　株式会社　グラフ　TEL0463-54-8000

平成１７（２００５）年２月６日